和尚の膝下に侍して親く其の鉗鎚に觸るゝことを得たり、故に十二時中閑功夫に涉らざるの地に達すその大慈恩を思へば感激に堪えませぬといふ御答である。

見來ること、細やかなりと雖も、妙用底に會しけるに似たり。故に、重ねて試みんとて曰く。奴兒婢子誰が家の屋裏にか無からんと。使ひ來り使ひ去るやつこ、誰が家にか無からんと。師曰く和尚年尊、他を闕くことは不可なり、と。既に老老大大として俗塵に混ぜざる者あり。其の體、妙明にして卒に相離れず、故に曰ふ、和尚年尊他を闕くことは不可なりと、恁麼に見來ることは實に精到ならずといふこと無し。故に曰く恁麼に慇懃なることを得たりと。芙蓉楷祖の禪道を見來ることは實に細やかにして其の參究着實なりと雖も、猶ほ上來下去總に徒然ならずの一語を單に禪機の妙用、大道の作用底に會得しけるに似たりと思はる節なきに非ず、若し然らば體と用とを別ち一義と二義とを兩段して早く既に分別の窩中に墮在することを免れぬ。投子禪師の接得は無孔の鐵槌重ねて槌を下すの槩あり、故に重ねて試みんとて、奴兒婢子誰が家の屋裏にか無からん、汝の見處は下女下男の其の主に服從するが如くには非ざるか、和尚の左右に在りては理合に此の如くなるべしとは、如何にも從順の如くなるも禪門に於ては千聖の路頭を坐斷し群魔の境界を打破する底の力量を要す、毘盧の頂顎をも驀過し師僧の鼻孔をも捏轉するの威氣が無けねばならぬ、柔らかな言葉の樣であるが獅子王が萬仞崖頭より獅兒を蹴落すの勢を以て使ひ來り使ひ去る奴誰が家にか無からんと抑へられた。處が芙蓉は飽までも泰然自若少しも語路に轉ぜられず、和尚年尊他を闕くこと不可なりとの挨拶である、年尊とは老年のこと敬老の意味から尊といふた、老年の身には是非召使ひが必要である、召使ひなればとて人格を輕視し玉ふな、箇々壁立萬仞である、臣は君に奉し子は父に順ず、その儘が唯我獨尊である體用主伴の別を執して見るべきでは無い。既に老老大大として大尊貴生である、世俗の紅塵に混ぜざるものあり、その體は妙にして迷悟の情量を超え明にして煩惱の黑暗を出づ、然れども彼の下婢奴兒とは卒に相離れず、到り得還り來つて別事なし廬山は烟雨浙江は潮、主中に賓あり賓中に主あり、賓主圓融して無礙法界である、芙蓉は恁麼に大道を見破し來ることは實に精密周到ならずといふこと無し、投子禪師は是に於てか其の悟道を印可し玉ひ、故に曰く恁麼に慇懃なることを得たりと證明せられた、慇懃は委曲の貌鄭重の意である、汝は實に道に奉ずること鄭重を極め道を說くこと委曲を盡せり、斯くあつてこそ安じて我が大法を附囑するに堪えたり。

曠大劫より、以來、擔來しもてゆき、暫らくも相離れず。恩力を受け來ること多時なり。此の恩を比せんとする、鐵圍大須彌も比すること能はず。此の德を抗ぶるに、四海九州も比すること能はず。其の故は何ぞ。迷盧、日月、大海、江河、悉く時移りもてゆく。此の老和尚の恩は卒に成敗に非ず。故に時として其の惠を蒙らざる時なし。徒に生じ徒に死して、一度尊顏を拜したてまつらざる、永く不孝の者として、久しく生死海に沈淪す。若し精細にして、僅に見得せば、千生萬劫の洪恩、一時に報じ盡し畢りぬ。故に曰く恩を報ずるに分ありと。

以下は前を承けて、和尚を以て直ちに大道の異名と見ての御示しである、此の大道たる老和尚の大恩は實に無邊無際である、天地も道に由て生じ萬物も道に由て成り、國も道に由て治まり人も道に由て尊し、火の熱する風の動搖する水の濕へる地の堅固なる、皆な此の道に由らざるは無し、佛は道を得て萬德を成じ、菩薩は道を行ふて群生を度す。一世や二世に止まらず百生千生に止まらず、無始久遠なる曠大劫より以來此の道の大恩を擔來しもてゆき暫くも相離れずして其の恩力を受け來ること多時なり、吾々の此の身心此の衣食此の國土、此の智能、此の德器皆な道の賜である。此の大恩を比較せんとするに鐵圍山大須彌山の高さも比すること能はず、鐵圍須彌は長阿含經等の說く所に依れば、此の世界の中心に須彌山あり須彌は譯して妙高といふ八の山ありて外を遶り大鐵圍山ありて周廻圍繞すといふ、又この道の德を抗ぶるに、四海九州の廣さも比すること能はず、四海は爾雅に九夷八狄七戎六蠻之を四海といふ其の居る所皆海に近きが故なり、九州は禹の洪水を治めて州を九分して開きし處なり何れも道の廣大なるを示されたものである。其の故は、何ぞといふに、迷盧(須彌山の事)日月大海、江河の如きは悉く時と興に移りもてゆくものにして、縱ひ惜むとも惜みはつべきものに非ず。然るに此の大道なる老和尚の大恩は無限の空間に滿ち無限の時間を貫きて無始無終なるを以て卒に萬物と共に成立したり敗滅したりするものにあらず、故に過去に於ても現在に於ても未來に於ても時として其の恩惠を蒙らざる時なし。然るに一般凡夫の悲しさは道の中に在り乍ら道を忘れ恩澤を蒙むり乍ら恩を感ぜず、是を以て生死に迷ひ煩惱に役せられて醉生夢死の群に墮在す、斯く徒に生じ徒に死して一度も大道の尊顏を拜し奉らざるを以て永く道に辜ける不孝の者として久しく生死の大海に沈沒淪落するは實に悲しからずや、若し此の意を自覺し參學を精細にして僅に大道の尊貴なることを見得

せば、脱然として迷衢を出で驀然として生死を離れ身自から、道に合し心自から道に融ずるを以て、千生萬劫の洪恩も一時に報じ盡し畢りぬべし、故に曰く恩を報ずるに分あり、聊か御恩に報ゆることが出來ましたと答へられたのである。此の大道の恩に報ゆる底の人は必ず佛心を體得して佛恩に報じ、人道を遵守して君父の德に報ゆるものである。

是の如く、見來ること精細なるに依りて、住して後、僧問ふ。胡茄の曲子五音に墮せず、韻青霄を出づ、請ふ師吹唱せよ。師曰く、木鷄、夜半に啼き鐵鳳、天明に叫ぶ。曰く恁麼ならば一句の曲に千古の韻を含み、滿堂の雲水盡く知音なり。師曰く無舌の童兒能く繼和す。是の如く純熟して眼を掩ふ青山なく、耳を洗ふ清泉なし。故に利を見名を見ること眼中に屑を著るに似たり。色を見聲を聞くこと石上に華を栽るに似たり。故に足遂に門閫を踰えず。誓て赴齋せず。他の來るをも厭はず。去るをも厭はず。其の衆、時に隨ひて多少定まらず。日食粥一盂なり。粥と作して足らざるときは則ち只だ米湯のみなり。洞家の宗旨、此に到りて繁興す。其の見來ること、親しく、保持錯まらざるに依りて、先聖の付囑を忘れず。古佛の家訓を學し來ること是の如くなりしに、尙ほ道ふ、山僧行業取ること無くして山門に主たることを恭ふす。豈に坐ながら常住を費して、頓に先聖の付囑を忘るべけんや。今者輙ち古人の住持たるの體例に做つて、乃至、山僧古聖の做處を說著するに至る每に便ち覺ふ、身を容るるに地無きことを。慚愧す後人の軟弱なることをと。

此の一段は芙蓉楷祖の行持と家訓とを述べて眞實報恩の儀表を示されたものである。芙蓉楷祖は是の如く大道を見來ること精確細密なるに依りて其の行持の高潔なること千古に卓越せられた、住山せられて後に一僧あり乃ち問ふ、胡茄の曲子五音に墮せず、韻青霄を出づ請ふ師吹唱せよ、胡茄は說文に胡人蘆葉を捲き之を吹くとある、茄はこまぶえと訓ず、五音は宮商角徵羽の五の音調なり、韻は音の和らぐをいふ、青霄は雲氣なり、胡國の曲は五音の調子に合せず而も其の聲音は天外に響くといふ、是れ我が禪風の敎外別傳なるに比す、達磨門下の宗風は五時八敎の型に墮ちぬ、其の曲高く常規を超ゆ。是の如きの妙調請ふ爲めに吹唱せよ、師曰く、木製の雞が眞夜半時を報じて啼き、鐵作の鳳凰が

天明に烟に和して叫ぶ、情を以て測るべからず智を以て判ずべからず、須らく知見と情慮とを脫落して直下に占取すべし、僧曰く、果して恁麼ならば此の一句の曲に千古の韻を含みて古今を空じ人境を忘じ、八萬の法門も此の一句子に攝し、三世の諸佛も此の一句子に歸し、俱胝の一指頭、洞山の麻三片、直下蓋天蓋地の全體妙用である。左すれば滿堂の雲衆水衆盡く知音にして一箇の大道に漏るゝ者はあらじ、此の僧の見解頗る端的を得て居る。故に師曰く、無舌の童兒能く繼和す、舌の無い童兒が能く胡茄の調子を繼で唱和す、乃ち時れ言外の妙訣を說破し得たることを證明せられた。楷祖の境界は是の如く純と雜氣なく熟と圓熟して、眼を掩ふ青山なく、山色前に列なるも未だ曾て禪眼を礙えず、耳を洗ふ淸泉なし、淸泉傍を流るゝも未だ曾て禪耳に觸れず。故に楷祖の示衆に曰く、天外の青山色寡く耳畔の鳴泉聲なし、嶺上猿啼て露は中霄の月を濕ほし林間鶴唳て風は淸曉の松を回る云云と。故に利を見名を見ること眼中に屑のすりくづを著るに似たり、却て非常なる邪魔物とせられた、又色を見聲を聞くことも、石の上に華を栽るに似たり、少しも種子を留めぬ、見聞その儘の脫落である、是れ楷祖の示衆に「直に須らく兩頭撒開し中間放下し、聲に遇ひ色に遇ふも石上に華を栽るが如く、利を見名を見るも眼中に屑を著るに似るべし」とあるに據る。故に足遂に門閫を跨えずして常に山中に禪居せられ、誓ひて檀越の請に應じて齋に赴くことを爲さず、他の來り參ずるをも厭はずして之を接し、その去るをも厭はずして糟糠を去て米白を事とせられた。故に其の衆僧の如きも、時に隨ひて多少定まらず、唯だ專ら家風の純眞を努められた、飯を作るに不足なれば粥を作り、粥と作して足らざるときは唯だ米湯と作して喫するのみなり。故に楷祖の示衆に諸人と議定して更に山を下らず齋に赴かず化主を發せず、唯だ本院の莊課一歲の所得を持て均しく三百六十分と作し日に一分を取て之を用ゆ、更に人に隨て添減せず、以て飯に備ふべくんば則ち飯と作し飯と作して足らざれば粥と作す粥と作して足らざれば米湯と作す、新到の相見茶湯のみ更に煎點せず唯だ一茶堂を置き自ら去て取り用ゐ、務めて緣を省き專一に辨道せんことを要す」とある。桃李言はずして下自づから蹊を成す、洞家の宗旨此に到りて繁昌興起す、其の大道を見來ること最も親しく、佛祖の家風を保持すること錯まらざるに依りて、先聖の付囑し玉へる旨を忘れず、古佛の後世に遺し玉へる家訓を學得し來ること、是の如く親切なりしに拘はらず、猶ほ自ら安ぜられずして、衆に示して道ふ、山僧の行持事業一も取ること無くして漫りに山門に主人公たることを忝ふす、豈に坐ながら常住物を費して頓に先聖古佛の付屬し玉へる遺訓を忘るべけんや、今者輙ち古人の佛法に住持せられたるの體裁儀例に倣ふて行持を全ふせんとす、以下前に錄したる諸人と議定云云の示衆の文を略して乃至といふ、山僧は古聖先德の倣されたる處の行業を說著するに至る每に、深く自ら反省して我が德の足らずして我が行の全たから

ざるを顧みて、便ち覺ふ身を容るゝに地なきことを、同時に後人の氣力行願の甚だ軟弱なることを慚愧すと仰せられた。芙蓉楷祖は實に是の如き心操にてありしかば、皇帝より定照禪師の號と紫袍とを賜はりしも固辭して之を受けず、帝再で璽書を齎らして意を諭さしめたるも猶ほ峻拒して應ぜず、帝其の無禮を怒て獄に付せり、隨分亂暴な處置であつた。有司之を憐れみ、長老疾ありや若し疾ありと言はゞ罪を免ぜん、師曰く平日疾ありしも今は實に無し、我れ豈に敢て僥倖して疾と稱して罪譴を脱することを求むべけんや、遂に罰を受け、縫掖を著て淄州に編管せらる、都城の道俗見る者流涕す、明年敕して放免せらる、便ち芙蓉湖上に菴す學者益親しむ、帝所居の額を賜ふて華嚴禪寺と曰ふ、是の如き淨行聖跡擧て數へ難し、眞に是れ絶代の古佛である。

抑も恭く九代の法孫として、なまじゐに宗風を唱へ、二六時中の行履、後人の表榜とするに足らず。四威儀の中用心悉く以て迂曲なり。何の面目ありてか三箇五箇の雲衲に對し、一句半句を施説することあらん。慚づべし愧づべし。恐るべし懼るべし。曩祖の照覽、先聖の冥見、然も是の如くなりと雖も、諸參學人忝なく、芙蓉楷禪師の遠孫として、既に永平門下の一族なり。須からく子細に心地を明辨して低細に用心し、一毫髮の名利の思なく、一微塵の憍慢の心なくして、親く心術を定め、細やかに身儀を調へて、到るべきに到り、究むべきを究めて、一生參學の事を辨じ、曩祖囑累の事を忘ることなくして、歩を先聖に繼ぎ、眸を古佛に交えて、設ひ末世澆運なりと雖も、市中に虎を見る分あるべし。若しは笠下に金を得る人あるべし。至禱至禱。

以下は芙蓉楷祖の勝躅に基ける太祖徹悃の垂訓である、乃ち太祖の仰せに、抑も吾は忝くも楷祖より九代の法孫として、なまじゐに是非なく自ら强て諸大衆の爲めに宗風を唱へ居るも、二六時中即ち十二時中の行履は中々以て後世の人の表榜とするに足らず、表榜の榜はたてふだで諸人の目標とすることと、猶ほ模範といふが如し、行住坐臥の威儀の中に於ける用心も悉く以て迂曲なり、迂曲は迂はまはると訓じ廻り遠くくねり曲つて適切ならざるをいふ、何の面目ありてか三箇五箇の雲衲に對して一句半句に佛法を施して説示することあらん、實に自ら顧みれば慚づべし愧づべし、その罪過を慮へば

恐るべし懼るべし、曩祖大寂定中の御照覽、先聖の冥々裡に於ける御洞見、果して何をみそなはせ玉ふらん。然も是の如くなりと雖も、諸の參學の人忝なくも芙蓉道楷禪師の遠孫として、既に永平門下の一族なり、實に是れ難値難遇の因緣に非ずや、須らく大道心を發して子細に心地を開明し究辨して、低細に隅々迄も遺す所なく細やかに用心し、一毫髮の名利の思もなく一微塵の憍慢の心もなくして、親しく心術を定め細やかに身儀を整へて、身心俱に佛祖の遺訓に一如して益〻大道を欣求せねばならぬ、凡そ道心を攪亂する者は名利の妄想である、憍慢は進歩を妨げ品性を醜劣ならしむ、心術の術は法なり道なりと註して一心に於て守る所あるを心術といふ。斯くして精進不退に究理辨道して到るべきに到り、究むべきを究めて一生參學の大事を成辨し、曩祖の囑累し玉へる正法紹隆の事を忘るゝことなくして、修行の歩を先聖に續ぎ、知見の眸りを古佛に交えて、行解相應にし去りなば、縱ひ末世の今日法運澆薄なりと雖も求道の志念にして堅固不動ならば、市街の中に虎を見るが如く、紛々たる塵世に於て佛界無上の大威德を體得するの分あるべし、若しくは破笠を被むり芒鞋を穿つの下に於て萬兩の黃金を得る底の人あるべし、此の兩語は俱に奇遇奇緣の意味にて感應道交の得益あるをいふ。尤も市虎の事は戰國策に、「龐葱、太子と邯單に質たり、魏王に謂て曰く、今一人言ふ市に虎ありと王之を信ずるかと、王曰く否、二人虎ありと言ふ王之を信ずるかと、王曰く寡人之を疑ふ、三人市に虎ありと言ふ王之を信ずるか、王曰く寡人之を信ず、龐葱曰く、夫れ市に虎なきは明らかなり然り而して三人之を言へば虎を成す、今邯單は大梁を去ること市より遠し而して臣を議する者三人よりも過ぐ願くは王之を察せよと」あるに據る、併し今は只だ感應の奇緣あるに比せられたのである、至禱とは心より汝等に對して希望するぞとの御教誨、再び至禱と仰せられたるは徹骨徹髓の御慈慮である。

且く道へ、如何んが適來の因緣を擧着せん。

紅粉不施醜難露。　自愛瑩明玉骨粧。

適來は前來といふに同じ、芙蓉楷祖證契即通の因緣如何んが擧着し去らん、着は助字と見よ、次に例に依て七言二句の頌を擧げて、紅粉施さず醜露はれ難し、自ら愛す螢明玉骨の粧と示して芙蓉楷祖の眞面目を打開せられた。佛祖の言句は家常の茶飯事である、更に向上の心要あり、言句を以て示すべきに非ず情慮を以て測るべきに非ず、然れども我れ從來汝に藏さず、堂々として天地に充滿し明々として萬法に彌綸す、其の體や眞なり其の相や美なり其の用や善なり、其の狀恰も翠黛峨眉纖月淡し春風滿面に桃紅なりとも謂つべき絕世の美人の空中に麗はしく立てるが如く、智慧德相悉く備りて一

點の不是處は無い、而も何等紅粉を施さず天眞獨朗であるから、內外玲瓏なるを以て少しも醜惡姿は露はれぬ、露はるべき醜惡の相は微塵計りも無いのである、這裏に到りては凡夫とか聖者とか大乘とか小乘とか世間とか出世間とかいふ莊飾を添へることは用不著である。永嘉大師は、「絕學無爲の閑道人、妄想を除かず眞を求めず」とも、「一法を見ざれば即ち如來、方に名けて觀自在と爲すことを得」とも歌はれた。楷祖は直下に此の天眞の美に接觸せられた、否な楷祖の全身が即ち美人である、故に自ら愛す瑩明と光り輝く氷肌玉骨の粧、所謂唯獨自明了、餘人所不見で、自らが自らを愛し自らを樂む、而して其の愛や神聖にして其の樂しみや極まり無し、即ち自受用法樂、大安心の境致である。粥飯の作務も報恩の行持も楷祖が生涯を通じての活計も盡く是れ自受用三昧の風流ならざるは無い。凡夫は自己と道と融合せざるが故に苦しんで精進ず、至人は大道と身心とが一如なるが故に樂しんで行持す、行も亦禪坐も亦禪、語默動靜體安然であるから、日常の言語威儀盡く大道の光輝を放ち、無爲にして能く萬世の後をも照破せらるゝのである。

第四十六章

第四十六祖。丹霞淳禪師。問芙蓉曰。如何是從上諸聖相授底一句。蓉曰喚作一句來幾埋沒宗風。師於言下大悟。

本則の宗旨は太祖の慈訓に就て參究すべし。

師、諱は子淳。劍州賈氏の子なり。弱冠にして出家し、芙蓉の室に徹證す。

初め雪峯に住し後に丹霞に住す。

師の諱は子淳、劍州賈氏の子なり、弱冠即ち二十歲にして出家せらる、弱冠は禮記の曲禮に、人生れて十年を幼と曰ひ學ぶ、二十を弱と曰ひ冠す三十を壯と曰ひ室あり、四十を强と曰ひ仕ふとある、芙蓉楷祖の室に入て徹底證悟す、初め雪峯山に住し、後に丹霞山に住せられた。

其の最初の咨問に曰く。如何なるか是れ從上の諸聖相授底の一句と。佛佛祖祖換面回頭し來れども、必ず背面なく上下なく邊表なく自他なく、相授底あり。之を呼で不空の空と名く。即ち是れ、諸人實歸の處なり。箇箇悉く具足圓滿せずといふこと無し。然るを學者、多く錯りて本來無物と思ひ、更に口に言ふべきことなく、心に存すべきことなしと。夫れ是の如くなるを名けて古人落空亡の外道とす。塵沙劫を經ると雖も、都て解脱の分なし。故に精細綿密にして、須らく一切皆盡て空空なりと雖も、更に空ずること得ざる底の物あり。子細に參徹して、若し一度覷得破せば、必ず一句を弄し得て通じ來ることあらん。故に相授底の一句といふ。

丹霞禪師の芙蓉楷祖に見ゆるや、其の最初の咨問に曰く、咨ははかると訓じ疑問を呈して解決を求むること、如何なるか是れ從上、古來よりの諸の聖賢が面授面稟して相授くる底の一句と問はれた、是れ實に佛祖屋裏の一大事である、佛佛祖祖三世に渉りて無數である、七佛といひ列祖といひ種々に面目を換へ頭腦を轉回し各々其の容貌風彩家風機關を異にし來れども、畢竟一大圓鏡裏の影像であるから、必ず背後面前の別なく、上智下愚の隔てなく、表面、邊旁の差もなく、自法他法の彊もなく、十方の智者皆な此の宗に入るを以て更に異宗なし、千佛萬祖一法の所印なるが故に更に異法なし、異宗なきの宗、異法なきの法を面授面稟して今に至る。是の如き相授底あり、之を喚で不空の空と名く、相授底の正法あるを以て不空といふ、自他邊表の差別なきを以て空といふ、此の不空の空が即ち是れ諸人の眞實歸着の處なり、諸佛は之を證して菩提を成じ、諸祖は之を學して心法々傳へ、吾人は之を修して智德を莊嚴す、此の法は人々分上ゆたかに具はれるを以て箇々悉く具足圓滿せずといふこと無し、乃ち一切衆生悉有佛性である。然るを胡亂なる參學者多く錯りて、本來物なしと思ひて空見に墮在し、更に口に言ふべきこと無く心に存すべきこと無しと稱して實參實究することを知らず、夫れ是の如く輕しく妄計速斷して邪見なるを名けて古人は落空亡の外道とす、落空亡とは漫りに一切を撥無する斷見の外道である、若しも此等の邪計を執すれば必ずや修行を怠たり參究を廢し只だ見知に誇りて益々罪累を重ぬるに至るべきを以て、塵沙の如く無數なる劫數を經ると雖も都て解脱の分なし。永嘉大師は「無間の業を招かざることを得んと欲せば如來の正法輪を謗すること莫れ」と又「豁達の空は因果を撥ふ莽々蕩々として殃禍を招ぐ」とも誡められた。故に佛祖の兒孫たる者は、其の工夫を

精細にして粗略ならず其の行持を綿密にして放漫ならず、須らく一切の凡聖迷悟得失是非皆な盡きて空空眞寂なりと雖も「取ること得ず捨ること得ず不可得の中只麽に得たり」とあるが如く、人境空じ盡して空も亦空ずる時、更に空ずることを得ざる底の物ありといふことを體認するが宜い、子細に此の空不得底に參徹して、若し一度此の事を覷得破せば、必ず一句を拈弄し得て自在に通達し來ることあらん、故に相授底の一句といふたのである。

時に芙蓉示して曰く。喚で一句と作し來らば幾くか宗風を埋沒せんと。實に是れ這箇の田地喚で一句とすべきに非ず。錯りて名言を下す。雪上に鳥跡あるに似たり。故に謂ふ。藏身の處に跡なしと。實に見聞覺知悉く息み、皮肉骨髓皆な盡て後、更に何物の跡とすべきかあらん。若し能く一毫髮も、跡を爲さざれば、果然として顯はれ來る。他の知る所に非ず。故に相授くるの處に非ず。然れども、此の田地、會得する時、喚で以心傳心と謂ふ。此の時是れ君臣道合すと謂ふ。妙叶兼帶なり。

其の時に芙蓉楷祖示して曰く、喚で一句と作し來らば早く是れ蛇足、恰も虛空に影を捉ふるに似たり、僅に一句底の法を認着すれば、隱々地に一物あり、此の一物こそ無量劫來生死の本となるなれ、故に維摩居士は「生滅の心行を以て實相の法を說くこと無かれ」といふた、若し生滅の心行を以て一句底の法を固執せば、幾くか我が佛祖正傳の宗風を埋沒せんと示された。實に是れ這箇の田地、即ち諸佛平等の妙性、衆生本具の那一物、喚で一句とも爲すべきにあらず、若しも錯りて名字言詮を下して一物の存在を執する時は、恰も白雪の上に鳥足の泥沙の跡あるに似たり、所謂一物鎭長靈の漢となりて皎潔たる大道に一汚點を付するものと謂ふべし。故に古の船子禪師は其の資夾山に囑して曰ふ、汝向後直に須らく身を藏す處蹤跡なく、沒蹤跡の處身を藏すこと莫るべしと、即ち身を藏す處にも跡なしと曰はれた。實に此の境致に至りては、見聞覺知の意識情量も悉く息み、皮肉骨髓の形骸も皆な盡きて、更に何物の跡として認むべきかあらん、若し能く一毫髮も跡を爲さざれば、其の時果然として心地の光明顯はれ來るであろう、此の大光明は他人の能く識る所に非ず、全く唯獨自明了餘人所不見である。故に相授くると稱すべき處にも非ず、然れども此の田地を會得する時を喚で、以心傳心と謂ふのである、彼の世尊の拈花迦葉の微笑の如き、世尊一物をも授けず迦葉一法をも受けず、而して其の間に正法眼藏の命脈不斷である、此の時是れ君臣道合すとも謂ふのである、君は君の位に住して

獨尊たり、臣は臣の位に在りて獨立す、而して其の間君道臣道融合一致して威な其の德を一にして居る、是れ則ち我が宗乘の極則たる妙叶兼帶なり、洞山大師は正中妙叶と言はれた、正偏回互君臣道合して正に片寄らず偏に片寄らず中道に安住するを正中とも妙叶ともいふ、正に偏を兼ね偏に正を帶びて圓明寂照なるは兼帶である、洞山五位の兼中到是れなり。

且く道へ、此の田地如何なる形段なりとかせん。

清風數匝縱搖地　誰把將來爲汝看

且く道へ、此の妙叶兼帶以心傳心の田地は畢竟如何なる形段即ち樣子なりとかせん、次に七言二句の頌を示された。乃ち、清風數ば匝て縱ひ地を搖すも、誰か把り將ち來て汝が爲めに看せしめん、清風が數ば地を匝つて縱ひ大地を搖かすの威力あるも、誰が能く此の清風を把り將ち來りて汝が爲めに看せしめん、風は山に在りては樹木を折り海に在りては怒濤を起すの力あるも、之を捉へて人に看せしむることは出來ぬ。相授底の大道は所謂物あり天地に先だち能く萬象の主と爲る、天に在りては日月星辰、地に在りては森羅萬象皆な大道の活潑々地であるが、之を執らんとすれば不可得である、空にして空ならず色にして色ならず、有句無句終に物を得ず、古人は之を莖草の味に喩へ金剛の杵に喩ふ、宜く大禪定に住して一切を放下し了るに非ざれば此の事を體得すること難し、諸人者試みに意根を坐斷して回光返照して看よ、坐禪用心記には、妄緣盡る時安心隨て滅す、妄心若し滅すれば不變の體現ず、了々として常に知る寂滅の法に非ずと垂示せられた、參禪上第一の用心は全く此に在ることを忘れてはならぬ。

第四十七章

第四十七祖。悟空禪師。參丹霞。霞問如何是空劫已前自己。師擬對。霞曰爾聞在且去。一日登鉢盂峯、豁然契悟。

以上本則、須らく太祖の提唱に參じて其の玄旨を究むべし。

師、諱は清了。道號を眞歇と曰ふ。悟空は禪師號なり。師の母懷に抱き襁褓にして寺に入る。佛を見て喜び眉睫を動ず。咸く之を異とす。年十八にして法華を講ず。得度して成都の大慈に往き、經論を習ひ大意を領ず。蜀を出て江沔漢に至り丹霞の室を扣く。霞問ふ如何なるか是れ空劫已前の自己、乃至豁然として契悟す。徑に歸て霞に侍立す。霞一掌して曰く將に謂へり儞有ることを知ると。師欣然として之を拜す。翌日霞上堂して曰く。日照孤峯翠。月臨溪水寒。祖師玄妙訣。莫向寸心安。と便ち下座す。師直に前で曰く。今日の陞座更に某甲を瞞ずることを得ず。霞曰く儞試に我が今日の陞座を擧し來り看よ。師良久す。霞曰く將に謂へり儞瞥地と。師便ち出づ。後に五臺に遊び京師に之き、汴に浮び、直に長蘆に抵り祖照に謁す。一び語つて契投して命じて侍者と爲す。年を踰えて分座す。未だ幾ならず照、疾と稱して退閑し、師に命じて席を繼がしむ。學者歸するが如し。建炎の末、四明に遊び補陀に主たり。臺には天封に住し閩には雪峯に之き、詔して育王に住す。溫州の龍翔に徙り、抗には徑山に住す。慈寧皇太后。命じて皐寧崇先に開山たらしむ。

師諱は清了、道號を眞歇と曰ふ、悟空は勅賜の禪師號なり、左綿雍氏の子、師の母懷に抱き襁褓にして寺に入る、襁褓は嬰兒のこと襁は幅八寸長一丈二尺、小兒を背に約して負ふに用ゆる帶、褓はむつ

ぎ小兒の被をいふ、佛を見て大に喜びて眉睫を動すを見る、睫はまばたき眉睫を動ずとは眉や目を動かしてその喜びの尋常ならざるをいふ、嬰兒としては如何にも異數であるから衆咸く之を異として不思議がつた、是れが出家の動機となつたものと見える。年十八にして法華を講ず、續傳燈には講を試に作る乃ち試に法華を學された、尋で得度して僧數に入り蜀の都なる成都の大慈寺に往き經論を習ひ忽ちにして大意を領解す、幾もなく蜀を出でて江沔漢の諸州に至り遂に丹霞禪師の室を扣く、霞問ふ、如何なるか是れ空劫已前の自己、乃至、本則に擧げたる問答があつて後、鉢盂峰に登りて豁然として心契悟入せられた。徑に歸つて丹霞の傍に侍立す、丹霞は早く其の證入し了るを見破し、直ちに一掌を與へて曰く、將に謂へり儞有ることを知ると、儞は既に此の事あることを知れりと謂ひしが、未だ愚圖々々して居るかと言はれた、是れは句抑下の意、卓上で表面抑へた樣で非常なる喜びの證明である、故に師は欣然として之を拜す。翌日丹霞は特に上堂して曰く大日輪が何人も攀登し能はざる孤峯を照して山の翠りは一層色を增した、又明月が內外玲瓏たる溪水の流に臨んで其の影を印した爲めに、浮世の煩熱を洗ひ盡して如何にも霜氣を含みたらんが如く寒さを感ずる、是れ正しく眞歇禪師の智慧德相が日月の如くにして宗乘の孤峯を照し曹溪の水底に輝くをいふ、同時に師資面授感應道交の密意を叙べられたのである、祖師門下に於ける室內玄妙の眞訣は小さく狹き寸心に向て安んずること莫れ、宜く悟後の修行に精進して以て智德の大を成ずべしとの慈訓である、斯く言ふて便ち座を下られた。師は直に進前して曰く、今日の陞座に寸心に向て安ずるなと仰せられたが、某甲は既に佛祖の大心に冥合せり、和尙の一語某甲を瞞着することを得ず、丹霞曰く、儞試に我れに今日の陞座に於ける眞意を擧示し來れ、我れ能く點檢して看ん、時に師は良久して一語を發せず只默々として三昧面を呈露せられた。丹霞曰く　將に謂へり儞瞥地と、瞥地の瞥は過目と註してチラット見ること即ち見ることの速かなるをいふ、儞は餘程銳敏ぢやと思ひしに存外遲鈍で此場合一語をも發せんでは無いか、是れも亦意卓上である、大辯は訥の如し遲鈍の如く見ゆるのが眞の上々の機である。師便ち出でて後に五臺山に遊び京師に之き、汴水に浮び直に長蘆山に抵り祖照禪師に謁す。一び語を交ふるや忽ちに心心契投す、祖照は命じて侍者と爲し年を踰えて半座を分ちて首座に請して接化を助けしむ、未だ幾ならずして祖照は疾と稱して長蘆を退き閑居の身となり、師に命じて主席を繼がしむ、四方參學の禪者聚まり來ること百川の海に歸するが如し。南宋建炎の末四明に遊び補陀の主となる、台州にては天封に住す、續傳燈には住を之に作れり、閩州にては雪峯に之き、後、詔命に依りて育王山に住す、溫州の龍翔寺に徙り、杭州にては徑山に住す、續傳燈には住を之に作れり、慈寧皇太后の歸依淺からず命じて皐寧崇先に開山とせられた。師は有名なる天童宏智禪師と法兄弟である、當時臨濟下の大慧宗

果禪師徑山に在て盛に宗風を唱ふ、曹洞臨濟の派流各々其の派の家風に誇り、遂に默照看話の閑名目を立つるに至る、從つて禪風弊を生じ正傳の佛法動もすれば毀損せられんとす、師之を憐れみ信心銘拈古を著はして至純の宗風を提示せらる。更に無盡燈記なるものあり、洵に是れ萬世の龜鑑たり其の記に曰く、東平鏡を打破し已て三百餘年、龍潭、燈を吹き滅して復た四百餘載、後代の子孫正眼に迷ふ、以謂く鏡破れ燈滅すと、而も知らず、行住坐臥大光明を放ちて燈未だ曾て滅せず、見聞覺知虛鑑萬像、鏡未だ曾て破れざることを、燈景なしと雖も能く生死の長夜を照し、鏡臺なしと雖も能く生死の魔惑を辨ず、鏡と燈と光光常に寂、明と鑑と幻幻皆な如なり、之を照して窮まり無き則ち無盡燈と曰ふ云々、向下文長し須らく拜覽して討究すべし。

實に襁褓の昔より、不羣にして他に異なり、然も尙ほ參禪の志を運ぶに、功夫尙ほ忙はしきことあり。故に空劫以前の自己を問し時、答へんと擬す。丹霞肯ふことなし。且く去らしむ。一日鉢盂峯頂に登りて、十方壁落なく四面また門なし。十方目前なる時に到りて承當す。故に歸り來りて一言を通ぜず、且く侍立す。丹霞彼が、有ることを知りぬることを知りて曰く。將に謂へり爾有ることを知ると。時に喜んで禮拜す。丹霞卒に上堂して證明す。後に出世して、上堂に曰く。我れ先師の一掌下に於て伎倆俱に盡きて、箇の開口の處を覓むれども得べからず。如今還て恁麼の快活不徹底の漢ありや。若し鐵を銜み鞍を負ふこと無くんば、各自に便を著けよと。

眞歇禪師は眞の大善知識である、實に襁褓のむかしより一般の兒童に群ぜず自から他に異なるものあり、正に是れ古佛の再來なるべし、然も尙ほ參禪の志を運ぶに研究工夫尙ほ忙はしきことありて十二時中頭燃を救ふが如く辨道せられた。その工夫の標的は空劫已前の自己を究辨するに在り、空劫といふは此の世界の始終を以て成劫住劫壞劫空劫の四大時期に分ち、成劫は成立の時代、住劫は存續の時代、壞劫は壞崩の時代、空劫は滅盡の時代、然れども自己の大生命は此の四劫と與に變轉せぬ、無始無終不生不滅である、是を空劫已前の自己と稱す、猶ほ父母未生已前天地未分以前の自己といふが如し。師は丹霞に相見の時、丹霞は驀頭より此の大疑問を提起して其の見處を徵せられた、其の時師は之に對へんと擬す、丹霞は一見して師の肺肝までも勘破して、儞閣しきこと在り、餘りに狼狽過ぎる

では無いか、まあ〳〵氣を揉まずと且く彼方へ往けといふて去らしむ、是れ實に慈悲徹悃の接得である。師一日鉢盂峰の頂に登りて、高く雲外に獨立せる時、十方に壁落なく四面また門なし、落は絡に同じ牆壁などありて前後を鎖すこと、眼界洞豁微塵も礙ゆる物なく十方一目の前に展開する時に至りて、忽然として自己に承當することを得たり、承當は承認し契當するの意で確實に悟了するをいふ、故に歸り來りて丹霞の傍に至り、更に一言を通ぜず、只だ且く侍立す、丹霞は早くも彼が有ること知りぬる事を知りて曰く、將に謂へり、儞有ることを知ると、師時に喜んで禮拜す、迦葉の微笑と一般である。丹霞卒に上堂して公然大衆に向て之を證明す。師後に出世して上堂せられし時に曰く、我れ先師丹霞禪師の一掌下に於て智慮計畫の伎倆俱に盡きて何か言はんとせしも箇の口を開くべき處を覓むともそれすら得べからず、遂に無對にして去て單に禮拜のみ致した、伎倆は人の智計をいふ俗に手並の意、如今此の大衆中還て恁麼の快活不徹にし得る底の漢ありや、快活不徹とは愉快で活々とした元氣があつて何とも言はれぬ心持といふこと、即ち欣然として法喜禪悅に充ちたる狀態である、若し汝等にして馬の鐵を銜み鞍を負ふが如き束縛を蒙ること無くんば、各自に工夫一番して此の機會に於て自己覺了の便を著けよとの勸誡である。馬には千里を走るの能力ありても口に鐵を銜み背に鞍を負ひ他の手中に役せらるる時は全く自由の分が無い、吾人も亦名相に惑ひ分別に勞するに於ては對面千里遂に佛法を會得すること能はず、宜しく一切の累縛を解脫して空劫以前の自己に承當せねばならぬ。

實に夫れ　師の相見する所、劫前に歩を運び、早く本地の風光を顯はし來る。若し末だ此の田地を看見し得ずんば、千萬年の間、坐して言ふことなく、兀兀として枯木の如く死灰の如くなりとも、是れ何の用ぞ。然も空劫已前と云ふを聞きて、人人錯りて思ふことあり。謂ゆる自もなく他もなく前もなく後もなく、生滅もなく生佛もなし。呼で一とも謂ふべからず。二とも謂ふべからず。同とも辨せじ。異とも言はじ。是の如く商量計度して、一言も道ひ得ば早く違ひぬと思ひ、一念も返せば、即ち背くべしと思ふて、妄りに枯鬼死底を護り死人の如くなるあり。或は、何事としても相違ふことなし。山と說くも得べし。河と說くも得べし。我と說くも得べし。他と說くも得べし。又曰く。山と道ふも山に非ず。河と道ふも河に非ず。唯だ是れ山なり、唯だ是

れ河なり。是の如く言ふ。是れ何の所要ぞ。悉く皆な邪路に趣く。或は有相に執着し、或は落空亡の見に同くし來るなり。

此の一段は邪計を誡められたのである、實に夫れ古の祖師の其の師に相見する所を見るに、今時門頭を超出して、空劫已前に工夫の歩を運び、早く古今を通じて變異なき本地の風光を顯はし來る、本地とは根本の田地即ち本體といふが如し、色相の上には生死あり去來ありと雖も本體は不變不易である、是を實相と名く、此の實相の風光を徹見せざれば、劫前の自己に承當することは出來ぬ。若し未だ此の本地の風光たる田地を看見し得ずんば、縱ひ千年萬年の間坐禪して、默々として言ふこと無く、兀兀として枯木の如く死したる冷灰の如くなりとも、徒らに死坐を守るのみなれば畢竟じて是れ何の用ぞ、無用の業なるのみ、兀兀は山の動かざる貌、佛法に於て貴ぶ所は求道の大願心と歸佛の大信心とである、若し願心なく信心なき者は坐禪三昧に住すと雖も、只だ是れ一塊の死屍に異ならざるべし。然も空劫已前と道ふを聞きて、禪門の人々も動もすれば錯りて思ふことあり、その邪計を擧ぐれば先づ第一の人は斯く思ふて居る、謂ゆる空劫已前とは一切皆空の謂である、故に自も無く他も無く前の過去も無く後の未來も無く生も無く滅も無く衆生も無く佛もなし、然れば是を喚で一法とも道ふべからず二法なりともいふべからず、同相にして平等とも辨ぜじ、異相にして差別とも言はれじ、是の如く商量計度して殆ど斷見に類する妄計に陷ゐり、一言でも道ひ得ば早く空劫已前の自己に違ひぬべしと思ふて、漫りに枯鬼死底、枯れ果てゝ生氣の無い死したる冥鬼の如くなるを眞の自己と誤認して之を守り、全く死人の如くなる者あり。第二の錯會者は、諸法實相の法門を妄解して、或は何事を爲しても遂に佛法に相ひ違ふこと無し、山と說くも得べし河と說くも得べし、我れと說くも得べし、他と說くも得べし、山は高く水は流れ柳は綠花は紅、皆な其の儘の佛法ぞと唱ふ、是の如き輩は修行の貴むべきを知らず、證悟の重んずべきを心得ず、殆ど自然外道に類する者と謂ふべし。第三の錯會者は金剛經に「衆生といふ者如來衆生に非ずと說く是を衆生と名く」と說き玉ひし如き佛語を邪解する者である、故に又曰く、山と道ふも山に非ず、河と道ふも河に非ず、唯だ是れ山なり唯だ是れ河なり、是の如く言ふて居る、是れ何の所要ぞ、何にが何やらさつぱり解らぬ戲論の言說では無いか、此等の類は悉く皆な邪路に趣く者と謂ふべし、以上三種の邪見ありと雖も、要するに、或は有相に執着して實相の無相なるを知らず、或は落空亡たる淺薄なる空無の見に同くし來るものなり。

此の田地、豈に有無に落つべけんや。故に汝が舌を挿さむ所なく、汝が慮

を廻らす所なし。且つ天に依らず。地に依らず。前後に依らず。脚下蹈む所なくして眼を著けて見よ。必ず少分相應の所あらん。或は曰ふ。軌則を絶す。或は曰ふ。氣息を通ぜずと。悉皆趣向邊の事、遂に己れに背き畢りぬ。何に況んや、月と說き、雪と說き、水と說き、風と說く。皆恐らくは自の目に瞥ありて空華亂れ墜つ。何を呼んで、山とすべき。卒に一法を見ず。何に觸れてか冷煖とせん。卒に一法の汝に與ふるなし。故に木に附き草に附く。世法佛法一時に拂ひ捨て畢りて、更に見來れば果して疑がはじ。

是より以下は正傳の宗旨を提唱せらる、この空劫已前の自己といへる田地は無爲無作の妙境なるが故に豈に有無に落つべけんや、有相無相の論を超出して居る、故に言語を以て說くべからず妄分別を以て圖るべからざるを以て、汝等が舌を插む所も無く、汝等が情慮を廻らすべき所も無し、且つ自他能所の差別なきが故に天にも依らず地にも依らず、過去とか未來とかいふ前後にも依らず、內外一切の境を截斷して脚下にも凡聖迷悟等岐路の踏む處なくして高く眼を著けて見よ、左すれば少分なりとも必ず自己の端的に相應の處あらん、或は曰ふ者あらん、此の端的は一切の軌則を絶するを以て妄想をも除かんとせず眞實をも求めんとせずと、又或は曰ふ者あらん、此の端的は自他を泯絶するを以て、氣息を通ぜず大死人の如くなれと。此等も修行地の上には一度は經過すべき境致なれど、此處に足を留めてはならぬ、乃ち悉皆趣向邊の事といふて、大道に趣向する修行上の過程である、こゝに住著すれば遂には自己に背き畢りぬべし、何に況や目前の境を執して月と說き雪と說き水と說き風と說く、花あり月あり樓臺あり抔と唱ふるも果然として妄想の產物である、皆な恐らくは自分の目に瞥があり て空裏に華の如き物がちら〳〵と亂れ墜つると感ずるが如し、瞥はマゲと讀む即ち眚なり眼に翳を生ずるをいふ、一說に目氣の義ならんといへり、既に空劫已前の自己面なれば、何を呼んでか山と爲すべき又河と爲すべき、卒に一法の見るべき無し、又何に觸れてか冷煖ありとせん、心境不二の當體には卒に一法の汝に與ふる物なし、故に無福の餓鬼が木に附き草に附くを以て生命の託し場處と爲すが如く、所謂寄生蟲となりて自己の獨立を保つことを得ず、妄りに外境に轉ぜらるゝことを致す、此等閑妄想の心鏡に映ずる幻影は世法も佛法も一時に拂ひ捨て畢りて後、進一歩して更に見來れば果して大道に承當して不疑の地に達することを得ん。

内に向ひて見ること勿れ。外に向ひて求むること勿れ。念を靜めんと思ふこと勿れ。形を安からしめんと思ふこと勿れ。唯だ、親しく知り、親しく解し、一時に截斷して暫時坐して見よ。四方に一歩を擧ぐべき所なしと謂ふとも、乾坤に身を挿さむ所なしと謂ふとも、果して汝、他の力を假るべからず。是の如くして見る時、皮肉骨髓汝が爲に分布するなし、生死去來汝を改變するなし。皮膚脱落し盡して唯だ一眞實のみあり。古に輝き今に耀て數量時劫を辨へず。豈に啻だ空劫已前と謂ふのみならんや。都て、此の處前後を辨ふべき所あらず。

此の一段以下は正修行の用心を示されたのである、參禪の第一義は身心脱落に在り、必ず内心に向ひて自我ありと見ること勿れ、外界に向いて別法ありと求むること勿れ、又强て念想を靜めんと思ふこと勿れ、思はじと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はざりけりである、强て形骸を安からしめんと思ふこと勿れ、こゝもまた浮世なりけりよそなから思ひしまゝの山里もがな、安めやうとすれば却て氣に懸るものである。斯くして唯だ親しく自己を識り親しく大道を解し去ることを要す、一切の妄想執着は一時に截斷して暫時なりとも端坐して見よ、此の時こそ、四方空寂にして何れに向つても一歩を擧ぐべき所なしと謂ふとも、又乾坤裂破して其の間に我が身を挾さみ置くべき所なしと謂ふとも、此の道破は端坐三昧の中に現成する自然の神境であるから、果して汝が他の學解や名相の力を假るべからず、是の如くして見得する時、所謂身心を脱落し生死を透脱し去るを以て、皮肉骨髓の汝が爲めに分配布置する無し、即ち自己泯絶である。又生死去來なるものあつて汝を改變する無し、即ち常住寂滅相である。此の時皮膚總に脱落して唯だ一眞實のみあり、永嘉大師も無相は空なく不空もなし即ち是れ如來の眞實相と詠ぜられた、眞實の妙相は遍法界である古今一如の光明である、故に古にも輝き今時にも耀て時劫の數量を辨へず、即ち無數量である、豈に啻だ空劫已前と謂ふのみならんや、以前とか已後とか言ふのも既に是れ閑名自である、總て此の處は前後を辨別すべき所にはあらず。

故如何となれば、此の田地成住壞空に遷されず。自他共に無因と辨ふべけんや。外に境界を忘れ、内に緣慮を捨てて、青天尚ほ棒を喫し、淨躶躶なり赤洒洒なり。子細に見得し來れば、虛にして靈に、空にして妙なり。未だ子細

にせざれば、終に此の處に到ることなし。實に塵劫の事を朗かにすること一彈指の間に在り。暫時片時なりとも擬議の情なく知解を萠さず、驀面に突眼して見よ。必ず獨脫無依ならん。

故如何となれば、此の空劫已前の田地は本より變遷に涉らざるを以て成住壞空の四劫にも遷されず、且つ自他の差別なふして而も自法あり他法あり佛あり衆生あり、皆な共に因緣果報の大法に隨ふて一微塵も差ふこと無し、故に無因である抔と辨ふべけんや。依て眞實大道を究めんと欲せば、外に於ては一切の境界を忘れ、內に於ては得失取捨の緣慮心を捨て、青天白日の如き大悟の境に達するも尙ほ三十棒を喫して更に一歩を進めて始めて通身脫落して、淨裸裸なり赤洒洒なり、裸はあかはだか洒はけらふ、恰も赤體にして寸絲を掛けざるが如く、身に附く物を掃ひ落し去るが如く、所有束縛と負擔と莊飾とを脫したる天眞爛漫の境涯である。修せざるには現はれず證せざるには得ること無し、子細丁寧に工夫辨道して空劫已前の自己を見得し來れば、身心虛空の如くにして罣礙なく、而も自から靈機を轉じて順逆縱橫の作用を起す、是を虛にして靈にといふ、萬境空寂にして耳目に觸るゝ物なく、而して自から妙用を現はして、慈悲の光明蓋天蓋地なり、是を空にして妙なりといふ、若し未だ子細に修證せざれば終に此の虛靈空妙の處に到ること無し。實に三祖大師が宗は促延に非す一念萬年、在と不在と無く十方目前といはれし如く、塵沙の數の如く量りなき無數劫の事を洞朗明白にすること一たび指を彈く一秒時の間に在り、是れは三世を超越したる自己を究盡するを以て一念即萬年である、今日を明らむるのが過去及び未來を明らむるのである。故に諸人者は暫時なりとも片時なりとも、徒らに心外の法を追ひ回つて擬議するの情も無く、名相言句に拘泥する知解をも萠さず、一切放下して驀面に眞正面に向つて活眼を突出して見よ、左すれば必ず此の自己を認得して、獨脫無依とならん、獨脫無依とは一切の束縛を解脫して獨立獨歩の境界となり、何物にも依賴し執着せず、眞實唯我獨尊の三昧に安住するをいふ。

然るを諸參學人、心頭を回して既に錯まりて趣向す。唯だ毫末の違ひと思ふとも、知るべし、恁麼なれば千生萬劫休歇の分なし。子細に思量し精到して見よ。他に依らず。廓然として開悟せんこと虛空の如くならん。且く道へ如何が、此の道理を少分も通ずることを得ん。

古澗寒泉人不レ窺。　淺深未レ聽客通來。

然るを諸の參學の人が上來述べ來りつる學道の用心に味く、徒らに心頭を回して、彼を思ひ此を考へて、摸索して息むこと無きは、全く既に修行の針路を錯りて趣向するのである、此等は唯だ毫末の少し斗りの差ひと思ふて居るのであろうけれども、その毫釐の差ひが忽ち千里の隔たりとなることを知るべし、若し恁麼にして去るなれば千生萬劫を經るとも遂に休歇して大安心を得るの分なし。　冀くは諸人者は子細に思量工夫し、精進して大道に到達して見よ、人々具足の佛法、箇々圓成の自己なれば、他に依らずして廓然として一切の障礙を拂ひ盡して分明に開悟せんこと、方に虛空の障り無きが如くならん、且く道へ如何が此の道理を縱や少分なりとも通曉して諸人に開示することを得ん。　次に七言二句を頌ぜらる、古澗寒泉人窺はず、淺深未だ客の通じ來ることを聽さず、古澗寒泉の四字は空劫已前の自己を表示せられたのである、古い澗底に寒泉のつめたい水が流れて居る、無始劫來の昔より否な天地の未だ開けざる以前よりの溪澗であるが、その澗底よりは法性無漏の靈泉が晝夜不斷に湧出して、其の皎潔たることは玉の如く玲瓏として表裏なく、其の滾々として豐かに流るゝことは無盡藏にして、能く智慧の泉となりて心田を開き、慈悲の水となりて福田を潤ほして居る、然れども微塵も煩惱の熱氣なく寸毫も惑業の熱鬧なし、昔は雪峰禪師因に僧問ふ、古澗寒泉の時如何、師曰く、瞪目底を見ず、僧曰く、飲む者は如何、師曰く、口より入らず、後に趙州之を聞て「鼻孔より入るべからず」といふて一段の商量を打して居る。　此の古澗寒泉の自己は如何なる人も能く其の底を窺ふこと能はず、釋尊も妙法と稱せられ、達磨も不識と喝破した。　故に此の泉底が淺さや又は深さやは測られぬ、般若に於ては眞空と說きて甚だ深きが如し、阿含に在りては三世實有法體恒有と說きて或は淺きが如し、或は世間と說き出世間と說き、或は諸法虛妄と說き諸法實相と說き、遂に定法は無い殊に釋尊は末後に至りて四十五年一字不說と道破せられた、空劫已前の自己なる古澗寒泉は其の淺深如何は自知自得の法なるを以て、外より來りし賓客などが輕々しく其の消息を通じ來ることを聽さず、只當に回光返照の退歩を學得して身心自然に脫落し去てこそ、始て澗底の一滴を掬することが出來やうぞ、との御提唱である。　以上此章に於ける御親訓の如きは禪門に於ける幾多の弊風と邪執とを誡めて、正修行の要領を示されたものであるから、苟も志を參禪に抱かん者は反復翫味して正傳の宗風を會得すべきである、只だ學解を以て玄妙を談じたり、機智を以て禪道を翫ぶが如きは、自己の安心に於て何等の力量をも得ること能はざるべし。　鎌倉圓覺寺開山祖元禪師も我れ日本の兄弟を見るに一生得悟の者多かるべからず、此國の風たる只だ智才を貴んで悟解を求めず、云云と歎じて居る、設

ひ悟解を求むるとするも、動もすれば燕石を以て明玉と錯ることが多い、太祖の嚴訓は實に此弊を救ふの指針である、吾人は宜しく横參竪參して佛祖の堂奥に徹底せんことを冀ふべきである。

第四十八章

第四十八祖。天童玨禪師。久爲悟空侍者。一日悟空問曰、汝近日見處如何。師曰吾又要道恁麼。空曰未在更道。師曰如何未。悟空曰汝不道道來未。未通向上事。師曰向上事道得。空曰如何向上事。師曰設雖向上事道得爲和尚不能擧似。空曰實汝未道得。師曰伏願和尚道取。空曰汝問吾道。師曰如何是向上事。空曰吾又要道不恁麼。師聞開悟。空即印證。

以上本則、數番問答麤に入り細を穿つ、曩祖辨道の用心總に金剛堅固の大信念より發す、其の深密の意、宜しく太祖の提唱に參じて痒處に搔在せんことを要す。

師、諱は宗玨、久しく悟空の侍者と爲り、晝參夜參、横參竪參す。然れども

猶ほ徒ならざる所あり。空問て曰く、汝近日見處如何。師曰く吾又恁麼なりと道はんと要す。空曰く未在更に道へ。實に今恁麼なりと言ふ。未だしき所あり。謂ゆる恁麼に來ることを會すと雖も、不恁麼に來る者あることを知らず。然るを全體露現して隱すことなし。何の不足の所かあらんと思ふ。故に曰く。如何んが未だしきやと。是の如く解する底。白雲散じ盡て青山獨り高きが如くなることを得れども、尚ほ更に山よりも高き山あることを未だ知らず。故に曰く。汝、道ひ來ること未だしと道はず、未だ向上の事に通ぜずと。是の如く參じ來る。悉く是れ向上の事なりと雖も、尚ほ有ることを知らざる過あり。故に曰く實に汝未だ道ひ得ずと。

天童宗珏禪師、道號は大休、其の鄕貫及び得度の因緣等は傳つて居らぬ、後に天童山に住して宗風を擧揚せられた、天童山は明州に在り太白山景德寺是れなり、支那五山の一である、晉の惠帝の永康中に沙門義興盧を山上に結ぶ童子あり來て薪水を給す久ふして辭し去る、曰く吾は太白星なり上帝遣はして左右に侍せしむと言ひ訖て見えず、是より太白山又は天童山と稱す。宗珏禪師は久しく眞歇悟空禪師の侍者と爲り、晝參夜參暫くも間斷なく、横に參じ竪に參じ、修行綿密を極め參究徹底を得たり、然れども尚ほ徒然ならざる所ありて辨道怠り無し、徒然は動かざる貌で修行に勞せざること。一日悟空問て曰く、近日の見處は如何、佛道に於ける知見は如何に進みけるや、師曰く吾は又只だ恁麼なりと道はんと要す、恁麼は是の如しといふに同じ、私は只だ是の如しと申し上げやうと思ふ、佛法元來別事なし、春は花夏ほとゝぎす秋は月冬雪さえてすゞしかりけり、大道を觀じ來れば只だ是の如し。時に悟空曰く、未在更に道へ、未在とは未だ〳〵といふこと、未だ滿足とは許されぬ、更に道ひ將ち來れと突破せられた。實に師は今恁麼なりといふ、是れ師が横參竪參の結果であつて、決して口頭の禪では無い、されど未だしき處ありて、未だ十成底とは肯はれぬ、如何となれば、謂ゆる師は恁麼にし來ることを會得すと雖も、不恁麼にし來る者あることを知らず、不恁麼とは否定せる見知である、即ち柳も綠ならず花も紅ならず、我れも我れに非ず彼も彼に非ず、天地乾坤を打破し、古今東西を泯滅する底の知見である、師は諸法の實相なることを知ると雖も、未だ實相の無相なることを了せず、順行の見を有するも逆行の機を缺くが如し。されども師は尚ほ自己の見處に安心を打して居られて、然るを花紅柳綠その儘が大道の全體露現して從來曾て隱すこと無し、故に恁麼なりとの道得は佛法の

眞に徹せり何の不足不十分の處があらんと思つて居られたから、故に曰く如何んが未だしきやと反問せられた。師が是の如く解會する底は實に大信心の露現にして譬へば白雲散じ盡きて青山獨り半空に聳えて高きが如く、八風吹けども動ぜざる底の大安心を獲得して泰然自若なることを得れども、猶ほ更に山よりも一段氣高き大山あることを未だ知らず、故に悟空禪師は敢て輕しく許さずして曰く、汝の道ひ來ることが必ずしも未だ其の地に至らずとは道はず、唯だ恨むらくは未だ一段向上の事に通ぜず、松杉を穿ち盡し石を行き盡す、一菴猶ほ隔つ白雲の岑の觀がある、師は猶ほ未だ屈せずして向上の事は既に道ひ得たりと答へられた。是の如く參究し來ること悉く是れ向上の事なりと雖も、千里の目を窮めんと欲せば更に一層樓に上るを要す、須彌に登るも天の在るあり、仔細に點檢し來れば猶ほ屋裏の一大事あることを知らざる過あり、故に曰く、實に汝未だ道ひ得ずと、是れ正しく官には針を容れざる最高等の接得である。

尙ほ、一言を出し心慮を廻らして、恁麼に道ふも、二に落ち三に落つ。一點をも著けざる所ありと。故に曰ふ、設ひ向上の事道ひ得ると雖も、和尙の爲に擧し得ること能はずと。自己未だ知らず。尙ほ節目に拘はる。故に悟空曰く實に汝未だ道ひ得ずと。時に、息既に盡き、力方に窮りて、請問して曰く。如何なるか是れ向上の事。空曰く吾又不恁麼なりと道はんと要す。先來の道と只今の道と天地の論にも及ばず。水火の喩よりも隔たれり。宗珏の思はくは全體現はれたりと。悟空は然らず。唯だ恁麼なりと道ふ。唯だ孤明歷然たるのみなり。初て非を知り得る處ありて印證を受く。

宗珏禪師は悟空禪師の鉗鎚に遇ふと雖も、尙ほ、一言の答辯を出し、平生の工夫力に應ずる心慮を運らして、曩きに恁麼なりと道ふも本分より見來れば二に落ち三に落つ向上第一義門に於ては未だ曾て一點をも著けざる所ありとの見知を有せらる。故に曰ふ設ひ向上の事は之を道ひ得ること能はざるに非ずと雖も、即今和尙の爲めに舌を動かして擧似し得ること能はず、果然として悟處に執着して法我を存することを免れず、正眼より觀破し去れば猶ほ一偏見に墮在して、佛向上の自己に至つては未だ其の堂奧を知らず、尙ほ道得とか不道得とかいふ枝葉の節目に拘はる處がある、故に悟空は最後の鐵槌を下して實に汝は未だ道ひ得ずと曰ふて、萬仞崖下に蹴落された。是に於て師は息も既に盡き力も方に窮りて、從前の我執も法執も共に消え失せ始て甲を陣門に脫ぎ、敎を膝下に請ひ、請問して曰く、

如何なるか是れ向上の事と、悟空時に示して曰く、吾は又た不恁麼なりと道はんと要す、汝は唯だ順風に帆を揚ることを知て、未だ逆風に楫を弄することを知らず、眼横鼻直なることを會すと雖も三面六臂の活機輪あることに昧し、如是の法に通ずと雖も、如是の脱落面を識得せざれば未だ一隻眼たるを免かれず。承陽大師は佛法を習ふといふは自己を習ふなり、自己を習ふといふは自己を忘るゝなりと仰せられた、自己を習ふは恁麼なり、自己を忘るゝは不恁麼である。故に先來の恁麼なりと道ひしことと只今の不恁麼なりと道ひし語とは、其の知見に大なる差があつて、天地の論にも及ばず水火の喩よりも隔たれり、宗珏禪師の思はくは、大道の全體宇宙萬像の上に、明々として現はれたりと會せり、悟空禪師は之と反對に然らず即ち不恁麼なりと示されたり。宗珏がたゞ恁麼なりと道ふは、唯だ孤明歴然たるのみなり、大道孤り露はれて歴々分明、草木國土悉皆成佛と會せり、佛法の堂奥は佛地をも跩跳せざるべからず、是に於てか師は初て從前の見解の非なることを知り、翻然開悟して得る處ありて始て印可證明を受くることを得たり。

然しより出世して、爲人説話するに、僧問ふ如何なるか是れ道。師曰く十字街頭斫額することを休めよと。有る時上堂に曰く、劫前に歩を運び世外に身を横ふ。妙契は意を以て到るべからず、眞證は言を以て傳ふべからず。直に得たり、虚靜氣を斂めて、白雲寒巖に向て斷へ、靈光暗を破て、明月夜船に隨て來る。正與麼の時作麼生か履踐せん。偏正不曾離本位。縱横那涉語因緣。

悟道の印證を受けて然しより後、世に出でゝ化門を建立し、人天の爲めに宗旨を説話するに終始一貫穩密堅實の家風を宣揚せられた。因に一僧あり問ふ、如何なるか是れ道、乃ち菩提道の研究である、師曰く、十字街頭斫額することを休めよ。十字街頭は都會の眞中、その通路は七通八達である、貴賤貧富老若男女の隔ては無い、都盧一平等に交通自在で何物の障礙も存せぬ、菩提道も亦是の如く十二時中如何なる時も如何なる場合も大道を離るゝことは無い。斫額とは斫はきる額はひたい遠望の貌、遠方を望む時は額に手を横に當てゝ望む、恰も手を以て額を斬るが如き狀を爲すに依る、大道は面前背後露堂々である決して之を遠方に望むべからずとの御教訓である。又有る時の上堂に曰く、諸人者向上の自己を知らんと要せば先づ須らく一切の凡情を解脱して、空劫已前に向て修行の歩を運び、俗世の外に於て身を横へて安心を求めよ、是れ解脱の方便である。元來佛祖の心法に契合して佛祖と二面なきに至る是を妙契といふ、此の妙契は凡夫の意識を以て到達することを得べからず、

宇宙の大道を達觀して大道と一如なるを眞證といふ、此の眞證は舌頭上の言句を以て傳ふることを得べからず、故に直に得たり、虛心にして妄情を存せず寂靜にして萬緣に縛せられず、而して能く心氣を斂め調へて、其の狀恰も白雲が寒巖に向て斷へて更に其の影を留めざるが如くにして一點の塵埃をも存せず、且つ又虛靜の處より廓然として智慧の靈光を發して無明の暗を破りて自己の心地を開明す、其の狀恰も明月が夜船に隨ひ來るが如く、求めずして智光の自から輝き來るを見ることを得べし、正與麽の時、虛靜にして智見の開發する時作麽生か如何やうに佛法を履踐せん、即ち大道を實踐躬行したものであろう。偏位に就て眞空より妙有を現ずと說き、正位に就て妙有即眞空なりと說くも、元來二物あるに非ざれば未だ曾て人々具足の一心上の本位を離れず、此の根本位地は正偏とも色空とも定名を附し去ることを許さぬ、是を唯有一乘法とも稱したのである。此の一乘法が無量の功德を放出して般若會上には空門を開き法華會上には實相を示し、三德四智ともなり六波羅蜜は正道支ともなり、縱に三際を窮め橫に十方に通じて自由無礙である、併しながら其の妙處は絕言絕慮なるを以て那ぞ語の因緣に涉らんや、言語の力を假りて道破せらるべきものに非ず、但當さに自知自覺して始て得べし。

實に虛靜に際なく、舌頭談ずれども隔たらず。向上の事を識得せんこと是の如くなるべし。尙ほ心と說き性と說くこと、悉く是れ向上の事に非ず。唯だ又、山は是れ山、水は是れ水、之を向上の事と思へり。直に是れ、錯りなり。洞山曰く。佛向上の事を體得して、方に些子語話の分あらんと。僧便ち問ふ。如何なるか是れ語話。山曰く語話の時闍梨聞かずと。又盤山曰く。向上の一路千聖不傳と。實に尋常に道ひ來る。性に任せて逍遙する底に非ず。又僧、悟空禪師に問て曰く。向上の事作麽生。空曰く。妙は一漚の前に在り豈に千聖の眼を容れんや。今謂ふ所の一漚とは己身萠してより以來なり。不萠已前之を名けて向上の事といふ。

以下は向上の事に就ての太祖の垂誡である、實に虛靜の地に達すれば是非善惡の際なく一色光中纖埃を絕するを以て、設ひ舌頭を弄して縱橫に談ずれども、終日說て口に咎なく、有と說くも無と說くも遂に隔たらず、毫も大道に抵觸することは無い、內、虛靜にして外自在、所謂把住すれば眞金も色を

失ひ、放行すれば瓦礫も光を放つ、向上の事を識得せんこと、方に是の如くなるべし、然れども意根下の卜度を以て、尙ほ漫りに一心と說き佛性と說くことは悉く向上の事にあらず、依文解義の徒は動もすれば唯だ又山は是れ山、水は是れ水、脫體現成之を向上の事と思へり、直に是れ錯りなり、佛法若し是の如くならば、何に依て佛は轉迷開悟の法門を說き、祖師は精進辨道の要機を勸め玉はんや。

洞山禪師曰く、佛向上の事を體得悟了してこそ方に些子語話の分あり些子は佛法が話せるであろう、若し佛向上の事を了ぜずんば縱ひ八萬の聖敎を諳んずるとも徒らに他の寶を算するに過ぎぬ。時に僧あり便ち問ふ、如何なるか是れ語話、此の僧は祖師門下には何にか特殊の語話があるものと思ふたらしい、洞山曰く、語話の時闍梨聞かずと、闍梨は梵語具さには阿闍梨、此には軌範師と譯す、五夏以上は闍梨の位といふて五ヶ年以上も修行の功を積みて他の軌範とも爲り得る位地の稱號であるが、今は貴僧といふが如き意味である。洞山大師の謂ゆる語話は、人間の舌頭より出づる語話では無い、溪聲廣長舌の語話である、松は吹く說法度生の聲の語話である、又は常に如是經を轉讀すること百千萬億卷の語話である、耳根に觸るゝものゝみを語話といふに非ず、溪聲も山色も皆な佛法の說明である、日月星辰も山川草木も盡く向上事の說法である、盡大地遍法界總に語話なるを以て說者聞者の別は無い、故に此の語話現成の時汝は之を聞かず、汝といふも語話なり、語話の外に汝あるに非ず。又盤山寶積禪師曰く、向上の一路は千聖萬賢も傳受せず、人々具足の大法、法界一如の妙道なれば他に傳ふべきに非ず他より受くべきに非ずと仰せられたり。然れば實に尋常に諸人者の能く道ひ來るが如き、性に任せて逍遙する底をいふにあらず性に任せて逍遙すとは其の天性の儘にし去りて飢ゑ來れば食し困じ來れば眠る、逍遙とは理智を加へず心の動くまゝに優悠自適すること。又僧あり曾て悟空禪師に問て曰く、向上の事作麼生、悟空曰く、妙は一溫の前に在り、此の世界の生ずるや海水に一溫の動くが如し、人の母胎に托する亦一溫の生ずるに似たり、大道は天地未開以前父母未生以前に向て究盡せざれば其の妙處に達すること能はず、故に此の妙處は豈に千聖の力を以てすとも其眼光を容れて之を見ることが出來ぬぞと開示せられた。今謂ふ所の一溫とは、自己の身分萌してより以來なり、不萌以前の消息を徹證する之を名けて向上の事と曰ふたのである。

故に芙蓉の眞子、枯木法成禪師、上堂に、佛祖向上の事あることを知て方に語話の分あり。諸禪德、且く道へ、那箇か是れ佛祖向上の事。箇の人家の兒子、六根不具、七識不全なるあり。是れ大闡提無佛種性なり。佛に逢ては佛を殺し、祖に逢ては祖を殺す。天堂に收め得ず、地獄攝するに門なし。大衆

還て此の人を知るや。良久して曰く、對面仙陀にあらず、睡多くして寐語饒し。實に向上の事は、佛來るとも忽ち喪身失命し、祖到るとも全身百雜碎す天堂に至らんとすれば天堂即ち崩壞す。地獄に向へば地獄忽ち破裂す。何れの處をか天堂とし、何れの處をか地獄とせん。何を呼でか萬像とせん。先より蹤跡なし。唯だ睡時の事の如し。自尚ほ知らず。他豈に辨ふべけんや。

來由なく、唯だ明々として無悟法なるのみなり。正に是れ高祖の語話なり。

故に芙蓉楷祖嗣法の眞子たる枯木法成禪師は丹霞子淳禪師と法の御兄弟である。楷祖には二十餘人の法嗣があつた、法成一日上堂衆に示して曰く、我が達磨門下に在りては佛祖向上の事あることを知てこそ方に佛法を語話するの分あらん、縱ひ學秀で智廣しと雖も空劫已前の自己を覺了して向上の眼を開破せざれば依然として世智辯聰の漢である。諸の參禪の大德方よ、且く道へ、那箇か是れ如何なる物が佛祖向上の事であろうぞ、茲に箇の人家の兒子にて眼耳鼻舌身意の六根が具足せず、眼識耳識鼻識舌識身識意識末那識の七識も全たからず、末那茲に意と譯す即ち思量の義である、此の識は恒審思量を性とし恒に絶間なく思量すること他の七識に勝るが故に末那と名く、要するに六根は肉體、七識は精神、身心共に缺乏して殆と無感覺無能力である、是れは世法にも執せず佛法にも着せざる大無我底を形容したものである。故に是れこそ大闡提無佛種性なり大闡提は梵語にて此に信不具と譯す、佛法の大海は信を以て能入と爲す、信仰不具の者は佛法に入ることを得ず、乃ち佛の種子なきに同じきを以て無佛種性といふ、今は世法佛法を超越したる向上人に名けたのである。是の如き者は佛に逢ては佛を殺し祖に逢ては祖を殺す、殺すといふは其の境界を認めざるをいふたもの、枯木寒巖の如き無心の道人の眼中には佛も無ければ祖師も無い、善惡正邪に與からざるを以て天堂にも收め得ず地獄も亦此の人を攝取するに門なし、是を稱して佛祖向上の那人といふ、諸大衆還て此人を識得するや、參禪學道は此人を識らんが爲めの精進である。さあどうぢや、良久して曰く、佛祖向上の那人と日々夜々間斷なく對面し顏を見合ふて居るが相逢ふて相識らずに居る、仙陀は聰明伶利の謂である、大涅槃經に國王が羣臣に仙陀婆來と言はれたる時の如き、仙陀婆は一名にして四種の稱呼となる、一に鹽二に器三に水四に馬、王は只仙陀婆と呼ぶも伶利の臣は其の場合を見て其の意を悟り、王の意中の物を奉るとある。然るに仙陀の智なき者は面を見て居ながら知らずに居る、それは睡眠時間が多くして寐語のみが饒い澤山であるからであろう、眠つて居ては何事も辨ずる筈が無い。是れは何を言はれたものであろう、前に謂ゆる六根不具七識不全底の那人のことである、唯だ世法と佛法とを知らざるの

みならず、大道といふものにも執見を生ぜぬ、是れ則ち不知最も親切の妙趣である、實に向上の事に至つては佛出で來るとも忽ち喪身失命して其の相を留めず、祖師至るとも全身百雜碎すで粉微塵に碎けて形を存せず、天堂に到らんとすれば天堂即ち崩壞す、地獄に向へば地獄忽ち破烈す、法界一道場十方一虛空、心佛衆生是三無差別であるから、何れの處をか天堂とし何れの處をか地獄とせん、又何を呼でか萬像とせん、正眼に見來れば先より無始劫來蹤跡なし恰も睡眠時の夢中事の如し、楞嚴經には、「淨極まり光通達し、寂照にして虛空を含む、却り來て世間を觀ずれば、猶ほ夢中の事の如し」とある。既に夢中の事なるが故に自己といふことすら猶ほ知らず、他の事も豈に明らかに辨ふべけんや、這裏來由なく、天眞にして妙なれば理窟のつけて見やうも無い、唯だ明々として無悟法なるのみなり、無悟法とは迷悟超越の妙法である、蓋天蓋地一大妙法のみである、以上は正に是れ法成高祖の語話なり、而して復た實に千佛萬祖の正法である。

若し向上の事を知らば、頂門の眼開けて、此の時少分相應の處あり。且く道へ如何ならんか此道理。

宛如上下概相似　抑不入兮拔不出。

若し此の佛向上の事を知らば、兩眼圓明なるのみならず、更に頂門高上の智眼開けて佛法に於て疑ひ無きことを得べし、此の時こそ始て少分なりとも大道に相應の處ありて、冷煖自知以て大安心の地に達することを得ん、且く道へ如何ならんか此の道理、希くは更に審細に參究せよとて例に依て、宛かも上下の概の如くに相似たり、抑すれども入らず拔けども出でず、の頌を示された。佛向上の事を會得したる者は宛も上と下と兩方より概を打込で寸分の透間も無きが如くに相似たり、故に上から抑して押しつけやうとすれども入らず下から拔かうとしても出でぬ、祖門下の安心底も亦是の如く、定力のみでも圓ならず慧力のみでも全たからず、定慧等覺明見佛性である、向上すれば一切差別の境界を截斷し向下すれば神通妙用緣に應じて滯り無し、此の向上向下の圓轉無礙なる處に至り、始て安住不動如須彌山の妙境に到達することが出來るのである。元來佛向上事といふは佛祖不傳の涅槃妙心である、佛心に承當し去れば佛地にも住着せぬ、達摩は是を廓然無聖と喝破し、馬祖は是を非心非佛と道破せられた、人々祇管打坐の正當時、法界虛空を擧げて兀兀地である、故に承陽高祖は、兀兀地は佛量にあらず法量にあらず悟量にあらず會量にあらざるなりと仰せられた、此の時始めて刹々塵々盡く妙法を開演し無上法輪を轉ずることを聞き得るであらう。承陽高祖は辨道話に於て、自受用の境界なるを以て一塵を動かさず一相を破らず廣大の佛事、甚深微妙の佛化をなす、この化導の及

ぶ所の艸木土地共に大光明を放ち深妙法を說くこと窮まる時なし、草木牆壁は能く凡聖含靈の爲めに宣揚し、凡聖含靈は却て艸木牆壁の爲めに演暢す云云と開示せられてある、能々參究して端坐三昧直に是れ佛向上事なることを徹證し體得せざるべからず。

第四十九章

第四十九祖、雪竇鑑禪師。宗玨主天童時。一日上堂。擧世尊有密語迦葉不覆藏。師聞頓悟玄旨。在列流淚。不覺失言曰吾輩爲什麼不從來。玨上堂罷呼師問曰汝在法堂何爲流淚。師曰世尊有密語迦葉不覆藏。玨許可曰何非雪居懸記。

以上本則。以下太祖の御提唱最も徹悃を極む言々句々須らく其の玄微を透破すべし、されど本章に於ける御提唱は專ら宗乘の要旨を縱橫に開演せられて、本則の一問一答に對する御示しが省かれてあるから、一往其の大旨を述べて置く必要がある。四十八祖天童宗玨禪師、天童に主たりし時、一日上堂に、世尊密語了語あり迦葉覆藏せずの公案を擧示せられた。密語不覆藏の典據等は太祖の垂示に詳細を盡してあるが、その宗意は、世尊には秘密微妙の言語がある、此の密は故らに他の見聞を許さゞ

る密授があるのでは無い、佛法の一大事は言詮不及意路不到であつて釋尊の大神力を以てするも之を說示することは出來ぬ故、世尊には密と不密との別は無けれども、聽者の方から見れば全く一大密語である、併し是れは獨り世尊の說法のみでは無い、天地法界悉く不可思議不可稱量の秘密藏である。六祖大師は密は汝が邊に在りと言はれて、人々皆な秘密莊嚴の法身である、迦葉菩薩は能く此の妙旨を會得して、世尊に密藏なしと道はれた、迦葉の一語に依りて世尊の密語は大衆の面前に展開せられて明々白々となつたのである、要するに盡十力世界是れ密語の妙韻であると同時に、不覆藏の露堂々である。承陽高祖は正法眼藏中特に密語の一卷を御示しになつて居る、雪竇禪師は此の公案を聞て頓に其の玄旨を悟り、大衆の列に在りて涙を流された、法喜禪悅の感激に堪えられなんだのである、覺えず失言し曰く、失言とは思はず知らず言葉が唇を漏れたのである、乃ち吾輩什麼と爲てか從來せざる、吾等は何故に從來今日まで是の如き教を受けなんだのであろう、發心以來晝參夜參するも胸中に蟠屈する大疑團を氷消することが出來ず、恰も重擔を負ふの思ひがあつた、今日始て此の妙法を聞て、胸中洞朗として一點の疑惑なきに至る、盲龜の浮木に逢ひたらんが如し、何の幸か之に過ぎん何の喜か之に加へんと感喜無量であつたのである。宗珏禪師は之を見て上堂罷で後に師を呼で問て曰く、汝法堂に在りて何爲ぞ涙を流すや、是れ其の眞境を認め乍ら猶ほ他の悟處を點檢せられたのである、師曰く、世尊に密語あり迦葉覆藏せず、此の落涙の心情は到底言說の及ぶ所では無く、所謂大密語であるが、證契底の眼を以て觀破し去らば、その儘が不覆藏であつて、最早兩片皮を弄して說明するに及ばぬ、天高く地廣く山聳え海湛ゆ、如是の妙法は是の如くに說明して更に餘蘊なしとの答話である。乃で宗珏禪師は許可して曰く、何ぞ雲居の懸記に非ざらん、昔し雲居禪師は懸かに將來を記して汝の出世を豫言し玉へり、汝は實に我が門の至寶なり宜しく大法を荷擔して人天を利濟すべしと證明せられた、世尊有密語の公案は雲居禪師の提唱せられしものであるが、將來を懸記せられ事緣は未だ出處詳らかならず、後日の考證に讓ることゝする、承陽高祖は、靈山の拈華瞬目を以て密語とし迦葉の破顏微笑を以て不覆藏なりとする說を擧げて佛祖道の破廢なりと痛歎せられてある、此の密といひ不覆藏といふことを、有言無言の論を以て擬議すべきものでは無い、要するに世尊と迦葉とを超越し自己と他己とを蹇過して、親參實究すべき妙法である。

師、諱は智鑑。滁洲吳氏の子なり、兒たりし時母與めに師の手の瘍を洗て、問て曰く是れ甚麼ぞと。對て曰く我が手は佛手に似たり。長じて恃怙を失ふ。眞歇に長蘆に依る。時に宗珏、衆に首たり。即ち之を器とす。後に象山に遯

れて百怪惑はすこと能はず。深夜に開悟し、證を延壽に求む。然して復た珏和尚に參ず。宗珏時に天童に住しき。師をして書記に充てしむ。珏一日前の因緣を擧す。

師諱は智鑑と稱し足菴と稱せられた、滁州吳氏の子、兒童たりし時、その母與めに師の手の瘍を洗ふ、瘍は瘡、即ち吹出物の類、問て曰く、是れ其麼ぞと、師對て曰く、我が手は佛手に似たり、私の手は佛樣の手と同じであるから佛樣の眞似も出來ませうと答へた、小兒の時より餘程異なつた處がありしと見へる。成長して恃怙を失す兩親共に失はれた、詩に母なくんば何をか恃まん父なくんば何をか怙まんとある、遂に出塵の志を發し眞歇禪師に長蘆に依りて得度せられた、時に宗珏禪師は大衆に首版たり、乃ち會中の第一座にてあられしが師を見て即ち之を道器として愛撫せられた。後に象山に世を遯れて修道せしが山中に於ける百怪即ち種々の猛獸や狐狸等の怪物も師を惑はすこと能はず、斯く專一に工夫せられ一夜更深けて乾坤寂寞の時忽然として開悟す、乃ち印可證明を延壽に求む、猶ほ自ら安んぜざる處ありて然して復た宗珏和尚に參ず、宗珏禪師は時に天童山に住しき、師をして第二座たる書記の職に充てしむ、宗珏禪師一日上堂に前の世尊密語の因緣を擧示す、此の時證契卽通が行はれたのである。

夫れ此の因緣は涅槃經より出たり。加來性品第四之二謂ゆる爾時に迦葉菩薩、佛に白して言く。世尊佛の所說の如き、諸佛世尊に秘密の語ありと。是の義然らず、何を以ての故に、諸佛世尊唯だ密語ありて密藏あること無し。譬ば幻主の機關木人の如し。人、屈伸俯仰するを觀見すと雖も、內に之をして然らしむるものあるを知ること莫し。佛法は爾らず。咸く衆生をして委く知見することを得せしむ。云何ぞ當に諸佛世尊に秘密藏ありと言ふべき。佛、迦葉を讚して、善哉善哉。善男子。汝が言ふ所の如く、如來に實に秘密の藏なし。何を以ての故に、秋の滿月の空に處して顯露に、淸淨にして翳なきが如く、人皆な覩見す。如來の言も亦復是の如し。開發顯露にして淸淨無翳なり。愚人は解せずして之を秘藏と謂ふ。智者は了達して則ち藏と名けず。

此の一段は世尊密語の典據を示し王ふ、夫れ此の密語の因緣は涅槃經より出たり、いはゆる同經如來

性品第四の二に、曰く、爾時に迦葉菩薩が佛に白して言さく、世尊よ佛の說き玉ふ所の如く、諸佛世尊には殊更に衆生に示さゞる秘密藏の語ありといふ者あり是の義然らず、何を以ての故にとならば、諸佛世尊には唯だ密語のみ有りて秘密の藏といふべきもの有ること無し、元來密語すら無きものなれば佛一音を以て法を演說し玉ふに衆生は類に隨て各々得解す、佛の說法は唯有一乘なるも聞者の根機同じからざるが故に其の領解區々なり、故に聞者の方より見る時は密語あるが如くに觀ぜらる、されど佛の手前には微塵も衆生に秘すべき法藏は無い。譬へば幻主の幻術使ひが使用する機關の木偶人の如し、人は其の人形の屈伸したり、俯仰したりするを觀見すと雖も、その幕の內に人形使ひが之をして然く屈伸俯仰せしむるものあるを知ること莫し、否な粗ぼ之を知り居れども特と人に藏れてするのであるから、如何なる樣なるやは知れぬ、佛の所說の法は爾らず人形使ひと同じからず、なぜならば咸く衆生をして悉く知見することを得せしむ、公衆面前に五臟六腑を打明けての御敎化であるに依て、云何ぞ當に諸佛世尊に、秘密の寶藏ありと言ふことを得べきと白された。その時佛は迦葉菩薩の說明を讚歎して、善い哉善い哉、善男子よ、汝が言ふ所の如く如來は實に秘密の寶藏無し、何を以ての故にとならば、恰も仲秋の滿月の空中に處して東西南北何れに對しても顯露に丸出しで而も淸淨にして一點の塵翳無きが如し、翳は敝ふなり、故に人々皆な之を觀見す、如來の言說も亦復是の如く胸襟を開き堂奧を發き妙理を顯はし要義を露はして內外淸淨に一翳だも無し、然るに愚かなる者は之を解せずして妄りに之を秘藏と謂ふ、盲者の見ざるは日月の咎に非ず、智者は了達して居るから則ち秘密藏とは名けずと仰せらたり、世尊に密語ありとは稱すれども迦葉菩薩に依りて秘密藏なきことを明らかにするを以て迦葉不覆藏といふ。

然しより、此の語、祖師門下に用ゐ來ること久し。故に今も擧するに智鑑開悟す。實に覆藏せず。夫れ一切の言を聞かんに必ず心を會すべし。言に滯ること勿れ。火と謂ふ、是れ火に非ず。水と謂ふ、是れ水に非ず。故に火を語るに口を燒かず。水に語るに口を濕ほさず。知りぬ水火實に言に非ず。石頭和尙曰く。言を承ては須らく宗を會すべし。自ら規矩を立すること勿れと。又藥山曰く、更に宜しく自ら看るべし。言語を絕することを得ず。我れ今汝が爲に這箇の語を說て無語底を顯はす。他那箇か本來耳目等の貌なしと。又長慶曰く二十八代皆心を傳ふと說て語を傳ふと說かず。又雲門大師曰く。祇

だ此れ箇の事、若し言語上に在らば、三乘十二分教、豈に是れ言語なからんや。什麼に因て教外別傳と道ふや。若し學解機智よりせば、祇だ十地聖人の如し。說法雲の如く雨の如きも、猶ほ見性は羅縠を隔つが如しと呵責せらる。此を以ての故に知りぬ。一切の有心は天地懸かに殊なり。然も是の如くなりと雖も、若し是れ得底の人ならば火と道つて何ぞ曾て口を燒かんや。終日、說て事未だ嘗て唇齒に掛著せず。未だ曾て一字を道著せず。

世尊に密語あり迦葉覆藏せずの因緣ありて然しより此の語は一大公案として祖師門下に用ゐ來ること久し、雲居禪師因みに尙書供を送り問ふて曰く、世尊に密語あり迦葉覆藏せず如何なるか是れ世尊の密語、雲居召して曰く、尙書、尙書應諾す、師曰く、會すや麼、尙書曰く、不會、師曰く、汝若し不會ならば世尊の密語、汝若し會せば迦葉覆藏せずと、承陽高祖は正法眼藏密語の卷に於て縱橫に垂示せられてある、拜覽して親參するが宜い、故に今宗珏禪師も此の公案を擧するに智鑑禪師は開悟す是れ實に覆藏せずと謂ふべし、夫れ一切の言敎を聞かんには必ず其の心を會得すべし、徒らに言句の枝葉に滯りて妄想に耽る勿れ、口に火と謂ふとも、其の聲は是れ火に非ず、水と謂ふとも其の言は是れ水に非ず、故に火を語るに口を燒かず水を語るに口を濕ほさず、知りぬ、水火は實に言語上に非ずといふ事を、石頭和尙は其の著參同契に曰く言を承けては須らく其の言中に含有する宗旨を會得すべし、徒らに言句に拘泥して自ら規矩を立する事勿れと、規矩とは規には圓に、矩には方なりといふ、方圓の繩墨を定むる事。釋尊は其の御一代を通じて不異語者なり不誑語者なり、唯だ言句の末節を固執するが故に權實の差を別ち染淨の異を爭ふ、是れ規矩なきに强て方圓を立つるが如し。又藥山禪師曰く、汝等更に宜しく自ら宗旨を看破すべし、必ずしも言語を絕する事を得ざれ、我今汝等が爲めに這箇の語を說て辯明に力むるは、言句の及ばざる無語底の宗意を顯はすが爲めである。他とは嫡傳の宗乘即ち自己の本來心を指すの語である、那箇何に物か是れ本來耳目等の相貌なき底ぞ、耳なければ言語及ばず目なければ文字も亦示し得ず、言語文字を以て詮表し能はざる宗乘如何と工夫せよ。又雪峰の法嗣たる長慶の慧稜禪師曰く、西天廿八代の列祖皆な心を傳ふと說て語を傳ふと說かず敎外別傳の意此に在りと言はれた。又雲門宗の祖雲門文偃大師曰く、祇だ此れ箇の佛法の一大事、若し言語の上に在る者ならば佛の說き玉へる法に聲聞乘緣覺乘菩薩乘の三乘あり、又其の敎相に十二分敎あり、十二分敎とは一に素咀纜、此に契經と譯す、二に祇夜、此に重頌と譯す、三に和伽羅那、此に授記と譯す、四に伽陀、此に諷誦と譯す、五に憂陀那、此に無問自說と譯す、六に尼陀那、此に因緣

と譯す、七に波陀那、此に譬喩と譯す、八に伊帝目多伽、此に本事と譯す、九に闍陀伽、此に本生と譯す、十に毗佛略、此に方廣と譯す、十一に阿浮陀達磨、此に未曾有と譯す、十二に優婆提舍、此に論議と譯す、以上を十二部經ともいふ、佛の說法の體裁である。此の三乘十二分敎は豈に是れ言語なからんや、皆な言語を假りて說き顯はせり、然るに什麼に因てか敎外別傳と道ふや、言敎以外に別の佛法あるには非ず、言語の中に在りて言語に墮せずして其の宗旨を傳受するのである。若し學術上の解決心機上の知能より佛法を會得するとせば、祇だ十地の聖人の如きは說法に於て自在を得て雲の如く涌きて山河を蓋ひ雨の如く澎ぎて萬物を濕ほすを得るも、猶ほ佛性を見ること羅穀を隔つが如しと云ふて訶責せられて居る。羅は薄き帛、穀は物を包む物の內空になりて殘れる形、蟬のぬけがらの類、少しの隔てあるを羅穀といふ、十地の聖人とは五十二位の內四十一位より五十位までの行位なり、此の位は斷惑證理の功進みて自行利他の德を現はすを以て聖人の域に入るなり。此を以ての故に知りぬ、一切の心念ある者は見性に於て甚だ遠くして天地懸かに殊なり、然も是の如くなりと雖も、若し是れ佛性を見得する底の人は火と道て何ぞ曾て口を燒かんや、乃ち言語に蹤跡を留めざるを曰ふ、所謂無舌人の解語である故に終日說くも此の事に至つては未だ嘗て脣齒に掛著せず、從つて未だ嘗て一字を道著せざると同樣である。吾人も亦能く佛祖の言敎を見聞するに當りては、宜しく一字不說底の說法を聽取するの力量が無けねばならぬ。

故に諸人、言なきのみに非ず、又口なきものあることを知るべし。豈に口なきのみならんや。眼もなく四大六根、本より一毫もなし。是の如くなりと雖も、是れ空なるに非ず、物なきに非ず。謂ゆる汝等物を見るも聲を聞くも、此の眼の見るに非ず、耳の聞くに非ず、是れ箇の無面目の漢の如是なるなり。汝等の身心と、具へ來る所、是れ箇の漢の作し來る所なり。故に、此の身心悉く是れ造作の法に非ず。此に到らずして乃ち思はく、或は父母緣起の身と、又業報所生の身と。故に赤白二滴の身なりと思ひ、皮肉を帶せる身なりと思ふ。悉く自己を明らめざるに依りて、是の如し。

以下太祖の親訓である、故に諸人者は、獨り言のなきのみに非ず、又口も無き者あることを知るべし、本分の那人は通身無影像である、無言且つ無口なるが故に全く言說を離れて居る、豈に啻だ口なきのみならんや、眼もなく耳も無く地水火風の四大、眼耳鼻舌身意の六根本より一毫も無し、全く無面目

である、是を無位の眞人といふ。然も是の如くなりと雖も是れ單空なるに非ず又全く物なきにも非ず。如何となれば謂ゆる汝等が物を見るも聲を聞くも、皆な靈妙なる主人公の作用である、この眼根の力にて見るに非ず、耳の力にて聞くにも非ず、畢竟是れ箇の無面目の漢の妙用にて任運に是の如く見聞自在なるなり、汝等の身心となりて現在具へ來る所のものは、是れ箇の無面目漢の作し來る所なり。永嘉大師は、幻化の空身即法身ともいひ、古人は四大五蘊不壞の身ともいはれた、故に吾人の此の身心悉く是れ人間の力に依て造作する所の法に非ず、總に是れ天眞無爲の實相なりと究盡すべし。然るに見處此に到らずして即ち思はく、或は曰く是れ父母の緣に依りて生起する所の身なりと、又は前世の業に報ひて生ずる所の身なりと、故に此の身は父母の愛染より發する赤白二滴の結晶せる身なりと思ひ、皮肉を帶せる身なりと思つて、此の身を穢れたる物、卑しき物、厭ふべき物とす、是れ悉く眞實の自己を明らめざるに依りて邪見に墮すること是の如し、須らく是れ父母所生身即證大覺位、此の身即清淨法身なることを知るべし。

故に此の處を知らしめんとして、知識無量の方便手段を以て、六根悉く亡ぜしめ、一切皆止ましむ。此の時更に亡じ得ざる物あり。破れ得ざる物あり。

必ず識得し來るに、空有に落ちず。明暗に非ず。故に迷へる者とも謂ひ難し、悟れる者とも謂ひ難し。故に此の田地を佛とも謂はず。法とも謂はず。心とも謂はず。性とも謂はず。唯だ赫赫たる光り明明と有るばかりなり。故に火光水光にも非ず。唯だ廓然として明明たるのみなり。故に窺はんとすれども窺はれず、得んとすれども得られず。惺惺たるのみなり。故に水火風の三災起りて、世界壞する時此の物壞れず、三界六道起りて萬像森羅儼然たる時、此の物變ぜず。故に佛も如何ともせず。祖師も如何ともせず。諸仁者先づ此の處に、親しく到らんと思はば、且く兩眼を閉ぢ、一息斷へて此の身おへて、掩ふべき家なくして、一切の用處悉く以て要とせず。恰も青天に雲なきが如く、大海に波浪なきが如くにして少分相應あり。

此の一段は專ら師家設化の手段を述べて學人工夫の要旨を示されたり、故に此の無面目漢に相見する底の歸處を知らしめんとして祖門下の善知識は無量の方便手段を以て接得せられ、其の初めに先づ六

根門頭の妄動を悉く亡ぜしめ、從つて一切の萬緣を皆止ましむ、徹底脫落し去りぬる此の時更に亡じ得ざる、那一物あり、破壞し得ざる什麼物かゞ實在することを會すべし、必ず此の那一物を識得し來る時には、全く不可說不可稱量の妙性であるから、空有の二邊に落ちず、明暗の兩頭に非ず、故に迷へる者とも謂ひ難し、悟れる者とも謂ひ難し、故に此の田地即ち境界を說似せんと欲するに當りても、佛とも謂はず迷悟に非ざるが故に、法とも謂はず、諸法皆空なるが故に、心とも謂はず、身心に滯らざるが故に、性とも謂はず、無自性不可得なるが故に、這裏に到つて外に形容の語なきを以て、且く唯だ赫々たる光明が明々として、遍法界に實在して有るばかりなりと稱す、光明遍照十方世界といひ自己の光明蓋天蓋地といふは是れである。赫々は光明の顯盛なる貌、此の時は自も他も人も境も皆な只だ一團の光明である故に、火光水光にも非ず日光月光にも非ず、但だ廓然として明々たるのみなり、廓然は空洞にして障りなきをいふ、故に窺はんと欲すれども窺はれず得んとすれども得られず、只だ惺々たるのみなり、惺はさとしと訓ず惺々は盡十方無礙の智光充滿の貌、故に水火風の三災が起りて此の世界が破壞する時も此の那一物は壞れず、欲界色界無色界の三界、地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道が與りて萬像森羅が儼然たる時も此の那一物は更に變ぜず、水火風は此の世界の成立も此の三者に依る、破壞も亦た此の三者に由る、乃ち壞劫の時に三災起り火災は初禪天に至り水災は二禪天に至り風災は三禪天に及ぶと說けり、森羅は衆多の法の排列すること、儼然は堂々として存在する貌。是の如きは天眞の妙相なるが故に、佛力も如何ともせず祖師も亦如何ともせず、諸人者よ先づ此の處に親しく參徹せねばならぬ、此の地に到らんと思はゞ端坐三昧に安住し、且く兩眼を閉ぢて萬境を遮斷し、一息斷へて大死人の如くなれ、一息斷るとは調息成熟して出息衆緣に涉らず入息蘊界に居せざるをいふ、此の身をもおへて打捨てゝ頭を蓋ふべき家もなくして一切の使用する處も悉く以て要と爲ず、恰も晴れ涉りし青天に一點の雲もなきが如く澄み湛えたる大海に一片の波浪もなきが如くにして、全體大解脫の時始て少分の相應あり、おへては終てと見る說と措てと見る說とがある、何れにしても此の身を放下するの意である、終ては死すること、措ては手を離して棄て置くこと。

此の時、又汝をして、如何ともするなしと雖も、更に一段の光明あり。是れ青天に月あり日あるが如きに非ず。漫天是れ月なり。都て物を照すことなし。盡界是れ日なり。敢て耀く所なし。子細にして承當すべし。若し此の處を見得せずんば、徒に僧俗男女に迷へるのみに非ず、三界六道に輪回す。佛弟子

として、形を僧形に具へながら、尙ほ閻羅老子の手に掛らん。豈に耻辱に非ざらんや。

此の相應の時節には、身心既に脫落するを以て、又汝をして如何ともする無し、即ち吾れ我れを忘ずと雖も、更に一段の光明ありて、法界に輝き渉る、所謂草木國土悉皆成佛の端的である。此の光明は是れ靑天に月あり日あるが如きものに非ず、日は晝を照して夜を照さず月は夜を照して晝を照さず、一段の光明は古今に輝き十方を照す、漫天是れ月なりとせば總て物を照すこと無し、盡界是れ日なりとせば敢て耀く處なし、能照所照の差別なきが故に此の一大事は子細に參究して直下に承當すべし。若し此の處を見得せずんば、徒に僧とか俗とか男子とか女人とかいふ世間の色相に迷へるのみに非ず、遂には三界六道に輪回すべし。佛祖の弟子として形を僧寶の形に具へて居りながら、空しく罪業を重ねて更に解脫の門に入らず、結局は尙ほ地獄に墮落して閻羅老子の手に掛らんこと、豈に耻辱の甚しきものに非ざらんや、閻羅は具さには閻魔羅、此に雙王と譯す、兄及び妹あり共に地獄の主たり、兄は男を治め妹は女を治むといふてある。

釋尊の佛法。沙界に充ち滿ちて、到らざる所なし。參到せんに、何ぞ到らざらん。此の人身容易く受くる所に非ず、昔の善根力に依て受け來る所なり。若し一度此の處に到らば悉く解脫せん。男女に非ず。神鬼に非ず。凡聖に非ず。僧俗に非ず。收めんとするに處なし。見んとするに眼到らず、若しこの田地に到り得ば、僧なりと雖も僧に非ず。俗なりと雖も俗に非ず。六根に惑はされず。六識に使はれず。若し到らずんば是の如き事に悉く惑ひ、縛られもてゆかん。豈に惡しからざらんや。元來具足す、尙ほ營みて到るべくば、力を費すべし。何に況んや、人人に缺けたる所なしと雖も、一度眼見に惑ひしより、幾許流轉を受くること悲しむべし。

抑も釋尊の佛法は塵沙の如き無數の世界に充ち滿ちて到らざる處なし、獨り此の婆婆界のみならず、三千世界に充塞して露堂々である。故に一心に參究到達せんに何ぞ到らざらん、法華會上には八歲の龍女も現身に成佛せしに非ずや、吾人の此の人間の身は容易く受くる所にあらず、昔の過去世よりの

善根の力に因りて受け來る所なり、眼あり以て佛を見奉るべし、耳あり以て法を聞くに堪えたり、若し一度此の佛法の眞常無漏の處に到らば無始劫來の惑障罪業も悉く解脱せん、元來人々具足の自己即ち無面目の那一物は男女の別に非ず、神鬼の相に非ず、凡夫聖人の隔てあるに非ず、僧侶俗流の差あるに非ず。支那臨濟下の尊宿志閑禪師遊方の初め末山尼の處に至る、末山曰く、近離甚の處ぞ、師曰く、路口、末山曰く、汝何ぞ蓋却せざる、師無語、禮を設けて曰く、如何なるか是れ末山、末山曰く不露頂、師曰く、如何なるか是れ末山の主、末山曰く、男女の相に非ず、師曰く、何ぞ變じ去らざる、末山曰く、神に非ず鬼に非ず箇の什麼にか變ぜん。師禮拜す。此の非男非女不變易の那人は、收めんと欲するに收むる處なし、一切の相を立せざるが故に、見んと欲するに眼到らず、見聞に與からざるが故に、若し此の田地に到り得ば、僧なりと雖も僧に非ず俗なりと雖も俗に非ず、心境共に忘ずるが故に六根にも惑はされず、六識にも使はれず、世界に處すること虛空の如く蓮華の水に着せざるが如くならん、若し此の地に到らずんば是の如き一切の事象即ち六根も六識にも山河大地にも草木叢林にも悉く惑ひて、一切萬法に繫縛せられもてゆかん、豈に惡しからざらんや、永久に此の惡業を免れ難かるべし、此の法は元來人々に具足するを以て、尙ほ營みて即ち其の志と修行とに依りて到ることを得べくば、宜く全精力を費して開悟すべし、營みは參究工夫のこと、何に況んや人々に具足して闕けたる處なしと雖も、一度眼見耳聞の上に幻翳を生じて爲に惑ひを惹き起せしより、際限も無く幾多の六道流轉を受くること、皆な自業自得の致す所にして眞に悲しむべし。

唯だ根境を亡じ、心識に依らず。低細にして見よ。必ず到るべし、唯だ漸漸に到るべきに非ず。一度憤發の勢を起して、契ふべし。暫時なりと雖も、一知半解を起すことなく、直に根源を識得して、到るべし。一度到りなば四稜蹈地にして、八風吹けども動ぜず。古人曰く學道は火を鑽るが如し。煙に逢つて且くも休すること莫れと。一度力を盡す時、火を得るなり。謂ゆる烟と云ふは、是れ何れの處ぞ。若し知識の好手に逢ふ時、一念不起の處、是れ煙に逢ふ時節なり。此に滯りて、頓て休むは、是れ煖かなるに休むるが如し。然れば進て火を見るべし。謂ゆる、不起一念なる者をよく知るなり。若し自己を識得せずんば、今は休するに似たりとも、之を以て枯木の如くなりとも、魂不散底の死人なり。

引續いで老婆親切の提撕である、參禪の衲僧は唯だ當に六根六境の差別を亡じ、心識の分別に依らず、低細に參究して見よ、低細は仔細といふに同じ、參究怠たらざれば必ず其の極處に到るべし、唯だ漸漸に次第を經て或は長劫の時節を歷るとか、或は現身を捨てゝ未來に至るとかして僅かに到るべき迂遠の事にあらず、一度大道心を起し憤發の勢を起して修行せば當處を離れずして大道に契ふべし、憤發とは憤りを發して道を求むること、暫時なりと雖も一知半解の少し計りの學解や知慮を起すことの無く、直に自己の根源を識得して悟道の域に到るべし、學解や知慮を加へて想像や推理に耽るは却て悟道の妨となる。一度其の地に到りなば四稜蹈地にして不動の安心に住すべし、四稜は四角のことで蹈地は大地を蹈まへること、乃ち蹈臺とか四角の柱臺の如きものをいふ、故に八の風が吹き來るとも曾て動ぜぬ、八風とは利衰毀譽稱譏苦樂をいふ、此の八種が大風の如く心地を動亂すと雖も、大解脫地に住する者は其の心泰然として山の如くである、是を法華經には安住不動如須彌山といふてある。古人曰く、學道は恰も火を鑽るが如し、昔は木を鑽て火を出したものであるが、縱ひ煙の出づるに逢つても、且くも鑽ることを休すること莫れといへり、煙に逢ひなば益々勵みて、更に一度の力を盡す時必ず火を得るなり。謂ゆる烟といふは是れ何れの處ぞといふに、若し知識の世に優れたる好手即ち接得に熟したる師家に逢ふ時、その鉗鎚を蒙むりて、一念不起で一切の念慮を泯絕するに至りし處は正に是れ烟に逢ふ時節なり、其の時未得を已得と思ひ未證を已證と思ふて此に滯りて、やがて、休むは是れ火が出かゝつて煖かなるに休むが如し、やがてとは其の儘といふ意、然れば更に修行の歩を進めて火を見るべし、斯くある時は謂ゆる不起一念なる者を能く知るなり、不起一念は病を除くが如きものである、病を除さなば進んで活動の妙用を起さねばならぬ、不起一念にて足れりとせば、病を除いて猶ほ病床に臥するが如し、是れ獨り醫療の目的を知らざるのみならず病なきに至れりといふ自覺も未だあらずといはねばならぬ。若し進んで自己を識得せずんば火を見ざると一般であるから、不起一念で今は宛も休歇して安心の地に達するに似たりとも、又此を以て枯木の如くなりと言ふとも、枯木死灰では何の役にも立たぬ、全く魂不散底の死人で靈魂だけがビク〳〵殘つて居て生理機能は全然壞敗したる死人なりとせば、最早無用の長物である、故に百尺竿頭に一歩を進め十方世界に全身を現ずる底の活機輪を轉ぜねばならぬ、是れ自覺々他覺行圓滿の聖躅である。

故に、此の處に親く承當せんと思はば、參徹して得べし。坐定に依らず。蝦蟆の語を爲さず。如何ならんか是れ此の密語覆藏せざる道理。

可謂金剛堅密身。　其身空廓明明哉。

故に此の宗乘の妙處に親く承當せんと思はゞ、唯だ須らく大道心を發し大信念を起し實參實究して自ら透徹して始て得べし。只だ默々として坐定するのみでも參師問法の緣を藉らざれば癡定に陷ゐるの恐れあり、又蝦蟆の鳴くが如く何等の識見も力量も無く他の口眞似をして只がや〳〵と言語を弄するも何の用をか爲さん、此等の閑妄想を一超して如何ならんか是れ此の密語、不覆藏の道理ぞと大衆に拶着して、謂つべし金剛堅密の身、其の身空廓にして明々なる哉と七言二句の頌を示して宗乘を提要せられた。上句は密語の眞面目を拈出し、次の句は不覆藏の端的を擧似せられ、而して此の間に回互宛轉の妙旨がある、佛祖の法身は金剛堅固の身と謂つべし、金剛は天界の至寶で、其の質堅牢にして如何なる物も之を破ること能はず、又此金剛を以て之を擊たば如何なる物も破れずといふこと無し、法身も亦是の如く、百億の魔軍も侵し難く水火の猛烈なるも亦犯し難し、而して此の法身の在る處、煩惱の暗を破り生死の關を摧き盡して餘蘊なし、實に堅固にて傷れず、嚴密にして窺ひ難し、その法身の全體が密語である、併し單に佛祖邊の事とのみ思ふまいぞ、人々分上曾て缺かず、箇々圓成の本性皆な是れ金剛の正體である、其の法身は空寂にして聲色の外に在り洞廓にして罣礙なし、然れども決して秘密藏に非ざるを以て明々なる哉昭々たる哉、我れ從來倆に藏さず、山は高く海は深く柳は綠花は紅總に是れ法身微妙の相好である。凡夫は見て以て四苦八苦の世界とし、小乘の聖者は見て以て厭離すべき濁惡の世なりとす、若し法眼を以て觀見し來れば盡乾坤是れ一團の大功德聚である、知らんと要せば直下に覺得せよ我れ遂に覆藏せず、豈に只だ迦葉菩薩のみならんや、此の公案に參ぜんには、虛空に密語あり、山川覆藏せずとも工夫すべきである。又潮音溪聲に密語あり、水月空華覆藏せずとも商量すべきである、僅に有言無言を論じ說默動靜の相を執せば、遂に宗乘に辜負し去るであろう。昔は無外圓照禪師僧あり問ふ、無用心の處便ち用心と是なりや否や、師曰く道に用心なし、僧曰く十年行脚して未だ大事を明らめず請ふ和尙慈悲方便せよ、師曰く爾工夫を做す譬へば火を求めて煙を見て便ち休むが如し眞火を得んと欲せば直に須らく大死一回して始て得べし、若し能く死却せば活火現前せん、と示された。世法を忘れ知見を忘れ徹底忘却し盡して自已すら尙ほ立せず、是れ則ち死却である、此の時世尊の密語は雷の如く響き、不覆藏の佛光明は當處に現成し、古今に輝き十方に耀き、法界一如の光明藏三昧に安住し去ることを得るであらう。

第五十章

第五十祖。天童淨和尚。參雪竇。竇問曰淨子不曾染汚處如何淨得。師經一歲餘忽然豁悟曰打不染汚處。

以上本則、深々密々の宗旨は太祖縱横の拈提に參ずべし。

師は越上の人事なり。諱は如淨。十九歲より敎學を捨て祖席に參ず。雪竇の會に投じて便ち一歲を經る。尋常坐禪すること拔群なり。有る時、因みに淨頭を望む。時に竇問て曰く、曾て染汚せざる處如何が淨得せん。若し道ひ得ば汝を淨頭に充てん。師措くことなし。兩三箇月を經るに猶ほ未だ道ひ得ず。有時、師を請し方丈に到らしめて、問て曰く先日の因緣道得すや。師擬議す。

時に竇示して曰く淨子、曾て染汚せざる處如何が淨め得ん。師答へずして、一歲餘を經る。竇又問て曰く、道ひ得たりや。師未だ道ひ得ず。時に竇曰く、舊窠を脫して當に便宜を得べし。如何ぞ道ひ得ざる。然しより、師聞て力を得、志を勵して功夫す。一日忽然として豁悟し、方丈に上て即ち曰く。某甲道得すと。竇曰く這回道得せよ。師、不染汚の處を打すと云ふ。聲未だ畢らざるに、竇即ち打つ。師、流汗して禮拜す。竇即ち許可す。

如淨禪師の行狀も雪竇智鑑禪師同樣に史傳に詳かならず、面山瑞方和尚、高祖大師の遺語等に徵して如淨禪師の行錄を撰述せらる。今太祖の親訓を講說するに當り、面山和尚の行錄を參酌し、成るべく淨祖の事蹟を明らかにする考である。師は越上の人事なり未だ其の族姓を詳かにせず、諱は如淨、在世中自ら道號を稱せられず、當時の叢林號して淨長と曰ふた、長者の意で尊敬に出でたる稱號であらう、依て後世傳を作る者亦隨て長翁と呼べり。その母、山神兒を授くと夢みて妊娠し、趙宋の隆興元年七月七日を以て誕生せられた。襁褓に在る中も岐嶷、常兒に類せず、出家の後專ら經論を學ばれしが、十九歲より敎相の學を捨てゝ祖門の法席に參ず、直に雪竇智鑑禪師の會に投ぜしに、雪竇問て

曰く、汝名は什麼ぞ、師曰く、如淨、雪竇曰く、曾て染汚せず箇の什麼をか淨めん、是れ實に向上の鉗鎚である、婆婆卽寂光淨土、淸淨觀に依りて法界を洞鑑すれば上天下地一微塵も不潔の處なし、汝箇の什麼をか淨めんとはする。師會せず、便ち一歲を經るに、尋常間斷なく坐禪すること大衆の群を拔けり、有る時因みに感ずる所ありて特に淨頭の職に充てられんことを望む、淨頭は東司卽ち便所の主管者なり便所を淨潔にするを任とす、時に雪竇問て曰く、曾て染汚せざる處如何が淨得せん、若し此の意を道ひ得ば汝を淨頭の職に充てん、再度の御試驗である、淨頭の職などは無道心の者の厭ふ所である、然るに雪竇は是れすら容易に許し玉はぬ、古聖先德の法を重んずること實に是の如くである。師措くこと無し、師は未だ安心の地に至らず、兩三箇月を經過するに猶ほ未だ道ひ得るに至らず、有る時雪竇は師を招ぎ請して方丈に到らしめて問て曰く、先日の因緣道得すや。師猶ほ擬議す、如何に答話せんかと考え込まれた。時に雪竇示して曰く、淨子曾て染汚せざる處如何が淨め得ん、師答へず、是の如く激勵すること幾數回師益々研鑽に努む。一歲餘を經るに雪竇又問て曰く道ひ得たりや、師未だ道ひ得ず、時に雪竇示して曰く、汝は恐くは淨と不淨とを分別し會と不會とを比較する妄想の舊窠に足を留めて居るのであろう、それ等の舊窠を透脫してこそ當に法に於て自在なるべき便宜を得べし、徒らに妄想の窠窟に捕はれなば坐禪も功夫も何の用をか爲さん、此の事は明々として味からず了々として明らかなり、如何んぞ道ひ得ざるや、然しより師之を聞て大に力を得それより一層志を勵して功夫す、一日忽然として豁如大悟し、直に方丈に上り連聲に卽ち曰く、某甲道得すと今日漸くの事御答が出來ますと、雪竇曰く、這回こそは明らかに道得せよ、師乃ち曰く不染汚の處を打す、眞實不染汚の處が出來ました、一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛、一人發眞歸源、十方虛空亦發眞歸源である、と答へた。其の聲未だ畢らざるに雪竇卽ち打つ、一棒を與へられた、淨不淨の二見を打着せられたのである、淨と不淨との兩頭を截斷する時、始て箇の不染汚の處に安住することを得ん。師時に全身に汗を流し涙を灑で禮拜す、その法喜禪悅の慶快如何計りにてありしならん、雪竇卽ち許可す、玆に證契卽通が行なはれた。

後、淨慈に在て彼の開發の因緣を報ぜん爲に淨頭たり。有る時羅漢堂の前を過ぎしに、異僧ありて、師に向ひて曰く。淨慈淨頭淨兄主。報道報師報衆人と。言ひ訖りて忽念として見えず。大臣丞相、聞て占ふて曰く。聖の淨慈に主たることを許す兆なり。後に果して淨慈に主たり。諸方皆謂ふ。師の報德

實に到れりと。十九歲の時發心してより後、叢林に掛錫して、再び鄉里に還らず、然のみならず、鄉人と物語りせず。都て諸寮舍に到ることなし。又上下肩、隣位に相語らず。只管打坐するのみなり。誓て曰く、金剛座を坐破せんと。是の如く打坐するに依りて、有る時臀肉の穿てる時もあり。然も尙ほ坐を止めず。初發心より天童に住するに、六十五歲に及ぶまで、未だ蒲團に礙えられざる日夜あらず。

淨慈寺は五山の一で如淨禪師の塔の所在地である、師は後に淨慈寺に在りて悟道開發の因緣を報ぜんが爲に淨頭の職に當られたり、因緣をのをはにの誤りであろう。行錄には印可の後直ちに雪竇に在りて淨頭に充てられたとある。有る時淨慈寺の羅漢堂の前を過ぎられしに異僧ありて師に向ひて曰く、淨慈淨頭淨兄主、寺は是れ淨慈、職は是れ淨頭、人は是れ如淨、此の法兄こそ此の山の主たらん、報道報師報衆人、淨慈寺は委くは南山淨慈報恩光敎禪寺といふ、佛敎は報恩を以て道德の基準と爲す、父母、君主、衆生、三寶の四恩に報ずるは行持の正道なり、今も亦宜しく大道に報じ即ち至道に孝順なるべし、大道の恩に報ゆるは佛祖の慈恩に報ゆる所以である。又師僧の恩に報ゆるには弘法利生を以て第一とす、其の結果は普く衆人即ち衆生恩に報ゆるのである。淨祖能く不染汚を打して淸淨なることを得たり、故に亦能く四恩に報じて道を天下に行ふべし、斯く言ひ訖りて忽然として見えず、時の大臣丞相之を聞きて占ふて曰く、是れは聖者の如淨禪師が淨慈寺に主人公たることを許すの兆なりと、丞相は國家の大政を輔佐する宰相の官名である。後に果して淨慈に主として臨まれたり、而して能く報恩の實を示されければ、諸方の人皆な言ふ如淨禪師の報恩實に至れりと、行錄に據るに、師は雪竇を辭してより江湖に游泳すること二十餘年、嘉定三年四十八歲にして健康府の淸涼寺に住し十月五日晉山、後、臺州瑞岩淨土禪寺に住し、未だ幾ならず、勅請に依て淨慈寺に住す、一たび退院して明州の瑞岩寺に住せられしが再び淨慈の勅請を受けられた。寶慶元年六十三歲にして太白峯天童山景德禪寺に住し、住山四年にして紹定元年疾に因り退席して涅槃堂に下り同年七月十七日六十六歲にして示寂せられた。抑々師は十九歲の時禪道參究の心を發してより後、叢林に掛錫して再び鄉里に還らず。然のみならず、鄉黨の人と物語りせず、都て他の諸寮舍に到ること無し、又上下肩即ち僧堂裏に於ける左右の隣位にも相語らず、只管打坐するのみなり、斯く不語を守られしは謂ゆる無義の語、無益の語、雜穢の語、無慚愧の語を交換せられなんだのである。自ら誓て曰く我れ方に金剛座を坐破せんと、釋尊は金剛座に上り金剛定に入りて根本無明の煩惱を截斷し無上正覺を成ぜられた、故に佛

座を金剛座と稱す、師は我れ必ず佛座を坐破せんとの大勇猛心を發せられた。是の如く專一に打坐するに因りて有る時は臀肉の穿ち傷れたる時もありき、然も尙ほ坐を止めず、初發心の時より天童山に住するに六十五歲に及ぶまで、未だ曾て坐蒲團に礙えられざる日も夜もあらず、此等の行持は高祖大師正法眼藏行持の卷に於て懇ろに示されたり親く拜讀するが宜い。

初め淨慈に住せしより、瑞巖及び天童に到るまで、其の操行他に異なり、謂ゆる、誓ひて僧堂に一如ならんと言ふ。故に芙蓉より、傳はれる衲衣ありと雖も搭せず。上堂入室、唯だ黑色の袈裟、裰子を著く。嘉定の皇帝より紫衣師號を賜はると雖も、上表辭謝す。尙ほ神秘して、平生卒に嗣承を顯はさず。終焉のきさみ法嗣の香を燒く、唯だ世間愛名を、疎くするのみに非ず、又宗家の嘉名をも恐るるなり。實に道德當世に並びなく、操行古今に不羣なり。

師は初め淨慈寺に住せられしより瑞巖寺及び天童山に到るまで、其の節操堅固なる行持は全く他に異なりて實に千古の標榜たり、謂ゆる誓ひて僧堂裏の雲水に一如ならんといふのが志願であつた。故に芙蓉楷祖より傳はり來れる衲衣ありしと雖も遂に搭せず、披着せられなんだ、衲衣の衲はつゞると訓じ浣洗補綴して之を裁製するの意なり、上堂にも入室にも唯だ黑色の袈裟と綴子とを著く、裰子は直裰とも稱す、昔僧服は偏衫と裙子とを以て、上下半身を覆ひたり、後に之を直に綴りて一枚となし稱して直裰又は裰子といふ、卽ち今日使用する僧衣なり。嘉定は宋の寧宗の時の曆號である、皇帝師の德を喜び紫衣と禪師號とを賜はると雖も上表して辭謝す卽ち御辭退せられた。それから尙ほ自分の德をも神秘と秘し慝して平生卒に嗣法相承の事を顯はさずして宛も一介の雲水の如く粧ふて居られた、神秘は隱慝の意と見るが宜い。僅かに終焉のきさみ、終焉は示寂のことさざみは際又は時といふに同じ、漸く涅槃の期に臨んで法嗣の香を焚く、故に行錄に曰く、師六たび道場に坐して未だ稟承を示さず衆或は之を請すれば卽ち曰く我が涅槃堂に拈出せんを待てと、果して臨終に香を拈じて曰く、如淨行脚四十餘年、首め乳峯に到り失脚して陷穽に墮す、此の香今免れず拈出して我が前住雪竇足菴大和尙を鈍置することを、併せて遺偈を書して云く、六十六年、罪犯彌天、打ニ箇跌跳ヲ活陷ニ黃泉一咦、從來生死不ニ相干一とある、師は只だ世間の恩愛や名利を疎遠くするのみに非ず、又洞宗家風嫡傳の光榮ある嘉名をも恐るゝなり、恐るゝとは俗に恐縮の意、師は是の如く高潔なる心操ありしかば實に道德當世に並び無く操行は古今の間に不羣なり、全く萬人に卓越して居られた。

常に自稱して曰く。一二百年祖師の道すたる。故に一二百年より、以來、我が如くなる知識未だ出でずと。故に諸方悉く恐れ慄く。師は曾て諸方を譽めず。尋常に曰く、我れ十九歳より、以來、發心行脚するに有道の人なし。諸方の席主、多くは祇管に官客と相見し、僧堂裏都て不管なり。常に曰く、佛法は各自理會すべし。是の如く道ふて、衆をこしらふことなし。今大刹の主たる、尚ほ是の如く、胸襟無事なるを以て道と思ひ、曾て參禪を要せず。他の那裏に何の佛法かあらん。若し渠が道ふが如くならば、何ぞ尋常訪道の老古錐あらんや。笑ひぬべし、祖師の道夢にも見ざることあり。

此の一段は如淨禪師の訓誡である、師常に自ら稱して曰く、近世一二百年以來祖師の道甚だ廢る、是れ正師なきが爲めである。故に一二百年より以來、我が如くなる善知識未だ世に出でずと、是れ淨祖の自讃毀佗では無い、祖道を慨し古風を興さんが爲め涙を揮ての慈誡である。故に諸方の叢林悉く淨祖の威德を恐れ戰慄く慄くは恐れて震ふこと、師は曾て諸方の宗師家を譽めずして、尋常に曰く、我れ十九歳より以來發心して四方に行脚するに有道の人更に無し、諸方の禪席に主たる者、多くは祇管に官憲や俗客と相見して世事に走り俗情に泥み、僧堂裏の事は却て管せざるなり、彼等は常に曰く、佛法は人々に具足せり宜く各自に理會すべし、理會とは教理を究めて會得すること、彼等は毎も是の如く言ふて衆僧をこしらふて接得すること無し、こしらふは構へ作ること即ち大衆を鞭撻し訓導して其の志操行持を鍛錬せしむることで教育といふ意味に見れば宜い。今五山十刹の如き大山名刹の主たる者すら尚ほ是の如く胸禁無事にて何等の功夫も無く只だ安閑の日月を送過するをもて道と思ひ曾て參禪辨道を要とせず、斯る狀態なれば他の彼等の那裏に何の佛法かあらん、若し渠が道ふが如くならば、何ぞ尋常に身命を賭して道を四方に訪ふ所の道人あらんや、老古錐とは伶俐の衲僧をいふ、錐の鋭利なるが如き智能ある者、老古は老成の意、實に笑ひぬべし斯かる盲目漢は祖師の道に於て夢にだも見ざることありと評すべし。高祖の正法眼藏行持の卷に、淨祖の教訓を示して曰く參禪學道は第一有道心是れ學道のはじめなり、今二百年來、祖師道すたれたり悲しむべし、況や一句を道得せる皮袋すくなし、某甲そのかみ徑山に掛錫するに光佛照そのときの粥飯頭なりき、上堂して曰く佛法禪道必ずしも他人の言句を求むべからず、ただ各自理會すべし、かくのごとくいひて僧堂裏都不管なりき雲兄水弟也都不管なり、祇管與官客相見追尋するのみなり、佛照ことに佛法の機關をしらず、ひと

へに貪名愛利のみなり、佛法もし各自理會ならばいかでか尋師訪道の老古錐あらん云云。此等の教訓を拜すれば、當時如何に其の人に乏しく禪林に弊習多かりしかゞ察せられる。淨祖の深刻なる教誡實に之を證して餘りあり、退て今日の宗勢を見よ、實に言ふに忍びざるものがあるに非ずや、苟も佛祖の兒孫たる者宜しく大丈夫の志氣を振作し、世俗の濁惡に染汚せず正傳の眞風を擧揚すべし、是れ報恩の第一義であらうと思ふ。

平侍者が日錄に、多く師の有德を記せる中に、趙提擧、州府に就て上堂を請せしに、一句道得なかりし故に、一萬鋌の銀子、卒に受ることなくして返しき。一句道得なき時他の供養を受けざるのみに非ず、名利をも受けざるなり。故に國王大臣に親近せず。諸方の雲水の人事すら受けず、道德實に人に群せず。故に道家の流の長者に道昇といふあり。徒衆五人誓ひて、師の會に參ず。我れ祖師の道を參得せずんば一生故鄕に還らじ。師志を隨喜し改めずして入室を許す。排列の時に乃ち比丘尼の次に著かしむ。世に稀なりとする處なり。

平侍者が日錄中に多く師の有德なることを記せる中に趙提擧の事蹟あり、平侍者とは福洲の廣平侍者なり、此の事は高祖の正法眼藏行持の卷にも示されたり、趙は姓、提擧は名である、知州軍州事管內勸農使なりき、彼は時の皇帝寧宗の孫なりといふ、淨祖を迎へ州府の役所に就さて上堂を請せしに銀子一萬鋌を布施として呈した。淨祖上堂し了り提擧に向つて謝して曰く、某甲例に依て山を出でて陞座し、正法眼藏涅槃妙心を開演し謹で以て先公の冥府を薦福す、但だ是の銀子敢て拜領せず僧家這般の物子を要せず、千萬の賜恩、舊きに依て拜還す。提擧曰く、和尙、下官恭く皇帝陛下の親族を以て、到る處且つ貴まれ寶貝見に多し、今先父冥福の日を以て冥府に資せんと欲す、和尙如何ぞ納めざる、今日多幸大慈大悲卒やかに小覷を留めよ。師曰く、提擧臺命且つ嚴なり敢て遜謝せず只だ道理あり、某甲陞座說法、提擧聽なり聽得すや否や、提擧曰く、下官只だ聽て歡喜す、師曰く、提擧聰明山語を照鑑す惶恐に勝へず、更に望む臺臨釣候萬福山僧陞座の時甚麼の法をか說得す、試に道へ看ん、若し道得せば銀子一萬鋌を拜領せん、若し道ひ得ずんば便ち府使銀子を收めよ。提擧起て師に向て曰く、即辰伏して惟みれば和尙法候動止萬福、師曰く這箇は是れ擧し來る底、那箇か是れ聽得底、提擧

擬議す、師曰く、先公冥福圓成なり、覿施は且く先公の台判を待つと、言ひ訖て請暇す、提擧曰く、未だ領せざるを恨みず且喜すらくは師に見ゆることを、乃ち師を送る、浙東浙西の道俗皆な讃歎せりといふ。斯く提擧が、一句の道得なかりし故に一萬餘の銀子卒に受くること無くして返しき、一句の道得なき時は他の供養を受けざるのみに非ず所有名利の待遇をも受けざるなり、故に國王大臣にも親近せず諸方の雲水の人事即ち問候等の進物すら受けず、師の道德は實に人に群ぜず、古今に稀なる行持である。故に道家の流類の中に、他より長者として崇敬せらるゝ者に道昇といふ人あり、その徒弟の衆五人と與に相誓ひて師の會下に參ず、非常なる熱心にて我れ祖師の道を參得せずんば一生古鄕には還らじといふて投ぜり師は其の志を隨喜し玉ひ、別段に其の僧たり俗たるの資格を檢めずして入室を許す、而して經行道業共に衆僧と一如ならしめ、排列の時には即ち比丘尼の次に著かしむ、誠に接取不捨の慈門世に稀なりとする所なりき。

又、善如と云ひしは、我れ一生師の會に在て、卒に南に向ひて一歩を運ばじと。是の如く、志を運び師の會を離れざる類多し。普園頭と云ひしは、曾て文字を知らず、六十餘に初めて發心す。然れども師、低細にこしらひしに依りて、卒に祖道を明らめ、園頭たりと雖も、おりおり奇言妙句を吐く。故に有時上堂に曰く。諸方の長老、普園頭に及ばずと。遷して藏主となす。實に有道の會には有道の人多く道心の人多し。

又福州の僧にて善如と云ひし者は、我れ一生師の會に在りて卒に南に向ひて一歩を運ばじと誓ひて參禪せりき、是の如く、志を運んで師の會を離れざる修道者の類甚だ多し。又普園頭と云ひし者は曾て文字を知らず、六十餘歲にして初て發心す、然れども師は最も熱心に接得し、低細親切にこしらひ敎育せられしに依りて卒に祖道を明らめ禪機に於て自由を得たり、故に園頭の職に就て田園の作務に主管たりと雖も、折々禪道を拈弄する奇言妙句を吐くことがあつた。故に師は有時の上堂に曰く、諸方の大山に住持たるの長老も其の識見恐くは普園頭に及ばずと、後遷して藏主となす、乃ち經藏の主任に轉役せられた、實に有道の會中には有道の人多く道心堅固の人多しと謂ふべし。

尋常只だ人をして打坐を勸む。常に云ふ、燒香禮拜念佛修懺看經を用ゐず。祇管に打坐せよと示して、只だ打坐せしめしのみなり。常に曰く參禪は道心

ある、是れ初めなり。實に設ひ一知半解ありとも、道心なからん類、所解を保持せず。卒に邪見に墮在し蕘苴放逸ならん。附佛法の外道なるべし。故に諸仁者第一道心の事を忘れず、一々に心を到らしめ、實を專らにして當世に群ぜず。進で古風を學すべし。

師は尋常只だ人をして打坐をのみ勸むるのであつた、且つ常に云はるゝ語は、燒香して三寶を供養し禮拜して佛祖を供敬し、念佛して觀想を純一にし、懺悔を修して罪垢を消滅し、看經して智見を開發す、此等は何れも佛法中の行持なるも、端坐の正當時には、之を用ゐずして祇管に打坐せよと示して、只だ打坐せしめしのみなりき。是れ燒香禮拜等の行持を無用なりとするのでは無い、坐禪の時は坐禪三昧に入るを要す、一色の辨道に依らざれば其の功を收め難し況んや祇管打坐の端的には、高祖の所謂、若し人一時なりといふとも三業に佛印を標し三昧に端坐する時遍法界みな佛印となり盡虛空悉く悟となるで、佛法一切の功德藏は總て此の三昧の門に圓通するものである。併し無頭腦にして徒らに枯坐して頑石の如くなれとには非ず、先づ以て大信心を發し大道心に住せねばならぬ。故に師は常に曰く、參禪は道心ある是れ入道の初めなりと、以下は太祖の訓誨である、實に縱ひ一分の知識半分の學解ありとも、若し道心なからん類は、所謂耳口四寸の學にして、その解會する所を其の身に保任し住持せず、口に眞空を說て心は萬境に制せられ、舌に眞如を弄して身は虛妄に誤らる、斯くして卒には邪見に墮在し去るに至る。故に蕘苴放逸となるならん、蕘苴は蠢草糟粕の類で不純不潔にして端整ならぬこと、放逸は規律を存せず心のまゝに飛び廻ること、此等の輩は佛法の中に在りて佛法を破壞し冒瀆する者であるから附佛法の外道なるべし、故に諸仁者は第一に道心の事を忘れず、一擧一動の上にも道心を運びて到らしめ、至誠眞實の道を專らにして、當世の弊習に囚はれつゝある者に群ぜず、進んで古の佛祖の眞風を學習すべし。

實に、是の如くならば、自ら、設ひ會得せずと云ふとも、本來不會染汚人ならん。若し是れ不會染汚ならば、豈に是れ本來明淨人に非ざらんや。故に曰ふ本來染汚せず。此の何をか淨めん。舊窠を脫して便宜を得たりと。夫れ古佛の設け、本より一知半解を起さしめず。一處に修練せしめ、志を一義にして私せず。故に十二時中淨穢の所見なく、自から、是れ不染汚なり。

以下は本則の不染汚の提唱である、實に是の如く道心堅固ならば、十二時中別の用心なく唯だ佛法の爲めに佛法を修するを以て、頭々上に道を究め物々上に道を行ふに至るべし、されば自らは設ひ未だ佛法を會得せずと云とも、其の身心既に道に親しきを以て、本來煩惱惑障に染汚せられざる本有の佛性が其の靈光を發輝するを以て、正に是れ本來不曾染汚人ならん、若し是れ不曾染汚の人ならば豈に是れ本來明白清淨の人に非ざらんや、故に曰ふ、本來染汚せず此の何をか淨めん、此の玄旨を道得せんには宜しく淨不淨の兩端に沒頭せし舊窠を脫して始て道得底の便宜を得たりとの御垂示があつたのである。夫れ古佛曩祖の施設し玉ふ所は、本より一知半解の妄想を起さしめず、驀直に一乘妙法の處に向て修行し棘磨せしめ、其の志を向上の第一義に專注して寸毫の私情をも存せず、故に十二時中淨と穢との所見も無く、行住坐臥未だ曾て禪定三昧を出でざれば、其の人其の境共に是れ不染汚なり、之を名けて平常心是道といふのである。

然れども、尙ほ染汚の所見を免かれず。掃箒を用ゐる眼あり。明らめずして一歲餘を經るに、一度皮膚のもぬくべきなく、身心の脫すべきなきことを得て、打不染汚處と道ふ。尙ほ恁麼なりといへども、早く一點を著くる。故に道ふ。聲未だ畢らざるに、即ち打す。時に通身汗流れて、早く身を捨て、力を得畢りぬ。實に知りぬ。本來明淨にして、都て染汚を受けざることを。故に尋常に曰く、參禪は身心脫落と。

然れども淨祖は尙ほ未だ染汚の所見を免かれず、どうしても染汚といふことが氣に懸つてならなんだ、何卒掃箒を用ゐて塵埃を拂ふが如く、我が知見を以て染汚を除かんとするの眼あり見解が常に胸中に存して居つた。そこで雪竇の垂語の底意を明らめ得ずして更に功夫に力められ、一歲餘を經るに至りて、一度漸く皮膚脫落して唯だ眞實のみ存すと古人の言はれしも方便の施設である。本來明淨の那人には染汚すべき惑障も無く淨潔にすべき一物も無く乃ち皮膚のもぬくべきも無く、身心の脫すべきも無き本來不染汚の地に安住することを得て、不染汚の處を打すと道ふた、然れども尙ほ恁麼なりと雖も早く染汚不染汚の隔歷を存するに似たり、是れ既に大虛空裏に一點の雲烟を著くる處あるを以て、其の聲未だ畢らざるに即ち打す實に是れ痛處に一鍼を下されたのである。時に淨祖は通身汗流れて早くも身を捨て力を得畢りぬ、乃ち自己を忘却して道力頓に現成することを得た、是に於てか實に知りぬ、自己本來明淨にして都て染汚を受けざることを、是れ大死一番して大活現成せる底の消息である。

吾人も亦宜く先づ法の爲めに己れを忘れ去るべし、一切の我見人見法執法慢を捨離すべし、唯だ凡情を盡せば別に聖解なし、故に淨祖は尋常に曰く參禪は身心脫落なりと、祇だ箇の身心脫落實に是れ參禪の眼目である、自己の身心を捧げて佛法に打任せぬる時は、擧措進退皆な道の光となり法の妙用となる、其の時一切の繫縛を離れて大自在を得べし、即ち是れ脫落面の活計である。

且く道へ、如何が是れ這の不汚汚底。

通風遠扇堅金剛。　匝地爲之所持來。

諸人者且く道へ如何なるものが是れ這の不染汚底なるぞ、回光返照して見よ、人々の自己本來不染汚底なり、妄りに他に向て覓むること勿れと結ばれて七言二句の頌を示された。道風遠く扇て金剛より堅し、匝地之れが爲めに所持し來る、實に淨祖道の宗風を拈提して活潑々地である、此の世界は風力に依て空中に維持せられて居る、その風力といふは眼根を以て知覺し能はざる自然力である、自然力の堅固なることは金剛の如し、淨祖の唱道し玉へる不染汚底の那一物は即ち佛祖の本命元辰である。此の那一物は人々に具足して缺くることは無い、是心是佛、是心是法である、佛道といふても決して他物では無い、此の法こそ不生不滅不垢不淨不增不減である。是の如き佛祖の大道は印度に扇ぎ支那に扇ぎ我が日本國にも扇ぎ、即ち遠く天地の間に扇ぎて道風の至らざる所は無い、その大道の風力は金剛よりも堅く、如何なる者でも之を動かし若しくは打破ることは出來ぬ、而して匝地即ち世界國土も之が爲めに保持せられ來る、天地の覆載も日月の運行も草木の發生も人類の生活も總て大道の力に依らざるは無い、此の大道は無限の智光を有し無盡の威力を備へ無遍の慈德を發す、故に之に從ふ者は福慧を莊嚴し、之に背く者は苦厄に縛せらる。若し此の不染汚底の大道、本來明淨の自己を究盡せんと欲せば、乞ふ試に身心を脫落して見よ、如淨禪師の古今に傑出せるは其の身心を大道に投じて寸毫も私情なく私欲なく行住坐臥只だ大道の中に逍遙して居られた、大道の前には權勢も無く名利も無く畏れも無く疑ひも無い是れ則ち身心脫落である。故に淨祖の全身心が佛法身となり大道心となる、造次顚沛盡く是れ金剛座上の閑游戲であらせられた、故に東司上にも大光明を放ち飯臺上にも大法輪を轉じ、其の言ふ所は萬世の師表となり其の行ふ所は天下の儀則となる、承陽高祖の大智見を以て歸依尊崇至らざる無かりし者、實に是れが爲めである、吾人も亦大道心を發して此の道風を景仰し修習せねばならぬ。

第五十一章

第五十一祖。永平元和尚。參天童淨和尚。淨一日後夜坐禪示衆曰。參禪者身心脫落也。師聞忽然大悟。直上方丈燒香。淨問曰燒香事作麼生。師曰身心脫落來。淨曰身心脫落脫落身心。師曰這箇是暫時伎倆。和尚莫亂印某甲。淨曰我亂不印汝。師曰如何是亂不印底。淨曰脫落身心。師禮拜。淨曰脫落脫落。時福州廣平侍者曰。外國人得恁麼地實非細事。淨曰此中幾喫拳頭。脫落雍容又霹靂。

以上本則、其の甚深なる宗旨は實に日域曹洞の源泉であるから、太祖の御提撕亦麤に入り細に入る、されど本則の全文に渉りて、御提唱が無いから、一應講說して置くことゝする、高祖は寶慶元年五月一日始て如淨禪師に參ぜられ、其の年の夏安居中に大悟成道し即ち此の本則の因緣があつたのである。

如淨禪師一日後夜即ち曉天の坐禪の時に大衆に示して曰く、參禪は身心脫落なりと、是れ即ち睡眠僧を誡め玉ひし時の垂示で、此の下に燒香禮拜念佛修懺看經を要せず祇管に打坐して始て得てんといふ語があつた。高祖は此の身心脫落の一句語を聞て忽然として大悟す、此の大悟は恰も釋尊の見明星悟道と一如である、高祖、禪に參じてより十有餘年未だ一日も蒲團に礙えられざるの日はあらず、修彌〳〵進み證益々圓なるも尚ほ一點の疑團を存し玉へるなり。然るに今日忽にして疑團を氷消し、法界廓然として心地無礙なることを得玉へり、その歡喜果して幾許ぞ。直ちに方丈に上て燒香す、燒香は謝恩の意である、淨問て曰く燒香の事作麼生、汝は箇の什麼物をか得たるや、高祖曰く身心脫落し來る、即ち獲得せしに非ずして放下し來つたのである、脫落は解脫である、九界の妄法も三界の繫縛も皆な此の身心より出づ、凡夫は此の身心に執着して我見を增長し迷執を生起し、而して身心の爲めに役せられ縛せらる、一たび脫落し去る時は、「濁りなき心の水にすむ月は波もくだけて光とぞなる」盡十方世界是れ一大光明聚となることを見破すべし、脫落の意義は猶ほ後段に於て更に說明すべし。

淨曰く身心脫落脫落身心、天童と高祖との二面は無い、三世十方を通じて身心脫落であるから、その脫落の身心が隨處に活動する、身心脫落は向去門で脫落身心は却來門であるといふも早く既に蛇足である、此の處には向去も却來も體用も事理も無い。高祖曰く這箇は是れ暫時の伎倆和尚亂りに某甲を

印すること莫れ、伎倆は巧智で俗に小刀細工といふ程の事、私の所得は一時の小刀細工で決して之に滿足は致して居らぬ、和尚亂りに印可を與へ玉ふな、冀くは更に一段向上の接得こそ望ましけれ。淨曰く我れ亂りに汝を印せず、佛法は大事なり何ぞ輕しく之を印可すべきや、高祖曰く如何なるか是れ亂りに印せざる底、向上の鉗鎚如何ん、淨曰く脫落身心、汝も亦た是の如く吾も亦た是の如し、三世の諸佛も亦脫落、歷代の祖師も亦脫落、八萬四千の法藏も三千七百の公案も畢竟じて脫落の身心面である、高祖は是に於て禮拜す、感應道交である、淨曰く脫落脫落、燒香も禮拜も面授も面禀も只此の脫落三昧である、是れ實に我が高祖の祖道正傳の一大消息であつた。時に福州の廣平侍者、傍に在りて曰く、外國の人にして恁麼の田地を得ること實に細事に非ず、古今稀に見る特異の事であると、感歎の餘り斯く申した。淨曰く此の中幾くか拳頭を喫す脫落雍容し又霹靂す、天童會下に於て眞に山僧が拳頭を喫し得る者果して幾許かある、我が傍に在り乍ら我が拳頭を喫することを知らず、對面千里の漢のみ多きは慨すべきことである、今や幸に道元の能く脫落し來れるあり、此の脫落は諸佛の無上智である正遍智である、而して能く恩德を兼ね斷德を帶ぶ、佛面祖面只だ是れ脫落である、雍容は雍は和らぐ容は包る即ち和適して衆を容るゝの意である、佛祖の恩德は慈悲柔輭にして怨親齊しく接して餘すこと無し、霹靂は激雷なり其の威德天地をも震動し、木石をも粉碎するの大機あるをいふ、

佛の三德に配すれば脫落は智德、雍容は恩德霹靂は斷德である。佛祖の正智は能く萬法の根源を究め自己の妙性を盡し人法双べ空じて身心脫落である、此の中自から無限の大慈悲ありて、普く三千界を接して一衆生をも漏さず、而して其の威德は生死に窩窟を截斷し外魔の封疆を擊破して何物の觸犯をも許さぬ。古語にも、放行するときは瓦礫も光を放ち、把住するときは眞金も色を失ふとあるが、放行は慈悲門で把住は掃蕩門である、是を活人劍、殺人刀とも稱す、此の兩手が完全で無ければ禪門の大機大用を現出することは出來ぬ。一應文字禪を弄すれば、放行は脫落身心で、把住は身心脫落である、身心脫落の正當時には淨祖も無ければ高祖も無い、脫落身心の端的には高祖燒香し淨祖印可す、二にして不二、不二にして二、是を密傳密付と稱するのである。

師諱は道元。俗姓は源氏。村上天皇九代の苗裔。後中書王八世の遺胤なり。正治二年初て生る。時に相師見たてまつりて曰く。此子聖子なり。眼重瞳あり。必ず大器ならん。古書に曰く。人聖子を生ずる時は其母命危うし。此兒七歲の時必ず母死せん。母儀是を聞て驚疑せず怖畏せず。增々愛敬を加ふ。果して師八歲の時母儀即ち死す。人悉く道ふ一年違ひありと雖も果して相師

の言に合すと。

高祖承陽大師、諱は道元、希玄と號せらる、俗姓は源氏人皇六十二代村上天皇より九代の苗裔にて後中書王より八世の遺胤なり、後中書王とは村上天皇の皇子二品中務卿具平親王である、苗裔の苗は胤なり草の莖葉根の生ずる所、裔は衣裾の末にて衣の餘りなり故に以て遠末子孫の稱とす、遺胤も苗裔の意に同じ、御父は內大臣右近衞大將東宮大傅贈從一位久我通親公、御母は藤原氏攝政太政大臣從一位基房公の女、高祖は在胎十有三月、土御門天皇正治二年正月二日太陽曆に推歩すれば一月二十六日京都に初て生る、母懷任の時空中に聲ありて、此兒は五百年以來の大聖にして正法を日本に弘通せんが爲め托胎すとの靈告があつた。誕生せられし時に觀相の師が大師の相好を見奉りて曰く、此兒は聖人の資質ある子なり、七處平滿にして骨相奇秀なり眼に重瞳ありて至聖の虞舜に齊し必ず大聖の器ならん、古書に曰く人聖子を生ずる時は其母の命危うしとある、恐くは此兒七歲の時には必ず母公死し玉はんと。母儀は其の豫言を聞かれても曾て驚愕も疑惑もせず又怖畏もせず增〻慈愛と尊敬とを加ふ、果して高祖八歲の時母儀卽ち死す、人皆な悉く道ふ、相師の言ふ所と一年の違ひありと雖も果して其の豫言に合すと。加之、高祖は建仁二年御年三歲の十月二十日御父通親公の薨去に遇はれそれより

仲兄大納言通具公が大師を鍾愛して鞠育せられた。

卽ち四歲の冬、初て李嶠が百詠を祖母の膝上に讀み、七歲の秋、始て周詩一篇を慈父の閣下に獻ず。時に古老名儒悉く道く。此兒凡流に非ず。神童と稱すべしと。八歲の時悲母の喪に逢て哀歎尤も深し。卽ち高雄寺にて香烟の上るを見て生滅無常を悟り、其より發心す。九歲の春始て世親の俱舍論を讀む。耆年宿德云く。利なること文殊の如し。眞の大乘の機なりと。師幼稚にして耳の底に是等の言を蓄へて苦學を作す。

卽ち高祖の聰明なる僅に四歲になり玉ひしに其の冬、初て唐の李嶠字は巨山が著はしたる百詠を祖母の膝の上にて讀み玉へり、李嶠の詩百二十首を纂めて上下二卷と爲し題して李嶠雜詠といふ、又七歲の秋には始て周詩一篇を賦して慈父の閣下に獻ぜられ、毛詩及び春秋左氏傳を讀みて粗ぼ其義に通じ玉ふた、此處に慈父とあるは育父通具公を指したのである。時に古老の名儒と稱せらるゝ人々は悉く道く、此兒は實に凡庸の流類に非ず神童と稱すべしと、神童とは小兒にして奇才あるをいふ。八歲の

時即ち承元元年の冬不幸にして悲母の喪に逢ひ玉ふた、悲母臨終の時大師を枕頭に招き懇ろに後世の菩提を弔ひ玉ひてよと遺囑し玉へり、孝心深き大師は幼年の胸中にも哀悼の涙禁め難く悲歎の情尤も深し、即ち高雄寺にて葬儀を營まれけるが、其折龍前の香烟の上りては消え消えては上るを見て、深くも生滅無常の理を悟り、此世のはかなきことは草の葉の露の如く人の命の憑み難きことは香の烟にも似たり、生死の海波嶮しく彼岸の空路遠し、何れの時か安穩快樂なることを得ん、願くは身を佛門に投じて涅槃常樂の域に踰り、父母の冥福を資けまゐらせばやと發心せられた。是れより佛教祖訓に心を寄せ九歲の春始て世親菩薩の俱舍論を讀む、耆年宿德の人々相語つて云く、此兒聰明伶利なること文殊菩薩の如し眞の大乘の道機なりと、耆は年老て六十歲以上に至れる者、宿德は宿昔より道德に於て優れたる者、今は當時の高僧大儒を指したものであろう。文殊は智母とも稱して智慧の德に富ませ玉ふ菩薩である。高祖は幼稚にして耳の底に是等の評判せる言を蓄へて一層志を勵して苦學を作す、故に建撕記には「勤學の時針を以て股を刺して眠をさませし古人を慕ひて晝夜意を勵すこと尋常ならず」とある。

時に、松殿の禪定閣は、關白攝家職の者なり。天下に竝びなし王臣の師範なり。此人、師を納て猶子とす。家の秘訣を授け國の要事を敎ゆ。十三歲の春即ち元服せしめて朝家の要臣となさんとす。師獨り人に知られずして竊に木幡山の莊を出で叡山の麓に尋ね到る。

時に松殿の禪定閣藤原師家公は關白攝家職の者なり、松殿禪定閣とは居處の號である、攝家職とは攝政となるべき家柄のこと、故に其家名は高く人臣の上に位して天下に並びなし王臣の師範なり、師家公は大師の御母の兄にてましませり、齡既に四十歲を過ぐるも子なかりしかば高祖を納て猶子とす、猶子は養子のこと、王臣の師表たるべき敎養を爲さんとて、相家の秘訣をも授け國政の緊要なる事を敎え、年僅に十三歲の春即ち元服せしめて朝家の要臣となさんとす、元服とは幼童が元めて大人の服を着け冠をかぶり成人となるの禮である。高祖は此事を知りて如何計りか驚き玉ひしならん、苟も相家の寵子として朝廷の要職に補せられなば、遁世出家の事益々難かるべしと思ひしが、此事誰れに諮らん由もなき爲め、古の釋尊の王城を遁れて身を苦行林中に投じ玉ひし勝躅に慣ひ、獨り人に知られずして竊に養家を忍び出で木幡山の莊に到り更にその山莊を出で比叡山の麓に尋ね到る。

時に、良觀法眼と云ふあり。山門の上綱顯密の先達なり。即ち師の外舅なり。

彼室に到て出家を求む。法眼大に驚いて問て曰く。元服の期近し、親父猶父定めて瞋あらんが如何。時に師曰く。悲母逝去の時囑して曰く汝出家學道せよと。我も亦是の如く思ふ。徒に塵俗に交らんと思はず。但出家せんと願ふ。悲母及び祖母姨母等の恩を報ぜんが爲に出家せんと思ふと。法眼感涙を流して入室を許す。即ち横川首楞嚴院の般若谷の先光房に留學せしむ。

時に叡山の麓に良觀法眼と云へる大德あり、其位地を云へば山門の上綱にして一山の上首に在り、其學殖を云へば顯密の先達なり。顯密とは顯教は密教に對して釋尊衆生の機類に應じて顯了に說かれたるもの即ち天台の五時八教是れなり、密教は大日如來自內證の境を說けるもの、天台所傳の密教を台密といひ、眞言所傳の密教を東密といふ。良觀法眼は即ち高祖の外舅なり基房公の子師家公の弟、高祖生母の兄である。高祖は深夜法眼の禪扉を扣き彼の室に到て出家を求む、法眼は大に驚て問て曰く御身元服の期既に近しと聞く、若し私に出家せば親父即ち生家の父と賴む兄通具公、猶父即ち養父師家公は定で瞋り玉ふことあらんが如何。時に高祖曰く、我が悲母御逝去の時懇ろに囑して曰く、汝は出家學道して父母の菩提を弔ひ廣く人天を濟度せよと仰せられき、我も又悲母の遺訓までも無く自ら進んで是の如く思ふ、徒に塵俗に交はらんとは思はず、但出家せんと願ふ、其期する所は慈親悲母及び祖母姨母等の大恩を報ぜんが爲に出家せんと思ふと仰せられた、是れ則ち棄恩入無爲眞實報恩者の佛意を奉ぜられたものである、乃で法眼は感涙を流して入室を許す、即ち横川首楞嚴院の般若谷の千光房に移して留學せしむ。

卒に十四歲、建保元年四月九日座主公圓僧正を禮して剃髮す。同十日延曆寺の戒壇院にして菩薩戒をうけ比丘となる。然しより山家の止觀を學し南天の秘教を習ふ。十八歲より內に一切經を披閱すること一遍。

卒に十四歲の春を迎へられ建保元年四月九日に天台座主公圓僧正を禮して剃髮す、同く十日延曆寺の戒壇院にして公圓僧正を以て和尙と爲し、菩薩戒をうけて比丘となる。然しより猛烈に修學の功を積み山家の止觀を學して其堂奧を究め、南天の秘教を習つて其玄致を探り玉へり。山家は叡山に於ける天台の學府、止觀は摩訶止觀である、摩訶止觀十卷は天台智師の撰述にして觀心の法門を說き一家修行の本據とする所、南天の秘教とは密教なり、昔は龍樹菩薩南天の鐵塔を開き金剛薩埵より親く密教を受けたりといふ、高祖は斯くして顯密の二教を研鑽し年十八歲より內に早くも一切藏經を披閱する

こと一遍せられた。

後に三井の公胤僧正、同く又外叔なり。時の明匠世に並びなし。因て宗の大事を尋ぬ。公胤僧正示して曰く。吾宗の至極今汝が疑處なり。傳敎慈覺より累代口訣し來る所なり。此疑をして晴さしむべきに非ず。遙に聞く西天達磨大師東土に來て方に佛印を傳持せしむと。其宗風今天下に布く名けて禪宗と曰ふ。若し此事を決擇せんと思はば、汝建仁寺榮西僧正の室に入て、其故實を尋ね遙に道を異朝に訪ふべしと。

高祖の叡山に於ける修學中經論を渉獵して端なくも大疑團を發し玉へり、そは顯密二敎倶に本來本法性天然自性身と談ず若し此の如くならば三世の諸佛甚に依てか更に發心して菩提を求むるやといふ疑問であつた。之を山門の耆宿に質すも明らかに之を答釋する者なし、高祖は實踐躬行を以て求道の眼目となす、空理空論は大師の肯じ玉はざる所である。後に山を下つて三井寺の公胤僧正を訪はれた、僧正は同く又外叔なりとあるが、僧正と高祖と俗系上の關係未だ詳ならず、前に擧げたる得度の師

公圓僧正は藏原師輔の後胤にして、高祖母方と親族關係がある、公胤僧正の傳は本朝高僧傳に出でゝ「三藏を周覽して顯密に粹なり衆、佛法補處の人と稱す建保四年六月二十六日齡八十餘にして寂す」とあり、新古今和歌集の釋敎の部に公胤僧正の觀心如滿月若在輕霧中の詠歌を載て云く、「我が心まだ晴れやらぬ秋霧にほのかに見ゆる有明の月」と、兎に角時の明匠にして世に並びなしと稱せらる。因て高祖は台宗の大事たる前記の大疑問を以て尋ねられた。公胤僧正示して曰く、吾が天台宗義の至極する處こそ今汝が疑着する處なり、乃ち天台宗祖傳敎大師最澄、其弟子慈覺大師圓仁より累代口訣親付し來る所なりと雖も、吾が學得する所を以て、未だ此疑をして滿足に晴さしむべきに非ず、遙に聞く西天竺の達磨大師東土に來て方に佛心印を單傳稟受せしむと、其宗風支那に在りては今既に天下に布く名けて禪宗と曰ふ、是れ實に直截根源の宗旨と稱す、若し此大事を決擇覺了せんと思はゞ、汝宜しく禪宗傳法の宗師たる京都建仁寺榮西僧正の室に入て、其法門の故實を尋ね、猶ほ未だ安心の地を得ずんば遙かに道を異朝の支那に訪ふべしと、此訓誨は正しく高祖更衣の動機、入宋の基を成したものであろう、故實とは古來相傳の實義といふ程の意味である。

因て十八歳の秋、建保五年丁丑八月二十五日に建仁寺明全和尚の會に投じて

僧儀を具ふ。彼の建仁寺僧正の時は、諸の唱導初て參ぜしには三年を經て後に衣を更しむ。然るに師の入りしには九月に衣を更しめ、即ち十一月に僧伽梨衣を授けて以て器なりとす。彼明全和尚は顯密心の三宗を傳へて獨り榮西の嫡嗣たり。西和尚建仁寺の記を錄するに曰く。法藏は唯明全のみに囑す。榮西が法を訪はんと思ふ輩は、須らく全師を訪ふべし。

因て十八歳の秋建保五年丁丑八月二十五日に建仁寺明全和尚の會に投じて僧儀を具ふ、此說は一般に傳ふる所の高祖大師の傳記とは異なつて居る、建撕記に依れば建保二年高祖十五歳の時建仁開山千光禪師の室に入て初て臨濟の宗風を聞くとある。面山和尚訂補には、師建仁榮西に到て便ち問ふ、本來本法性天然自性身、什麼としてか三世の諸佛發心して道を成ず、西云く、三世の諸佛有ることを知らず狸奴白牯却て有ることを知る、師此に於て伏膺すとある。洞上聯燈錄、延寶傳燈錄略ぼ同じ、翌建保三年七月五日榮西禪師遷化す、是より其法嗣明全和尚に隨侍せられた。此本文の示す所は別に證據すべき者ありや、此等歷史上の詮索は今茲では餘りに重きを置かぬ方が宜しかろう、彼の建仁寺榮西僧正の時は、諸の唱導即ち經論の講習を主とせる者初て參ぜしには、輕しく歸入を許さず凡そ三年を經て其志操の堅實なるを認めたる後に衣を更しむ。然るに大師の入りしには九月に衣を更しめ即ち十一月には僧伽梨衣を授けて以て道器なりとす、僧伽梨衣は大衣と譯し九條衣なり說法衣ともいふて說法度生の師の披着する所とす。彼明全和尚は顯教密教及び佛心宗の三宗を傳へて獨り榮西禪師の嫡嗣たり、故に榮西和尚建仁寺の記を錄するに曰く、我が正法眼藏は唯明全一人のみに囑す故に榮西が法を訪はんと思ふ輩は須らく明全禪師を訪ふべしとある。序でに榮西明全兩師の略歷を述ぶれば、榮西禪師は備中の人、十一歳にして出家して廣く顯密の深義を究め、二十八歳の時入宋し幾も無く歸朝し、四十七歳の時再び入宋し遂に法を臨濟宗黃龍派虛菴懷敞禪師に嗣ぎ、建久二年皈朝し、始て禪風を興す、我が國に禪道を傳へたるは大和元興寺道昭を始めとし前後七傳ありと雖ども、多くは之を傍修するのみにて未だ一宗をなすに至らず、榮西禪師始て禪を宋土に傳へ歸朝して筑前に聖福寺を開き鎌倉に壽福寺を興し、京都に建仁寺を創す、されども種々の故障ありて未だ純一無雜の禪風を擧揚し難きを以て、建仁寺の如きも圓密禪の三宗兼學の道場とせられたのである。禪師の門下には幾多の龍象ありしも明全和尚を以て上首となす、和尚は勢州の人榮西の門下に投じて心要を傳へ最も戒行に精し、貞應二年に高祖と共に入宋し居ること三年不幸病に罹り天童山の了然寮に寂せられた。

師、其室に參じ、重て菩薩戒を受け衣鉢等を傳へ、兼て谷流の秘法一百三十四尊の行法護摩等を受け、並びに律藏を習ひ又止觀を學す。初めて臨濟の宗風を聞て、大凡顯密心三宗の正脈皆以て傳受し獨り明全の嫡嗣たり。

高祖は其明全和尚の室に參じて重て菩薩戒を受け衣鉢即ち袈裟や佛鉢等を傳へられ、兼て眞言長谷流の秘法一百三十四尊の行法及び護摩等をも受け、並びに律藏を習ひ又更に止觀の法門を學す、秘法、行法護摩等は密敎の敎條で、律藏、止觀は顯敎の法門である。護摩は梵語、譯して焚燒といふ、密敎修法の一なり、律藏は佛敎を分ちて經藏律藏論藏の三藏とす、律藏は戒律の部類を攝したるものとす、茲に初めて臨濟の宗風を聞て、大凡顯敎密敎及び佛心宗即ち禪道、此の三宗の正脈皆以て傳受し玉へり、されば高祖は榮西禪師の寂後明全和尚を師となして其の堂奥に參じ、獨り其の嫡嗣となられたのである。

稍や七歲を經て、二十四歲の春、貞應二年二月二十二日、建仁寺の祖塔を禮辭して宋朝に赴き、天童に掛錫す。大宋嘉定十六年癸未の曆なり。

稍や七歲を經てとあるも十五歲にして建仁に參禪せられたとすれば在京約滿九年となる、二十四歲の春貞應二年二月二十一日、後堀川天皇の宣旨及び兩六波羅府帥の關劵を得て、建仁寺の開祖榮西禪師の塔廟を禮辭して其師明全和尚と與に京都を發せられた、前左衞門の督從三位入道木下道正、加藤四郎左衞門景正等が隨從した。三月下旬商舶に乘じて筑前博多を解纜し、四月初旬浙江省慶元府に着せらる、而も尙ほ船中に在ること月餘彼の阿育王山の典座と數番の問答ありしが如きは船中に於ける相見であつた。五月十三日初て太白山天童景德寺に詣り無際了派禪師に謁して同寺に掛錫す、禪師は楊岐派下の尊宿にして大慧宗杲の法孫である。時に大宋寧宗皇帝の嘉定十六年癸未の曆にてありし、明全和尚も亦天童に掛錫せられた、和尚は年齒四十歲であつた。此時天童の維那は二人を新戒の位次に排列せり、是れ遠方邊土の者と思ひ妄りに階級を差別して之を遇したのである。元來僧臘戒次と稱して受戒の先後に依りて位次を定むるは佛祖の洪範なり、一佛法の中には固より國疆のあるべき理なし、乃で高祖は其非法を責められたるも、是れ古來の慣例なりとて之を改めず、高祖は大に之を慨歎せられ再び之を上表して天裁を仰がれけるに、皇帝大に之を感ぜられ勅して以て僧臘の次序を格定せしめられけり。

在宋の間、諸師を訪ひし中に、初め徑山琰和尚に見ゆ。琰問を云く幾時か此

間に到る。師答て曰く客歳四月。琰曰く群に隨て恁麼にし來るや。師曰く群に隨て、恁麼にし來る時作麼生。琰曰く也た是れ群に隨て恁麼にし來る。師曰く既に是れ群に隨て恁麼にし來る作麼生か是ならん。琰一掌して曰く者の多口の阿師。師曰く多口の阿師は即ち無にしもあらず作麼生か是ならん。琰曰く且く坐喫茶。

高祖は天童に寓すること幾ど二歳、無際の允可を蒙ること、數回なりしも猶ほ自ら之を肎はず、嘉定十七年の秋天童を辭して遍參の途に上り玉へり。在宋の間諸師を訪ひ玉ひし中に初め五山の隨一たる徑山興聖萬壽禪寺に至り浙翁如琰和尚に見ゆ、如琰は天童の無際と嗣法の兄弟である、琰問て云く幾時か此間の支那に到るや、師答て曰く、客歳四月、琰曰く群に隨て恁麼に來るや、大勢群を成して入宋せしやとは志操と見知との點檢である。凡そ入宋者の胸中には、學文を修めやうとか、古蹟を參拜しやうとか、異域の風景に接しやうとか、さま〳〵なる希望を澤山に蓄へて居る、汝も亦然るならん、師曰く群に隨はず恁麼に來る時作麼生某の胸中只だ大道を景慕するの外他に一物も存せず、和尚何を以て某を接せんとはする、琰曰く也た是れ群に隨て恁麼にし來る、本來無一物の端的には道を求めんとするも也た是れ一場の閑家具ならずや、師曰く既に是れ群に隨て恁麼にし來る作麼生か是ならん、求道の閑家具こそ某が放身捨命して參究せんと欲する所、一法普く一切の法を含む、此道の存する處萬德自ら備はる、知らず如何が用心すべきや、琰一掌して曰く者の多口の阿師、いや中々理論の達者な人ぢやわい、多口は辯者のこと、阿師の阿の字は助字である、師曰く多口の阿師は即ち無きにしもあらず作麼生か是ならん、某甲は理屈が過ぎるかも知れません、されど某甲は理論を闘はすのが本意では無い、要は學道の用心である、佛法八萬の法門も細行も歸する所は唯有一乘法である、群に隨ふと否とは問題とするに足らぬ、その一乘法中の大眼目は如何であるぞ、實に高祖求法の大精神は實に銀山鐵壁である、琰曰く、且く坐喫茶、まあ坐つて御茶でも喫むが宜い、聊か龍頭蛇尾の感がある。

又台州の小翠巖に造る。卓和尚に見えて、便ち問ふ如何なるか是れ佛。卓曰く殿裏底。師曰く既に是れ殿裏底、什麼としてか恒沙界に周遍す。卓曰く遍沙界。師曰く話墮也。

又台州の小翠巖に造る、住持盤山思卓和尚に見ゆ、和尚は大慧宗杲禪師の法孫である、便ち問ふ如

何なるか是れ佛、卓曰く、殿裏底、佛殿裏に去て禮せよ必ずしも之を遠きに求むべからず、思卓惜むらくは只だ八成を道ひ得たり、師曰く既に是れ殿裏底什麼としてか恒沙界に周遍す、世界の無數なること恒河の沙數にも勝れり、若し殿裏底の佛のみを禮して遍河沙の佛を知らざれば井蛙の見たることを免れず、殿裏の佛と遍界の佛と是れ同か是れ別か是れ一か是れ二か、卓曰く、遍沙界、殿裏底の佛即今遍沙界に靈光を放ち來れり、可惜乎卓和尚大師の後に追隨し來れり、師曰く、話墮也、御話が墮落した最早此商量は失敗であると、大小廣狹の見解を一蹴せられたのである。

是の如く、諸師と問答往來して大我慢を生じ、日本大宋に我に及ぶ者なしと思ひ、歸朝せんとせし時に、老璡と云ふ者あり。勸めて曰く。太宋國中獨り道眼を具するは淨老なり。汝見えば必ず得處あらん。是の如く言へども一歲餘を經るまで參ぜんとするに暇なし。

是の如く名藍甲刹の諸師と問答往來して大道を欣求し玉ひしも未だ明師に値遇すること能はず、天台の雁山、平田の萬年、慶元の護聖、鄞州の育王等をも歷參せられけるも皆な失望に畢れり。是に於てか大我慢を生じ玉ひ、日本にも大宋にも我に及ぶ者を求むるになしと思ひ、最早歸朝せんとまで決心せし時に、不圖老璡と云ふ者ありて勸めて曰く、大宋國の中、獨り道眼を具するは長翁如淨老漢のみなり、汝若し老漢に見えば必ず得る處あらん、是の如く言ふを聞かれつれども猶ほ廣く各地を遍歷せられし爲め、一歲餘を經るまで參ぜんとするも暇なし。老璡忠告の事異說あり、建撕記に依れば、大師諸方を遊歷するに師範とすべき明師なきを以て再び天童に歸りて派無際を訪はんとせしも、途中にして無際の示寂せしを聞き大に嗟歎して歸朝の念を萠されける、故に明全和尚の天童に寓し玉ふを訪はんとて再び山に登り玉ふ途中老璡に遇ふて淨老參見の志を起し急ぎて天童に登り玉ふと記してある、又一說には徑山羅漢堂の前にて老璡に遇ひ王ふともある。

時に派無際去て後、淨慈淨和尚天童に主となり來る。即ち有緣宿契なりと思ひ、參じて疑を尋ね、最初に鋒先を折る。因て師資の儀とす。委悉に參ぜんとして即ち狀を奉るに曰く。某甲幼年より菩提心を發し、本國にして道を諸師に訪ひて聊か因果の所由を知ると雖も、未だ佛法の實歸を知らず名相の懷標に滯る。後に千光禪師の室に入て初て臨濟の宗風を聞く。今全法師に隨て

大宋に入り、和尚の法席に投ずることを得たり。是れ宿福の慶幸なり。和尚大悲外國遠方の小人、願くは時候に拘はらず、威儀不威儀を擇ばず、頻々に方丈に上り法要を拜問せんと思ふ。大慈大悲哀愍聽許したまへ。時に淨和尚示して曰く。元子、今より後は著衣叉衣を言はず晝夜參問すべし、我れ父子の無禮を恕するが如し。

時に天童の派無際和尚は既に去て後、淨慈寺に住持たりし如淨和尚天童に主となり來る、派無際は遷化せられたのである。如淨禪師は道德一世に高しと雖も、末後まで嗣承を發表せられぬ程で極めて隱君子の風でありし爲め高祖は今まで相見の機を得られなんだものと見える。今こそ即ち有緣宿契、宿世の因緣契當の時節なりと思ひ、その膝下に參じて疑を尋ね敎を請ひ、相見の最初に中心悅服して從前我慢の鋒先を折る因て全く師資の儀とするに至る、師資とは師匠弟子の事、即ち法中の父子に同じ。從前各刹の師家に參問せられたるは一時の相見に過ぎざりしが、淨老に見ゆるに至つて眞實父子の如き親しき儀を取られた。故に寶慶元年五月朔日初めて參拜するや、如淨禪師は、佛々祖々面授の法門現成せりと仰せられた。猶ほ禪師は左右に告げて、前夜悟本大師を迎ふと夢む此子恐くは是れ大師の再生か我が宗他に憑て大に世に興らんと申された。猶ほ高祖は放身捨命の大道心を捧げて委悉綿密に參得せんとして即ち淨祖に狀を奉るに曰く、某甲は幼年より菩提心を發し、本國にして道を叡山の公圓、三井の公胤等の諸師に訪ひ聊か修因證果の所由即ち原理原則を知ると雖も、未だ佛法の眞實歸着の要機を知らず、徒らに顯敎密敎頓敎漸敎等の名義や敎相の懷標にのみ滯つて居りました、懷標とは名相の標準を懷中してそれのみに屈托するの意。後に千光禪師榮西の禪室に入て初て臨濟の宗風を聞くも未だ徹底するに至らず、榮西禪師は宋土に於て請雨の法を修して雨を降らしたので、時の皇帝より千光國師の號を賜はりしといふ、是れ請雨法の時光明を放ち千葉萬枝に澍ぎたる雨露の上に映じ璨然珠を聯ぬるが如くなりに依る。故に今や明全法師に隨て大宋に入り幸にも和尚の法席に投ずることを得たり、是れ實に宿世の福因に依る無上の慶幸なり、和尚大慈大悲外國遠方の小人を憐れみ、願くは時候に拘はらず晝夜を論ぜず又威儀を具すると威儀を整へざるとを擇ばず、頻々に方丈に上り法要を拜問せんと思ふ、幸に大慈大悲鄙情を哀愍して某甲が志願を聽許したまへと申上られた。時に如淨和尚示して曰く、元子の望む所喜で之を許すべし今より後は著衣叉衣を言はず晝夜適宜に參問すべし我れは父子の間に於て多少の無禮を宥恕するが如くすべし、著衣とは袈裟を掛けて威儀を具すること、叉衣とは袈裟を左肘に懸け何時にても搭着し得らるゝ狀を示すものである。此の狀の往復は

寶慶記の初めに在りて其文も亦大同小異である高祖の天童淨祖に參ぜられし月の七日に明全和尚は四十二歳を以て遷化せられた。高祖は其御看護やら葬儀やら萬事に御盡しなされたものと思ふ、和尚の舍利も高祖自ら收拾して歸朝の際之を奉帶せられた。

然しより、晝夜堂奥に參じ親く眞訣を受く。有時師を侍者に請せらるゝに、師辭して曰く我は外國の人なり、辱けなく大國大刹の侍司たらんこと、頗る叢林の疑難あらんか。只晝夜に參ぜんと思ふのみなり。時に和尚曰く實に汝が言ふ所尤も謙卑なり其謂なきに非ず。因て只問答往來して提訓を受くるのみなり。

然しより以來前後三年天童に留まりて晝夜淨祖の堂奥に參じ親く祖門下の眞訣を受く、有時淨祖は高祖を侍者に請せらるゝに、高祖は辭退して曰く、我は外國の人なり、辱けなく大國の大刹の侍司たらんこと最も榮譽ならんも頗る叢林に於ける大衆の疑議や非難あらんかと思はる、我は只晝夜に參ぜんと思ふのみなり願くは之を諒ぜられよと。時に和尚曰く實に汝が言ふ所一理あり且つ尤も謙遜卑下の美德なり、全く其謂れなきに非ずとて聽許せらる、因て只一雲衲として問答往來して淨祖の提携訓誨を受くるのみにてありき。

然るに一日、後夜の坐禪に淨和尚入堂し、大衆の睡を誡むるに曰く。參禪は身心脫落なり。燒香禮拜念佛修懺看經を要せず。祇管に打坐して始て得んと。時に師聞て忽然として大悟す。今の因緣なり。大凡淨和尚に見えてより晝夜に辨道して時暫らくも捨てず。故に脇席に至らず。淨和尚尋常示して曰く。汝古佛の操行あり必ず祖道を弘通すべし。我汝を得たるは釋尊の迦葉を得たるが如し。因て寶慶元年乙酉日本嘉祿元年忽ちに五十一世の祖位に列す。即ち淨和尚囑して曰く。早く本國に還り祖道を弘通すべし。深山に隱居して聖胎を長養すべしと。

然るに一日後夜の坐禪に、後夜は曉天なり、一夜を初夜中夜後夜の三時に分ちたるなり、曉天打坐の時如淨和尚僧堂に入り來り、大衆の睡れるさまを見て大に誡むるに曰く、參禪は身心脫落なり、燒香禮拜念佛修懺看經を要せず、祇管に打坐して始て得んと、時に高祖は之を聞て忽然として大悟す、是

れ則ち今の本則として擧示したる因緣なり、此宗旨は後に太祖の御提唱あるも燒香禮拜云々の語は本則に省略してあるに依て簡單に其大意を說明して置かう。參禪とは禪道參究のこと、參禪の目的は心地を開明し本分に安住するに在り、一切の衆生無始劫來無明に蓋はれて六塵の境に迷ひ煩惱を起し罪障を重ね三界生死の苦惱纏綿して相離れず、その根源は自己を覺了せざるに在り、故に參禪して即心是佛の境界に證入すること、實に難値難遇の勝緣である、此身今生に向て度せずんば更に何れの生に向てか此身を度せん、苟も此一大事因緣を究盡せんとするに當り、徒らに癡定に枯坐して空しく瓏睡を打す、實に慚愧の至りならずや。抑々參禪は身心脫落である、即ち身も心も打棄て放ち忘れ、身命を拋つて大道に捧ぐるの志氣が無ければならぬ、自己を忘るゝ時にこそ眞の大解脫は得らるゝものぞ。脫落とは一應は放下の意であるが、大師の悟處は更に深々密々の神境に透徹せられたのである、乃ち脫は鳥の籠窟を脫するが如く落は身心を拘束する枷鎖を撤するが如く、動靜無罫礙、隨處不染汚の境界である。若し能く是の如くならば出息入息擧手投足皆な是佛法の活三昧で是を如是經轉讀ともいふのである。故に坐禪の時は坐禪の一色辨道にして佛法一切の功德總に此中に在りて毫も遺蘊なし。是を以て別に燒香等の佛事を要せぬ、燒香は香を燒て佛を供養すること、禮拜は合掌恭敬して三寶を禮拜すること、念佛は佛に對して相好を觀察し功德を憶想し名號を稱念すること、修懺は罪障懺悔の法を修すること、看經は經典を看讀すること、此等は何れも佛門に於ける大切なる行持であるから決して之を無用視するのでは無い、但だ坐禪の正當時、三業に佛印を標するが故に、此等の功德は自から坐禪の中に包容して居るのである。坐禪は佛威儀である佛身心である、太祖は坐禪用心記に於て、坐禪は敎行證に干からざるも而も此の三德を兼ねたりと仰せられた。故に坐禪の時は坐禪の一方究盡でなければならぬ、尙ほ坐禪の眞義は更に太祖の御提唱に就て參究するが宜い。大凡如淨和尙に見えてより晝夜に辨道して十二時中暫くも工夫を捨てず、故に脇席に至らず寶慶記に淨祖の慈誨に「吾れ儞が僧堂の被位に在るを見るに晝夜眠らずして坐禪す甚だ好きことを得たり、儞向後必ず美妙の香氣世間に比ひ無き者を聞ん」云云とある。又淨和尙尋常示して曰く、汝には古佛の心操妙行あり必ず祖道を弘通すべし、我れ汝を得たるは釋尊の迦葉を得たるが如しと、斯くて寶慶元年乙酉日本嘉祿元年忽ちに五十一世の祖位に列す、とある、寶慶元年五月一日始て如淨禪師を天童山の妙高臺に禮拜せられたのであるが、其の時、既に面授面の消息現成せられた。同年夏安居の中に身心脫落の言下に大悟せられしものと建撕記の訂補に記されたり、その年九月十八日に大戒を稟受せらる、それより滿二年間天童に安居して悟後の妙行を勵まれ、寶慶三年の秋告別歸東遊はされた、即ち淨和尙囑して曰く、早く本國に還りて祖道を弘通すべし、城邑聚落に住

まらず深山に隱居して聖胎を長養すべしとの御訓誨を受けさせられた。

然のみならず。大宋にて五家の嗣書を拜す。謂ゆる最初廣福寺前住惟一西堂と云ふに見ゆ。西堂曰く古蹟の可觀は人間の珍玩なり。汝幾許か見來せる。師曰く未だ曾て見ず。時に西堂曰く吾が那裏に一軸の古蹟あり。老兄が爲に見せしめんと云ふて携へ來るを見れば法眼下の嗣書なり。西堂曰く或老宿の衣鉢の中より得來れり。惟一西堂のには非ず。其書き樣ありと雖も委く擧するに遑あらず。

然のみならず、高祖は大宋に於て五家の嗣書を拜することを得たり、五家とは禪門に於ける五派なり、嗣書は傳法密付を證すべき室內の法寶である。謂ゆる最初には廣福寺の前住職にして當時天童山に在りし惟一西堂と云ふに見ゆ、惟一は環溪と號し淨祖と同鄕の人にて法を無準範に嗣ぎ後に天童に住せられたり。西堂曰く、祖師門下に於ける古人の書蹟にして宗の大事として觀る可き者は人間界に於て最も珍寶として愛玩すべきなり、老兄は曾て幾許か見來せるや、高祖曰く、未だ曾て拜見せず、時に西堂曰く、吾が那裏に一軸の古蹟あり今老兄が爲に見せしめんと云ふて携へ來れるを見れば、法眼下の嗣書なりき、西堂曰く此嗣書は或老宿の衣鉢の中に秘藏せしを貫ひ受けて得來れりと言はれける、故に惟一西堂自身の物には非ず、其書き樣は正法眼藏嗣書の卷に示されてありと雖も此處には委く擧示するに遑あらず。

又宗月長老は、天童の首座たりしに就て、雲門下の嗣書を拜す。即ち宗月に問て曰く。今五家の宗派を列ぬるに聊か同異あり。其意如何ん。西天東土嫡々相承せば何ぞ同異あらんや。月曰く。設ひ同異遙かなりとも唯當に雲門山の佛法は是の如くなりと學すべし。釋迦老子何に依てか尊重他なる。悟道に依て尊重なり。雲門大師何に依て尊重他なる。悟道に依て尊重なり。師此語を聞くに聊か領覽あり。

又宗月長老は天童山の首座たりしが、同人に就て雲門下の嗣書を拜す、宗月は雪窻と號して法を無際に嗣げり、即ち宗月に問て曰く、今五家の宗派を列ねて對照するに聊か同異ありて一定せず、其意果

して如何ん、西天東土嫡々相承せる佛法なりとせば何ぞ同異あらんや皆な一樣にあるべきやうに思はるゝ。宗月曰く設ひ同異ありて其の異なること遙かなりとも餘程の相違ありとも今强て批判すべきに非ず、唯當に雲門山の佛法は是の如くなりと學すべし、釋迦老子何に依てか尊重他なる、尊重他とは佛を尊敬し歸崇すること今は尊貴なりといふ語と同じ、悟道せられしに依て尊重なり、雲門大師も何に依て尊重他なるやといふに悟道せられしに依て尊重なり、要は大道開悟の如何に在り必ずしも些々たる文書の形式に拘はるべからず、大師は此語を聞くに聊か領覽あり即ち其意を會得せられた。

又龍門の佛眼禪師淸遠和尙の遠孫に、傳藏主と云ふ人ありき。彼の傳藏主又嗣書を帶せり。嘉定の初に日本の僧隆禪上座、彼傳藏主病しけるに、隆禪懇ろに看病しける勤勞を謝せんが爲めに、嗣書を取出して禮拜せしめけり。見難き物なり汝が爲めに禮拜せしむと道ひけり。其より半年を經て嘉定十六年癸未の秋の頃、師天童山に寓止するに、隆禪上座懇ろに傳藏主に請して師に見せしむ。是れは揚岐下の嗣書なり。

又楊岐下なる五祖法演の嗣龍門の佛眼禪師淸遠和尙の遠孫に枯山良傳藏主と云ふ人ありき、彼の傳藏主又嗣書を帶せり、嘉定年間の初に日本の僧隆禪上座なる者、彼の傳藏主が疾病に罹りける時に隆禪は最と懇に看病しけるに依り、その勤勞を謝せんが爲に秘藏の嗣書を取出して禮拜せしめけり、傳藏主は其時に、此嗣書は室內の至寶なれば容易に見難き物なり今汝が爲に特別に禮拜せしむと道ひけり。其より半年を經て嘉定十六年癸未の秋の頃高祖天童山に上りて寄寓止住するに隆禪上座は懇に傳藏主に請して其嗣書を高祖に見せしむ、是れは楊岐下の嗣書なりき、隆禪は歌人定家の弟寂蓮の息なりと建撕記訂補に見えたり、大師より先に入宋したる者なり。

又嘉定十七年甲申正月二十一日に、天童無際禪師了派和尙の嗣書を拜す。無際曰く此一段の事見知を得ること少なり。如今老兄知得す。便ち是れ學道の實歸なりと。時に師喜感勝ることなし。

又嘉定十七年甲申正月二十一日に天童山主無際禪師了派和尙の嗣書を拜す、無際曰く、此一段の大事は密室風を通ぜざる屋裏の法寶なるを以て見ることも知ることも得ること甚だ少なり、如今老兄之を見て知得す、傳法嗣承の容易ならざるを會取す、便ち是れ學佛道の實際歸趣なりと、時に大師は歡喜

して感激に勝ることなかりき。

又寶慶年中、師臺山雁山等に雲遊せし序に、平田の萬年寺に到る。時の住持は福州の元鄧和尚なり。人事の次でに、昔よりの佛祖の家風を往來せしむるに、大潙仰山の令嗣話を擧するに、元鄧曰く曾て我箇裏の嗣書を看るや也た否や。師曰く。如何にして見ることを得ん。鄧自ら立て嗣書を捧げて曰く。這箇は設ひ親き人なりと雖も、設ひ侍僧の年を經たると雖も之を見せしめず。是れ即ち佛祖の法訓なり。然あれども元鄧日頃出城し見知府の爲に在城の時、一夢を感ずるに曰く。大梅山法常禪師と覺しき高僧あり。梅華一枝をさしあげて曰く。若し既に船舷を踰ゆる實人あらんには、華を惜むこと勿れと云ふて、梅華を我に與ふ。元鄧覺えずして夢中に吟じて曰く。未だ船舷に跨らざるに好し三十棒を與へんと。然るに五日を經ざるに老兄と相見す。況や既に船舷に跨り來る。此嗣書亦梅華綾に書けり。大梅の教ふる所ならん。夢中と符合する故に取出すなり。老兄若し我に嗣法せんと求むや。設ひ求むとも惜むべきに非ず。師信感措く所なし。嗣書を請すべしと云ふとも、唯燒香禮拜して恭敬供養するのみなり。時に燒香侍者法寧と云ふあり。初て嗣書を見ると言ひき。時に師窃かに思惟しき。此一段の事、實に佛祖の冥資に非ざれば見聞尚ほ難し。邊地の愚人として何の幸ありてか數番之を見ると。感涙に袖を霑す。

又寶慶年中に高祖は有名なる臺州府の天臺山や天下の奇秀と稱せらるゝ溫州府の雁蕩山等に浮雲流水の如く遊歷せられし序に平田の萬年寺に到られた、時の住持は福州の元鄧和尚であつた。人事とは相見の禮である、その次でに昔よりの佛々祖々の家風に就て互に問答往來せしむるに、偶大潙仰山の令嗣話を擧唱せられた、是れは著名なる公案である、即ち大潙山靈祐禪師坐する次で、仰山侍立す、潙山曰く寂子近日宗門中の令嗣作麼生、仰曰く、大に人の此事を疑着するあり、潙山曰く、寂子又作麼生、仰曰く、某甲祇管に困じ來れば眼を合し健なれば即ち坐禪す所以に未だ曾て說著せず、潙山曰く、這の田地に到ること也た得がたし、仰曰く、某甲が見處に據るに箇の一句語を著るとも亦得がたから

ず、潙山曰く、子一人の爲めにすること也た得ず、仰曰く、古より聖人盡く皆な是の如し。潙山曰く、大に人の汝が與麽の祇對を笑ふことあらん、仰曰く、某甲を笑ふことを解せば是れ某甲と同參、潙山曰く、出頭せば作麽生、仰禪牀を遶ること一匝ず、潙山曰く、古今を烈破す、此父子の商量は實に千古の榜標であるが、今は之を解釋することは且く省くことゝする。其時元鼐曰く、曾て我が箇裏に秘藏する所の、嗣書を看たるや也た否や、高祖曰く、如何にして見ることを得ん、御許が無ければ拜見すること能はず、時に元鼐は自ら立て嗣書を捧げて曰く、這箇は設ひ親き人なりと雖も、又設ひ近侍する僧の年を經たる者と雖も之を見せしめず、餘人所不見は即ち佛祖屋裏の嚴重なる法訓なり、然あれども元鼐日頃城に出でゝ見知府の爲に城内に滯在せし時、見知府又は見は現に同じ知府は知事である、夜中一夢を感ずるに曰く、大梅山法常禪師かと覺しき高僧ありて梅華一枝を捧拈て曰く、若し既に船舷に跨り海を踰えて來る眞實の道人あらんには、此華を惜むこと勿れと云て其梅華を我に與ふ、元鼐覺えずして夢中に吟じて曰く、未だ船舷に跨らざるに好し三十棒を與へんと、吟はさけぶの意、船舷云云は德山の語である、その公安は略して置くことゝする。斯る靈夢を感ぜしに、然るに五日を經ざるに老兄と相見す、況や老兄は既に船舷に跨りて來る者、且又此嗣書も、亦梅華の綾絹に書けり、彼といひ此といひ、嗣書拜覽の事を大梅の敎ふる所ならんと思はれ、總てが夢中と符合する故に取出すなり、老兄若し我に嗣法せんと求むるや設ひ求むとも予は法を惜むべきに非ずと暗に嗣法せんことに勸誘する語氣であつた。高祖は聞て靈夢の感應を信じ感激措く所なし、但し嗣法して嗣書を請すべしと云はれしかども、此儀は別に挨拶もなさず、唯燒香の上嗣書を禮拜して恭敬供養せられたのみであつた、時に五侍者の上首たる燒香侍者法寧と云ふ者あり、初て嗣書を見ると言ふて居つた。次に高祖當時の所感を叙べられて此一段の事、實に佛祖の冥々の間に法運を守護せらるゝに非ざれば嗣書の如き室中の秘寶は見ることも聞くことも尙ほ難し、海を隔つる邊地に生れ殊に愚人の身として、何の幸ありてか數番幾度も〳〵之を見ることを得るやと思へば餘りのかたじけなさに感涙袖を霑された。

是故に師遊山の序に、大梅山護聖寺の旦過に宿するに、大梅祖師來て開華せる一枝の梅華を授くる靈夢を感ず。師實に古聖と齊く道眼を開く。故に數軸の嗣書を拜し冥應の告げあり。

是故に高祖が諸山を遊歷の序に、慶元府なる大梅山護聖寺の旦過に宿せられし時に大梅祖師即ち法常禪師が、來て開華せる一枝の梅華を授くるの靈夢を感じ給へり、旦過は雲衲の宿泊する室の名である。

高祖は其道念の深厚なる志氣の雄健なる識見の超邁なる行持の穩密なる實に古の大聖と齊くして古今に卓出せる大道眼を開き玉へり、故に數軸の嗣書をも拜され、佛祖の冥助感應の御告げもあり、御在宋中の靈蹟は指を屈するに遑あらず、今は之を列記するの餘地もなければ、委くは建撕記其他の御傳記に就て拜覽するが宜い。

是の如く諸師の聽許を蒙り、天童の印證を得て、一生の大事を辨じ累祖の法訓を受けて、大宋寶慶三年、日本安貞元年丁亥歲歸朝し、初めに本師の遺跡、建仁寺に落ち着き、且く修練す。時に二十八歲なり。

是の如く支那各刹に住持せる當時の高僧諸師の聽許即ち知遇と賞讃とを蒙り、天童淨祖の印可證明を得て、玆に一生參學の一大事を辨成し累祖即ち歷代祖師の法門上の親訣と遺訓とを受けられて、大宋の寶慶三年、日本の安貞元年丁亥の歲の秋歸朝せられた、此歲の字恐くは衍字であろう。肥後の川尻に御着陸それより最初參禪の本師の遺蹟たる京都の建仁寺に落ち着き、且く修練して觀機三昧を打せらるゝことゝなつた、時に二十八歲なりき。

其後勝景の地を求め隱栖を卜するに、遠國畿內有緣檀那の施す地を歷觀すること一十三箇處、皆意に適はず。且く洛陽宇治郡深草の里極樂寺の邊に居す。即ち三十四歲なり。宗風漸く仰ぎ雲水相集まる。因て半百に過ぎたり。

建仁寺御在住の初めに於て普勸坐禪儀を撰述して純一の禪風を擧揚せられ、其後勝景とて山水の風景を備へて辨道に適せる勝地を求め隱栖の道場を卜せられしに、遠國及び五畿內に於ける有緣の檀那より施す所の地を歷觀する一十三箇處もありしが、何れも皆な御意に適はず、依て寬喜元年御年三十歲の時、且く洛陽宇治郡深草の里なる安養院に閑居せられ、尋で天福元年御年三十四歲の時同處の極樂寺に還り觀音導利院と名けられた。それより四來の道俗を接化せられ、堂塔伽藍を新築し嘉禎二年御年三十七歲の時更めて興聖寶林寺と稱し、同年十月十五日祝國開堂の大禮を擧行せられた、是れより洞上の宗風日を追ふて漸く四方に仰ぎ雲水踵を蹠で相集まる、因て其數半百に過ぎたり、孤雲禪師鐵通禪師等も皆な此の間に歸投せられた、道俗の歸仰し參禪する者は幾百千なりしやを知らず。

十歲を經て後越州に下る。志比の莊の中に深山を開き、荊棘を拂て茅茨を葺き、土木を拽きて祖道を開演す。今の永平寺是なり。興聖に住せし時、神明

來て聽戒し布薩毎に參見す。永平寺にして龍神來て八齋戒を請し、日々回向に預らんと願ひ出で見ゆ、之に依て日々八齋戒をかき回向せらる。今に到るまで怠ることなし。

興聖寺御創建後十歲餘を經て後、寛元元年御年四十四歲の七月下旬越前の國に下り玉ふ、斯くて志比の莊內市野山の東傘松峰の西に淨地を卜して伽藍を建立すべく經營せられ、乃ち深山に靈區を開き荆棘を拂て堂宇を構へ茅茨を以て屋根を葺き、土木を拽きて樓閣を築き、翌年七月是を傘松峰大佛寺と號し、後に吉祥山永平寺と改め以て宗風擧揚の根本道場と定められた。爾來專ら祇園の正儀に則り、天童の淸規に準じ、建長五年八月二十八日(太陽曆の九月二十九日)御示寂まで間斷なく大法輪を轉じ祖道を開演せられたのである。興聖寺に住せられし時には神明が來て說戒を聽聞し布薩毎に參見す、布薩は梵語にて淨住と漢譯す、毎月十五日と晦日とに說戒布薩の行法を修す、是れ諸の煩惱及不善業を斷じて究竟淸淨の梵行を修むるのである。永平寺にしては龍神來りて八齋戒を請し且つ日々の御回向に預らんと願ひ出で親く大師に見えた、之に依て日々八齋戒文を書きて龍神の爲めに回向せらる、今に到るまで之を勤修して怠ることなし、八齋戒は具さには八關齋戒といふ、關は禁なり此禁戒を以て齋法を助成するが故に名く、その八とは一に不殺生戒、二に不偷盜戒、三に不邪婬戒、四に不妄語戒、五に不飲酒戒、六に不坐高廣大床戒、七に不著華鬘瓔珞戒、八に不習歌舞戲樂戒である。此神明の聽法と龍神授戒との因緣は建撕記にも其他の御傳記にも見當らず、されど太祖は高祖の御入滅を去ること未だ甚だ遠からざるに、特に此奇蹟を擧げ玉ふ、思ふに必ず確なる事蹟若くは傳說に依られしものであらう、猶ほ承陽高祖の德行靈感及び御遺訓等は實に法子法孫の信受し瞻仰し奉戴すべきものであるから、建撕記其他の御傳記に就て能々領覽するが宜い、以下は高祖の御恩德を示されて、

夫れ日本佛法流布せしより七百餘歲に、初て師、正法を興す。謂ゆる佛滅後一千五百年、欽明天皇一十三壬申歲、初て新羅國より佛像等渡り、十四歲癸酉に即ち佛像二軸を入れて渡す。然しより漸く佛法の靈驗顯はれて、後十一年と云ひしに、聖德太子佛舍利を握りて生る。用明天皇三年なり。法華勝鬘等の經を講ぜしより以來、名相敎文天下に布く。

夫れ我が日本に佛法が流布せしより七百餘歲を經たるに、初て高祖大師が佛祖嫡傳の正法を興された。

謂ゆる、釋迦牟尼佛御入滅後一千五百年を歴たる我が國欽明天皇一十三年壬申の歳初て新羅國より佛像等渡り、當時の百濟國聖明王より佛像及び經卷を貢献せられた、是より以前にも個人として佛教を傳來せし向はありしも、正式に皇室の御手に入りしは欽明の朝であつた。翌十四歳癸酉に即ち佛像二軸を入れて渡す、異本に像の字を經に作れり二軸なれば佛經であらう、又佛像ならば二軀でなければならぬ、然しより漸く佛法の靈驗顯はれて君臣倶に佛陀の慈光に近かれることゝなつた。後十一年と云ひしに聖德太子佛舍利を握りて生る、聖德太子は敏達天皇元年正月元日の御誕生、用明天皇第一の皇子である。欽明天皇十三年より二十二年を經て御降誕になつた、十三年とあるは或は御諳記の失ならんか。太子は實に我が國の大聖にして日本文化の祖であらせ玉ふ、用明天皇位に即き玉ふや太子は十五歳の身を以て能く萬機を輔け玉ひ、佛教を尊信し世道を開發し、推古天皇の御代にも攝政として國政を攝理し十七憲法を製定し、佛教を以て國民教化の標準となし玉ふた、用明天皇三年なりとあるも何等かの誤りかと思はる。天皇の御勸めに依り袈裟を搭けて法華經勝鬘經等の經を講じ玉ひしより以來、佛教は大河の決するが如き勢を以て海内に瀰淪し、法門の名相、聖教の文字遂に天下に布くに至る、太子は實に八宗の開祖とも申し上げ奉るべきである。太子の時代に達磨大師飢人の形を現じ片岡山にて太子に遇はれしといふ傳説もあるが未だ以て禪の傳來とは言はれぬが、太子は法華勝鬘維摩の三經に親ら註疏を作りて之を弘通せられた。此三經は何れも大乘の妙典にして我が禪門に於て最も尊重する所なれば、或る意味に於ては太子を以て禪道開闡の嵩矢とも稱することが出來る。

橘の太后所請として、唐の齊安國師下の人南都に來りしかども、其碑文のみ殘りありて、兒孫相嗣せざれば風規傳はらず。後覺阿上人は瞎堂佛海遠禪師の眞子として歸朝せしかども宗風興らず。又東林懷敝和尚の宗風。榮西僧正、相嗣して黃龍八世として宗風を興さんとして、興禪護國論等を作て奏聞せしかども、南都北京より支へられて純一ならず。顯密心の三宗を置く。

此一段は高祖以前の禪傳を叙せられたのである。我が國の禪は高祖以前に八傳ある内、三傳丈を擧げられた、第一傳は奈良元興寺道昭僧都である、我が國法相宗の開祖であるが、入唐して相州隆化寺の慧滿禪師に參じ達磨の禪道を授けられた。第二傳は唐の道璿律師が嵩山の普寂師師より禪要を傳へ來朝して律を弘むる傍に北宗禪を擧唱せられた。第三傳は傳教大師で是れ亦道璿の禪戒を大安寺の行表に受け入唐の際は禪林寺翛然に參じて北宗禪を傳へられた。第四傳は今の本文に在る嵯峨天皇の皇后たりし橘の太后嘉智子の請する所として唐の齊安國師下の人にて義空禪師と稱するが南都に來りて禪要

を說かれた、齊安は馬祖の法嗣で南宗禪である、だが今は唯其碑文のみ殘りありて傳法の兒孫相嗣せざれば禪風も規矩も傳はらず。第五傳は天台宗の慈覺大師圓仁で入唐の際禪法を傳へて歸朝せられた。第六傳は叡山の僧覺阿上人は入宋して圜悟禪師の法嗣靈隱寺の佛海禪師瞎堂慧遠の眞子として歸朝せしかども宗風を興起するに至らなんだ。第七傳は大日能忍禪師で攝州に三寶寺を建てゝ禪法を唱道したが、能忍は其師承正しからず、上足佛地覺晏は大和多武峰に居して禪道を擧揚した、永平孤雲禪師も初めは覺晏に參禪せられたのである、以上は未だ確實に禪祖と稱することは出來ぬ。第八傳の榮西禪師に至つて初て臨濟の正宗を開基せられた、又東林懷敞和尙の宗風、懷敞禪師は虛菴と號し初め萬年寺に住し後天童山に轉ず、黃龍派七世の祖師である、榮西禪師再度の入宋に懷敞の心法を相嗣して黃龍八世として宗風を興さんとして、興禪護國論等を作て奏聞せしかども、南都の奈良や北京の京都の諸山より種々の妨害を受け、それに支へられて純一の禪風を宣揚すること能はず、顯密心の三宗を並置して漸く天下の疑惑を防ぎ辛ふじて禪道を皷吹せられたのであつた。

然るに師其嫡孫として臨濟の風氣に通徹すと雖も、尙ほ淨和尙を訪ひて、一生の事を辨じ、本國に歸り正法を弘通す。實に是れ國の運なり人の幸なり。

恰も西天二十八祖達磨大師の初て東土に入るが如し。是れ唐土の初祖とす。師亦是の如し。大宋國五十一祖なりと雖も、今は日本の元祖なり。故に師は此門下の初祖と稱し奉る。

然るに高祖は榮西禪師の嫡孫として臨濟の禪風と威氣とに通徹すと雖も、尙ほ未だ滿足せられず更に入宋して天童淨和尙を訪ひて一生參學の大事を辨成し、日本國に歸り初て純一無雜の正法を弘通す、實に是れ國家の慶運なり民人の幸福なり、恰も西天の二十八祖達磨大師の初て唐土に入るが如し、是れ實に唐土禪門の初祖と稱す、高祖も亦是の如し、大宋國に在りては釋尊五十一代の祖師なりと雖も、今は正に日本洞上の元祖なり、故に此門下の初祖と稱し奉るのである。

抑も正師大宋に滿ち、宗風天下に徧くとも、師若し眞師に逢て參徹せずんば、今日如何が祖師の正法眼藏を開明することあらん。時澆運に向ひ世の末法に遭ふて、大宋も佛法既に衰微して、明眼の知識まれなり。故に派無際、琰浙翁等皆な甲刹の主となると雖も、尙ほ到らざる所あり。故に大宋にも人

なしと思ふて歸朝せんとせし所に、淨和尚獨り洞山の十二世として、祖師の正脈を傳持せしに、尚ほ神秘して以て嗣承を顯はさずと雖も、師には隱す所なく親訣をのこさず祖風を傳通す。實に是れ奇絶なり殊特なり。

抑も嫡傳の正師猶ほ大宋國に滿ちて宗風は天下に徧ねくとも、高祖にして若し眞の宗師に逢て參徹し玉はずんば、今日如何が祖師傳燈の正法眼藏を我が國に開明することあらん、時既に像法を過ぎ法運も從つて澆薄に向ひ世の末法に逢ふて、大宋の如きも佛祖の正法既に衰微して明眼の善知識甚だ稀なり、故に天童の派無際、徑山琰浙翁等は皆な甲刹の主となると雖も猶ほ宗門の一大事に於て到らざる所あり、甲刹とは甲は長なり刹は梵刹なり猶ほ大寺といふが如し。故に大宋にも我が師と仰ぐべき人なしと思ふて歸朝せんとせられし所に、幸に如淨和尚獨り洞山大師の十二世として道德一世に高く、祖師の正脈を傳承せられけるも、尚ほ自ら其の德を神祕して以て嗣承を天下に顯はさずと雖も、大師に對しては室中の祕事をも隱す所なく、有ゆる親傳口訣を示して遺さず細大と無く祖師の家風を傳授し通達す、實に是れ奇絶なり特殊なりで、全く不思議の感應ともいふべく特別の大因緣ともいふべし。

然も幸に彼の門派として、辱なく祖風を訪はん。恰も震旦の三祖、四祖に相見せしが如し。宗風未だ地に落ちず。三國に跡ありと雖も、其傳通する所、毫末も未だ改まらず。

然も幸に吾々は彼の高祖の門葉派流の兒孫として辱なくも佛祖單傳の宗風を訪はんことは、恰も震旦の三祖大師が、四祖大師に相見せられしが如し、四祖の三祖に見ゆるや、驀頭に解脫の法門を請問せられた、三祖は、誰か汝を縛するやといふて當處に解脫境に證入せしめられた。今日も亦是の如く高祖道に値遇し奉りて即座に佛地に證入するを得ること、今も古も變りは無い、幸にして宗風未だ地に落ちず、大師の偉德に依りて我が國に流傳せり、梵漢和の三國に涉りて其時代と場處とに依り多少異なりし跡を示すことありと雖も、其傳承流通する宗旨に至りては毫末も未だ改まらず、所謂古今に通じて誤らず羣機に處して悖ることは無い、現在の此會も釋尊の會座も同一如である、是を靈山の一會儼然未散ともいふのである。

參徹する旨、豈に他事あらんや。先づ須らく明心すべし。謂ゆる師最初得道の因緣、參禪は身心脫落なりと。實に夫れ參禪は身を捨て心を離るべし。若し未だ身心を脫せずんば、即ち是れ道に非ず。將に謂へり。身は是れ皮肉骨

髓と。子細に見得せし時、一毫末も得來る一氣なし。

その宗風に參得し徹底する旨豈に他事あらんや、別に奇特の事あるに非ず、先づ須らく自己の本心佛性を究明すべし、明心といふにも何か一物を發見するといふ樣な譯では無い、謂ゆる高祖大師最初に得道せられし因緣を見よ、參禪は身心脫落なりとある、身心脫落するのが明心の祕訣である。然らばその脫落とは何ぞやといふに、實に夫れ參禪は身を捨て心を離るべし、凡そ凡夫は自己の身心に繫縛せられ或は五欲の奴隷となり或は我見の使役する所となる、故に先づ己れの一身を捨てゝ道に捧げんと思ひ、己れの心念を離れて無我の境に入るべきである、是れ則ち禪門の大信心である。若し未だ身心を離脫せずんば即ち是れ道に非ず、己れの肉身に執着し又は自己の心念に囚へられて居ては決して大道に合致する所以に非ず、道に味き者は將に謂へり此身は是れ皮肉骨髓の合成せるものなりと、故に之を執して我を存し我見を增長す、されど仔細に見得せし時此身は幻化の空身にして一毫末も得來るべき一氣なし、氣とは儒敎に大極より陰陽二氣を生じ分れて五行となり五行の精凝りて人を生ずと說く、然し其實體を觀ずれば五蘊皆空にして一氣だも之を認むべきは無い。

今謂ふ所の心といふは二あり。一つには思量分別。此の了別識を心と思へり。

二つには寂湛として動ぜず。一知なく半解なし。此心即ち是れ精明湛然なるを心と思へり。知らず此は是れ識根未だ免かれざることを。古人之を呼で精明湛不搖の所とす。汝等此に住まりて心なりと思ふこと勿れ。

前節は身脫落の意義を示し此に於ては專ら心に就ての御提撕である、今日の人々の謂ふ所の心といふを檢するに二つあり、一つには思量分別で惜い欲し惡い愛いと感知するもの、乃ち善惡苦樂を識別する此の了別の意識を心と思へり、是れは世間普通の考へである。二つには寂湛として動ぜず、空寂にして形の見るべき無く、湛々として水の靜なるが如く、更に生滅去來に關らず、從つて一知なく半解なし、分別も感覺も無い、是れ則ち吾人の本心にして所謂一物鎭長靈なるものである。此心こそ即ち是れ精明湛然で、所謂精神となりて自然と靈德を具へて明らかに湛然として移らず、是を本心と思へり。第一の見解は淺薄取るに足らず、第二の說も單に何物か不可思議なる一物ありと妄計するに過ぎず、併しその一物なるものを仔細に點檢すれば矢張微細なる我執であるから、知らず此は是れ六識六根の根本識にして未だ妄想の種子たるを免かれざることを、古人は之を呼で精明湛不搖で表面湛然として動搖せざるが如き所の精神なりとす、若し此等を以て本心とせば恰も眷屬を認めて主人公と作すが如き

ものである、故に汝等は決して此見解に住まりて本心なりと思ふこと勿れ、と誡められた。

子細に見得する時、心と曰ひ意と曰ひ識と曰ふ三種の差別あり。夫れ識と謂ふは今の憎愛是非の心なり。意と謂ふは今冷煖を知り痛痒を覺ゆなり。心と謂ふは是非を辨へず痛痒を覺えず墻壁の如く木石の如し。能く實に寂々なりと思ふ。此心耳目なきが如し。故に心に依て言ふ時、恰も木人の如く鐵漢の如し。眼あれども見ず耳あれども聞かず。此に到りて言慮の通ずべきなし。是の如くなるは即ち是れ心なりと雖も、此は是れ冷煖を知り痛痒を覺ゆる種子なり。意識ここより建立す。これを本心と思ふこと勿れ。

更に心の詮鑒に就ての御訓誡である、仔細に識心を研究して之を見得する時は心と曰ひ意と曰ひ識と曰ふ三種の差別がある。夫れ識と謂ふは今の憎愛是非する所の心なり、意と謂ふは矢張冷煖を知り痛痒を覺ゆる心なり　同じく思量の作用あるもその細なるを意といひ廉なるを識といふ。心と謂ふは意識の本體で此心には思量は無い感覺も無い、故に是非を辨へず痛痒をも覺えず、恰も墻壁の如く木石の如し。此心意識を八識に配すれば、心は八識心王、意は七識、識は第六識で前五識をも含んで居る、第六識は六塵の境を緣じて分別取捨す、第七識は恒審思量を性として恒に絶間なく思量して居る、第八識は萬法の種子を貯へ藏む、而して實に有情の根本識にして此識より有漏無漏一切の色心を變現するものである、此身死するも此識は滅せず、悶絶睡眠の間にも此識は依然たり、吾々が無心無想の三昧に入るとも此識は更に變動なし、故に能く實に寂々たるものと思ふ、此心は全く耳目なきが如くにして何等の感覺をも有せぬ、故に若し識と意とを坐斷して、心のみに依て言ふ時は、恰も木人の如く鐵漢の如し、感覺意識なきが故に耳あれども聞かず眼あれども見ず、見聞覺知は皆な識の分際である、此に到りては言語思慮の通ずべきなし故に多くの人は此第八識を以て本心本性と認識するのである、是の如くなるは即ち是れ心なりと雖も、此は是れ冷煖を知り痛痒を覺ゆる種子で根本識なり、意も識も皆なこゝより此心より建立するを以て、正眼に看來れば猶ほ是れ妄想の窠窟であるからこれを本心佛性なりと思ふこと勿れ、此心意識をも坐斷し去るに非ざれば心地開明の悟境に達することは出來ぬ。

學道は心意識を離るべしと云ふ。是れ身心と思ふべきに非ず。更に一段の靈

光歷劫長堅なるあり。子細に熟看して必ずや到るべし。若し此心を明らめ得ば、身心の得來るなく敢て物我の携へ來るなし。故に曰ふ身心脫け落つと。此に到りて熟見するに、千眼を回し見るとも微塵の皮肉骨髓と稱すべきなく、心意識と分くべきなし。如何が冷煖を知り、如何が痛痒を辨へん。何をか是非し何をか憎愛せん。故に曰ふ見るに一物なしと。此の處に承當せしを即ち曰ふ身心脫落し來ると。乃ち印して曰く、身心脫落脫落身心。卒に曰ふ脫落脫落と。

此一段に於て高祖と淨祖との商量に成る本則を歸結せられた、八識心王や無想の心相を以て本心と思ふてはならぬから、學道は心意識を離るべしと云ふのである、故に是れが我が身であるの我が心であるのと思ふべきに非ず、心を覺むるに終に不可得である、その不可得の處に眞如實相の佛心あることを知るべし。即ち更に一段の靈光六合に照耀し、無量劫を歷て增減なく垢淨なく生滅なく長へに堅固不動なるあり此の那一物を子細に熟看して必ずや佛祖行履の地に到るべし、長堅底で長劫に堅固なる物なりとて分別意識を以て判斷せまいぞ、朕兆以前に向つて回光返照し去らんことを要す、若し能く此本心を明らめ得ば、法界廓然として身心の得來るべきもなく敢て所緣の物と能緣の我との携へ來るべきもなし、故に曰ふ身心脫け落つと、是れ今日故らに有る物を强て脫落するに非ずして、元來脫落して居るのである。此地に到りて子細に熟見するに本來無一物である、縱ひ千眼を回して見んとすると も、一微塵ばかりの皮肉骨髓と稱すべきなく、心意識と分くべきなし、能所双泯し自他併せ亡ずるを以て、如何が冷煖を知り、如何が痛痒を辨へん、既に己れを忘ずる時豈に冷煖痛痒する物あらんや、又何をか是非し何をか憎愛せん、故に永嘉大師は證道歌に於て、了了として見るに一物なしと曰はれた、高祖大師は此處の田地に承當し證入せしを以て即ち曰ふ身心脫落し來ると、淨祖は乃ち印可して曰ふ、身心脫落脫落身心、身心自然に脫落し去て脫落底の身心が蓋天蓋地に大光明を放つたのである、高祖は猶ほ和尙亂りに印せられなといひ更に亂りに印せざる底を問はれし時、卒に曰ふ脫落脫落と、實に是れ重々の御證明である。

一度此田地に到りて、無底の籃子の如く穿心の椀子に似て、盛れども盛れども盡きず。入れども入れども滿たざることを得べし。此時節に到る時桶底を脫し去るといふ。若し一毫も悟處あり得處ありと思はば道に非ず。唯だ弄精

魂の活計ならん。

一度も此脱落の田地に到りて脱落の身心を拈來拈去する時は、無底の籃子で底の無い竹籃の如く又穿心の椀子で眞中の心に穴の穿いた椀に似て、底なしであるから如何程物を盛れども盛れども盛り盡くすことが出來ず、底拔であるから如何程物を入れども入れども滿つるといふことは無い、是れは觸處不染汚、隨處無罣礙の境界なるを以て、終日諸緣に應じても曾て執着せず、終宵萬事に當りても更に束縛なさをいふ、即ち應無所住而生其心の活計、木人方に歌ひ石女立て舞ふ風流である。古句に「沒底籃兒盛二白月一　無心椀子貯二清風一」とあるより換骨し來れる御語であろう。此時節に到る時を古人は桶底を脱し去るといふた、桶の底脱けしたやうなもの、無爲絶學の境界である、若し一毫も悟處ありて悟らしい物を握つたり得處ありて何にか有り難そうな物を摑んで居ると思はゞ最早一種の閑妄想に捕はれて眞實の道に非ず、唯だ弄精魂といふて幽靈のやうに魂魄が内處にびく〳〵して居る幽靈の活計ならんのみ、故に高祖は興聖寺開堂の垂示に「山僧叢林を歷ること多からず只是れ等閑に天童先師に見えて當下に眼横鼻直なることを認得して人に瞞ぜられず、便ち空手にして鄕に還る、所以に一毫も佛法なし」云云とある、是れ實に無等々の轉法輪である。

諸仁者子細に承當し委悉に參徹して、皮肉骨髓を帶せざる身あることを知るべし。此の身卒に脱せんとすれども脱不得なり。捨てんとすれども捨不得なり。故に此處を道ふに一切皆盡て空不得の處ありと。

以下太祖の御勸誡である、諸仁者よ佛法修行は實に容易ならず、宜しく子細に承當し委悉に參徹して、皮肉骨髓を帶せざる所謂脱落の淸淨身あることを知るべし、此淸淨身は卒に脱落せんとすれども脱落し得ざるものなり捨てんとすれども捨つることを得ざるものなり、故に我が祖門下に於ては此處を道ふに一切皆な空じ盡して空じ得ざる處ありと唱ふるのである、此空不得底をば父母未生以前の自己とも空劫那畔の主人公とも、又は眞如とも法性とも即心是佛とも正法眼藏とも名くるのである、永嘉大師が證道歌に於て、取ること得ず捨つること得ず不可得の中只麽に得たりと詠ぜられたのも此處の消息である。

若し子細に明らめ得ば、天下の老和尙、三世の諸佛の舌頭を疑はじ。如何ならんか此道理。聞かんと要すや。

明皎皎地無二中表一。豈有二身心可二脱來一。

若し子細に此一大事を明らめ得なば、天下の老和尚のみならず三世の諸佛の舌頭上より說着し來れる一切の法門をも悉く體得して更に疑はじ、三千餘卷の經文、一千七百則の公案も畢竟自己本具の家具となり去るべし、如何ならんか此道理ぞ、諸仁者聞かんと要すやと仰せられて、本則の大綱を明皎皎地中表なし、豈に身心の脫し來るべきあらんやといふ七言二句に提要して示された。明皎々地とは參同契に靈源明に皎潔たりとあるが如く、人々具足の正法眼藏を形容せられたのである。此法なるや明らかなること日月の如く眼橫鼻直曾て藏さず、皎潔なること珠玉の如く更に煩惱惑業の染汚を帶びぬ、大には方所を絕し細には無間に入りて中心だの表面だのといふ畦界は立られぬ、盡十方界一段の光明である、此光明體に證入する時は我相も無く人相も無く空に非ず色に非ず、是を脫落面といふのである。此脫落の身心は堅きこと金剛の如く淨らかなること靈泉の如し、諸佛は此に於て法輪を轉じ諸祖は此に於て爲人度生す、只此身心、取ることを得ず捨つることを得ず、故に脫落といふ文字に屈托して此身心を脫し來るべき法ありと思ふまいぞとの御提撕である。脫落の二字は祖門の活句である、身心を脫落するは此の身心を以て眞に能く大道に活步せしむるのである、高祖の親訓に「明々徧界不二曾藏一。坐二斷毘盧一未レ可レ當、飮水鷺能取二淳味一。採花蜂不レ損二餘香一」といふ尊偈がある、毘盧をも坐斷するは、脫落つ徹底である、此時こそ三界六道を住來すと雖も一物も我れを犯すもの無く、一點も他を損すること無し、是を修證自から染汚せず、趣向更に是れ平常なるものなりと坐禪儀に於て仰せられた、只此の脫落實に吾人の本面目なりと究盡するが宜い。

第五十二章

第五十二祖。永平芽和尚。參元和尚。一日請益次。聞一毫穿衆穴因緣即省悟。晚間禮拜。問曰一毫不問如何是衆穴。元微笑曰穿了也。師禮拜。

以上は本章の本則、その宗意は太祖の御提唱に參ずべきも、一毫衆穴の因緣丈を一通り述べて置かう。

昔道悟禪師の法嗣石霜慶諸禪師、因に許州の全明上座、問ふて曰く「一毫衆穴を穿つ時如何」孔子が曾て一絲を蟻の足に附して九曲の珠を穿つたことがある、今や一箇や二箇の珠で無く、一毫を以て無數の珠に存する無數の穴を穿つのである、是れは森羅萬像一法の所印とあるが如く、三界唯一心心外に別法なし、若し一心を了ずれば即ち萬法を了ずるなり、一句を會し去れば即ち八萬の法門を一貫して餘す所なし、此見地を以て石霜に向つたのである。時に石霜曰く「直に須らく萬年の後なるべし」それは萬年も經た後のことであろうぞといふのは、一心とか萬法とかといふものを抱いて居ては完全に一毫を以て衆穴を穿つことは難事である、此身をも此心をも放ち忘れ一毫をも衆穴をも一切放

下した後の消息ぞといふて盡く奪ひ去られた、即ち一念萬年の宗乘である。上座曰く、萬年の後如何石霜曰く、登科は汝の登科に任す拔萃は汝が拔萃に任す、登科は誠驗の科程に及第すること、拔萃は拔は引拔くこと萃は多く聚まること即ち大勢の中から選拔して登庸すること、今や成佛作祖といはんが如し、此法は人々分上曾て缺かず、他より證明して貰ふたり選擧して貰ふたりすべきものでは無い、人々自知自得の法なることを示されたのである。

師諱は懷芽。俗姓は藤氏。謂ゆる九條大相國四代の孫秀通の孫なり。叡山の圓能法印の房に投じて十八歲にして落髮す。然しより俱舍成實の二敎を學し、後に摩訶止觀を學す。此に名利の學業は頗る益なきことを知りて窃かに菩提心を起す。然れども且く師範の命に隨ひて學業を以て向上の勤とす。

師諱は懷芽、俗姓は藤原氏、京師に生る、謂ゆる九條大相國爲通公四代の曾孫にして秀通の孫なり、洞上聯燈錄には黃門爲實卿の孫とある、幼にして叡山に上り横川の圓能法印の房に投じて童子と爲り十八歲にして落髮す、二十一歲にして具足戒を受けられた。然しより小乘敎の俱舍論、成實論の二敎

を學し、後に大乘教の天台學を修め殊に摩訶止觀を研學せられた、聯燈には止觀法相倶舍成實三論を精究して旨趣を貫通すとある。一日忽ち歎じて曰く、大丈夫當に言を離れて自證すべし安んぞ能く屑々として海に入て砂を數へんやと、即ち名利の學業は頗る益なきことを知りて窃かに大菩提心を起す、菩提心とは名利を忘じ私欲を棄てゝ進で諸佛の大道を究盡し退て羣生の苦惱を拔濟せんとの大誓願である、然れども時機未だ到らざりしかば且く師範即ち受業の師の命に隨ひ、學業を以て最も向上第一の勤とす。

然るに、有時母儀の處に往く。母便ち命じて曰く。我れ汝をして出家せしむる志、上綱の位を補して公上の交りを作せと思はず。唯名利の學業を爲さず。黑衣の非人にして背後に笠を掛け、往來唯かちより行けと思ふのみなり。時に師聞て承諾し、忽ちに衣を更て再び山に登らず。淨土の敎門を學し小坂の奥義を聞き、後に多武の峰の佛地上人、遠く佛照禪師の祖風を受けて見性の義を談ず。師往て訪ふ精窮群に超ゆ。

非祖の母は稀なる賢夫人であつた、然るに有時、母儀の處に往かれた、母儀とは母たる者の儀表といふので賢母といふが如し、其時母便ち非祖に訓命を垂れて曰く、我れ汝をして出家せしめたる志は、決して上綱即ち山門の座主とか僧都とか僧正とかいふ大勢の上に立て執綱の職に當ること、さやうなる榮譽の位を補し襲ぎて公上といふて公家や民衆の上に坐する者の交りを作せとは思はず、今時の佛弟子は權勢に近づき名利を得んとの念深し實に淺ましきことである。故に汝は唯名利の學業を爲さず、黑衣を披する非人行乞の僧にして毎も背後に笠を掛け、何處に往來するにも唯徒歩より行けと思ふのみなり、今の高僧は恰も公家や大名の如く錦を纏ひ輿に乘り行列を盛んにして威容に眩ふ、此等は我が望む所では無いぞと訓告せられた。時に非祖は之を聞て謹で承諾し、忽ち衣を更へ改めて再び叡山に登らず、初めに淨土の敎門を學し小坂の奥義を聞きて深く之を究められた、小坂流は今は淨土西山派流義である、後に多武の峰の佛地上人が遠く支那の佛照禪師の祖風を受けて直指人心見性成佛の義を談ず、佛地は攝州三寶寺大日能忍禪師の上足佛地覺晏和尙である、能忍は大慧宗杲の法嗣佛照禪師拙菴德光の禪風を傳へられた、乃ち非祖は往て佛地の室を訪ふと精進參窮群に超ゆるの勢であつた。

有時、首楞嚴經の談あり。頻伽瓶喩の處に到て、空を入るるに空增せず。空を取るに空減ぜずと云ふに到て、深く契處あり。佛地上人曰く如何が無始曠劫より以來、罪根惑障悉く消し、苦皆な解脱し畢ると。時に會の學人三十餘輩皆な以て奇異の思をなし皆な盡く敬慕す。

有時、佛地上人が首楞嚴經に就ての談あり、その講說が段々と進んで頻伽瓶喩の處に到つた、是れは首楞嚴經の第二に於て釋尊が阿難の爲めに五陰に對する執見を破斥せられし中に識陰の虛妄を說かれた一段である。經の文には「阿難譬へば人あり頻伽瓶を取り、其兩の孔を塞ぎ中に滿てゝ空を擧げて千里に遠く行て用て他國に餉するが如し、識陰も當に知るべし亦復是の如し、阿難是の如く虛空は彼の方より來るにも非ず此方より入るにも非ず」云云とある。頻伽は聲の好き鳥の名である、瓶の形が其鳥の格好に似て居るので頻伽瓶と名く、今瓶の左右の孔を塞ぎて遠方に到るとせんに、瓶の中には虛空が滿ちて居る、此虛空は前の地に在りしものであろうか又後の地にて新たに入つたものであろうか、既に虛空であるから增減出入ありといふことは出來ぬ。吾人の識陰も亦是の如く、緣に隨て生ずるも終に實體の取るべきなし、弊祖は此說を聞て、空を入るゝに空增ぜず空を取るに空減ぜずと云ふに到て深く五陰皆空の理に契ふ處ありて一大省悟を得られた。そこで佛地上人曰く、汝は既に五陰皆空の妙理に徹せり如何が無始曠劫より以來の一切の罪根も惑執の障礙も悉く消除し、所有苦厄も皆な解脱し畢ると讃歌せられた、時に會下に在る所の三十餘輩の參禪者は皆以て奇異の思をなし皆な盡く弊祖を敬慕す、是れ大衆齊しく說法を聞くも未だ玄旨に達せず、獨り弊祖のみ此證明を得られたからである。

然るに永平元和尙安貞元丁亥歲、初て建仁寺に歸りて修練す、時に大宋より正法を傳へて窃かに弘通せんといふ聞へあり。師聞て思はく、我れ既に三止三觀の宗に暗からず淨土一門の要行に達すと雖も、尙ほ既に多武の峯に參ず。頗る見性成佛の旨に達す。何事の傳へ來ることかあらんと云ふて、試に赴きて乃ち元和尙に參ず。初て對談せし時、兩三日は唯師の得所に同じ。見性靈知の事を談ず。時に師歡喜して違背せず。我が得處實なりと思ふて愈よ敬歎を加ふ。

然るに永平開山承陽高祖が安貞元丁亥の歳歸朝せられ初て京師の建仁寺に歸りて悟後の修練を遊ばされた、時に高祖は大宋より正法眼藏を傳て窃かに我が國に弘通せんとする御思召ありといふ聞へあり、評判が立つた。非祖は此說を聞て自ら思はく、我れ既に天台の學を修めて三止三觀の宗旨にも暗からず、三止三觀は天台に於ける肝要の法門にして委しくは摩訶止觀に出づ、三止は體眞止と方便隨緣止と離二邊分別止、三觀は空觀と假觀と中觀とである、今は詳細に說明して居る遑が無い、又非祖は淨土一門の緊要なる淨行にも達すと雖も、尙ほ未だ滿足せずして既に多武の峰に上りて佛地に參ず、而して頗る禪門に於ける直指人心見性成佛の宗旨に達す。今高祖は渡宋して果して何事の傳へ來ることかあらんと云ふて、試に赴きて乃ち元和尙に參ず、承陽大師御傳記等には文曆元年高祖年三十五歳觀音導利院に在りて道俗を接化し玉ひし頃に非祖參禪し玉ひしとあれど、次の祖訓に依れば建仁寺御寓居中に初相見せられしかと思はる。初て高祖と對談せし時、兩三日の間は高祖の說示せらるゝ處唯だ非祖の曾て參究して得る所に同じ、即ち專ら見性靈知で自性を見得して其の靈妙にして覺知ある本有佛性の事を談ず、時に非祖は大に歡喜して、高祖の談ずる所は我が識得する所と違背せず、然れば我が得處は全く眞實なりと思ふて愈よ尊敬歎美を加ふるに至れり。

稍や日數を經るに、元和尙頗る異解を顯はす。時に師驚きて鋒先を揚るに、師の外に義あり悉く相ひ似ず。故に更に發心して伏承せんとせしに、元和尙即ち曰く我れ宗風を傳持して初て扶桑國中に弘通せんとす。當寺に居住すべしと雖も、別に所地を擇で止宿せんと思ふ。若し處を得て草庵を結ばゞ、乃ち尋ねて到るべし。此に相隨はんこと不可なり。師命に隨ひて時を俟つ。

然るに稍や日數を經るに從つて高祖の說示する所、頗る非祖の會得せるものと異なる見解を顯はされた。時に非祖は驚きて自己の知見を主張して議論の鋒先を揚るに、非祖の知る所の外に向上の第一義ありて如何に蘊蓄を傾けて商量するも悉く高祖道と相ひ似ず、故に非祖は更に菩提心を發して高祖の膝下に伏して大法を承受せんとせしに、元和尙即ち曰く、我れ佛祖正傳の宗風を傳持して初て之を扶桑國中に弘通せんとす、今は當寺に居住すべしと雖も接衆に便ならざるを以て別に適當の場所と位置とを擇で止宿せんと思ふ、若し處を得て草庵を結ばゞ乃ち改めて尋ねて到るべし、此處に於て予に相隨はんこと不可なり、甚だ不便の至りであると言はれた、是に由て見るも最初の相見は建仁寺であらうと思ふ、非祖は此命に隨ひて一たび辭し去りて時の至るを俟たれたのである。

然るに元和尚深草の極樂寺の傍らに、初て草庵を結て一人居す。一人の訪ふなくして兩載を經しに、師即ち尋ね到る。時に文曆元年なり。元和尚歡喜して即ち入室を許し晝夜祖道を談ず。稍や三年を過ぐるに今の因緣を請益に擧せらる。謂ゆる此因緣は一念萬年一毫衆穴を穿つ。登科は汝が登科に任す。拔萃は汝が拔萃に任す。之を聞て師即ち省悟す。

高祖は寛喜元年年三十の歳深草の里なる安養院といへる廢院に移られた、「生死可レ憐雲變更、迷途覺路夢中行、唯留ニ一事ニ醒猶記、深草閑居夜雨聲」の祖詠は此間の御作である。最もわびしき閑居であらせられた。故に太祖は然るに元和尚深草の極樂寺の傍らに初て草庵を結で一人居すと仰せられた、此の間は殆ど一人の訪ふ者もなくして兩歳を經られしに、弊祖は約を守りて即ち尋ね到る、時に文曆元年なり、高祖三十五歳で極樂寺の舊趾、佛殿の殘存するありしに移住し、觀音導利院と名け玉ひし頃である。高祖は非常に歡喜して弊祖を接し即ち入室を許して晝夜爲めに祖道を談ず、それより稍や三年を過ぐるに高祖は今の本則の因緣を弊祖の請益に應じて擧似せらる、謂ゆる此因緣は一念萬年の玄旨を一毫の衆穴を穿つに比し、石霜が明上座の問に答へて登科は汝が登科に任す拔萃は汝が萃拔に任すと說破せし公案である。一毫衆穴を穿つことを知らんと欲せば萬法唯一心なりと工夫すべし、一念萬年なることを會せんと要せば無始無終不生不滅なりと參究すべし、三祖大師は信心銘に於て「宗は促延に非ず一念萬年、在と不在と無く十方目前」と示されてある、此公案を聞て弊祖は即ち省悟す、而して證契即通の面授此間に行はれたのである。

聽許ありしより後相隨て一日も師を離れず、影の形に隨ふが如くして、二十年を送る。設ひ諸職を補すと雖も必ず侍者を兼ぬ。職務の後は又侍者司に居す。故に予二代和尚の尋常の垂示を聞しに曰く。佛樹和尚の門人數輩ありしかども、元師獨り參徹す。元和尚の門人又多かりしかども、我れ獨り函丈に獨歩す。故に人の聞かざる所を聞けることはありと雖も、他の聞ける所を聞かざることなし。

弊祖の高祖に於ける師資の親密なる弊祖孝心の深厚なる、古今稀に見る所であつた。されば聽許即ち高祖の印可證明を受くることありしより後、高祖の左右に相隨ふて一日も高祖の傍を離れず、恰

も影の形に隨ふが如くして二十年の歳月を送られた。設ひ監寺とか副寺とかいふ諸職を補充すと雖も必ず侍者を兼任せられた、故に當面に職務を執行せる後は又侍者司に居す、侍者寮を以て住處とせられた。故に予とは太祖御自身を指す、弈祖は五十六歳の時永平寺に住せられ七十歳にして御退隱、爾來十四年間永平東堂に在て高祖の眞に侍せられ、八十三歳にして示寂せられた。太祖は八歳にして弈祖の下に投ぜられたが、此時弈祖は七十八歳の時であつた、それより約六年間弈祖の御傍に侍せられたから、色々の御物語りをも聞かれたのである。故に永平二代和尚の尋常の垂示を聞しに曰く、建仁二世佛樹明全和尚の門人も數輩ありしかども、高祖大師獨り其宗風に參徹す、高祖の門人も又僧海、詮惠、義介、義尹、義演、義準等の俊足ありて多かりしかども我れ獨り第一座に坐せり。函丈とは方丈又は丈室といふが如し、獨歩は首位を占むるの意、弈祖は首衆分座二十餘年とあるから、高祖の會中常に第一座たりしこと迦葉尊者の釋尊に於けるが如くであらせられた、故に人の聞かざる所の御說法を聞けることはありと雖も、他の聞ける所を聞かざることなし、弈祖は恰も迦葉の上座と阿難の侍者とを兼ねられた樣なものであつた。

卒に宗風を相承してより後、尋常に元和尚師を以て重くせられ、師をして永平の一切佛事を行はしむ。師其故を問へば、和尚示して曰く我が命久しかるべからず。汝我れより久くして、決定我が道を弘通すべし。故に我れ汝を法の爲に重くす。室中の禮恰も師匠の如し。四節毎に太平を奉つらる。是の如く義を重くし禮を厚くす。師資道合し心眼光交はり、水に水を入れ空に空を合するに似たり。一毫も違背なし唯た師獨り元和尚の心を知る、他の知る所に非ず。

弈祖が卒に高祖の宗風を相承してより後は、尋常に高祖は弈祖を以て重くせらる、即ち特別の御取扱であつた。殊に弈祖をして永平寺に於ける一切の佛事を行はしめられた、弈祖が其故を問はれけるに、高祖示して曰く、我が壽命久しかるべからず、汝は我れより久しく大法を荷擔して決定して我が道を弘通すべし、汝が身は祖門の至寶である、故に我れは汝を法の爲に重くするのであると仰せられ、室中に於ける禮も恰も師匠に對するが如く特殊に敬意を表せられた。四節は年中の四大行事にして結夏解夏、冬至、元旦、是を四節と稱して上堂說法せらる、此行事毎に太平を奉つらる、即ち尊候起居萬福の人事を行なはせられた。是の如く義を重くし禮を厚くす。是れ皆な佛法を貴び祖道を重んずるより

出づ、されば高祖と弗祖との間柄は師資の道が投合し、心眼を以て相見る、其眼光が互に相交はり幾ど一身同體の觀ありて水に水を入れ空に空を合するに似たり、一毫も違背なし又隔礙なし、唯だ弗祖獨り高祖の心を知る高祖の皮肉骨髓は他人の容易に知る所に非ず、洞上聯燈錄弗祖の傳に「法令ある毎に元必ず師に命じて施行せしむ、師曰く和尚の號令奈何ぞ自ら行なはずして必ず某甲に命ずるや、元曰く大法を荷擔すること盡く子が躬に在り子が齡吾より高しと雖も能く永年まで大に吾が宗を弘めん子其れ之を勉めよ」とある。

謂ゆる深草に修練の時、即ち出卿の日限を定めらるゝ、牓に曰く一月兩度一出三日也。然るに師の悲母最後の病中に師往て見ること既に制限を犯さず。病既に急にして最後の對面を望む。使既に重なる。故に一衆悉く往くべしと曰ふ。師既に心中に思ひ究むと雖も、又一衆の心を知らんと思ふて衆を集めて報じて曰く。母儀最後の相見を願ふ制を破て往くべしや否や。時に五十餘人皆曰ふ禁制是の如くなりと雖も、今生悲母再び逢ふべきに非ずや。懇請して往く、べし。衆心悉く背くべからず。和尚何ぞ許さざらん。事既に重し小事に準ずべからす。衆人の議皆な一同なり。此の事上方に聞ゆ。和尚窃かに言ふ弗公の心定で出づべからず。衆議同ぜじと。果して衆議畢りて後、師衆に報じて曰く佛祖の軌範衆議よりも重し正しく是れ古佛の禮法なり。悲母の人情に隨ひ古佛の垂範に背かん。頗る不幸の過何ぞ免かれんや。故如何となれば、今方に佛の制法を破らん是れ母最後の大罪なるべし。夫れ出家人としては親をして道に入らしむべきに、今一旦人情に隨ひ永劫沈淪を受けしめんやと云ふて、卒に衆議に從はず。故に衆人舌を卷く。果して和尚の所說に違はず。諸人讃歎して實に是れ人發し難き志なりと。

以下弗祖道業の堅密なることを示さる、實に是れ萬世の龜鑑である、謂ゆる高祖が深草に在りて衆と與に修練の時、即ち出卿、所謂外出の日限を定めらるゝ牓に曰く、一月兩度一出三日なり、一ケ月に兩度の外出を許し一度の外出を三日限りとす、然るに弗祖の悲母不治の病に臥し此度こそ最後と思

はるゝ病中に弊祖は往て見舞をさることも既に此制限を犯し玉はぬ。處が病既に危篤に逼りて急を告ぐるに至りて最後の對面を望まれた、使の者既に重なりて二度も三度も迎ひに來たのである、故に一會の大衆も悉く往くべしと曰つて居る、弊祖は既に心中に思ひ究むる處ありて覺悟を定められしと雖も、又一衆の心を知らんと思ふて是を衆議に付せられた、乃ち大衆を集めて報告して曰く、予が母儀病篤ふして最後の相見を願ふも叢林の制度は最早予が外出を許さず、此場合制を破て往くべしや否やといふて大衆の意見を徵せられた。時に五十餘人皆な曰く、禁制は是の如くなりと雖も、今生に於て悲母一たび逝きなば再び逢ふべきに非ず、宜しく方丈に懇請して往くべし、大衆の希望する心は悉く背き玉ふべからず、和尚も亦此意を諒して何ぞ許さざらん、悲母の重態その事既に重大なり小事に準ずべからずといふて、衆人の議する所皆な一同に議決した。此の事が上方なる高祖に聞ゆ、時に高祖は窃かに近侍に言ふ、弊公の心定で制を犯して外に出づべからず衆議定まるとも之に同意せまじと仰せられしが、果して衆議畢りて後、弊祖は大衆に報じて曰く、佛祖の軌範は大衆の議決よりも重し這裡外出の制度は正しく是れ古佛曩祖の禮法なり、今悲母の人情に隨ひて禁を破りて古佛の垂範に背かんには、頗る不孝の罪過を招ぎ其責何ぞ免かれんや、故如何となれば、今方に佛祖の制法を破らん、將來の規繩亦自づから整正なる能はじ、是れ母をして最後の大罪を犯さしむることゝなるべし。夫れ出家人として恩を棄てゝ無爲に入る、宜しく親をして佛道に入らしめて永劫の樂果を成ぜしむるこそ、孝道の本旨なれ。然るに今一旦人情に隨ひて佛祖の洪範を曲げ、徒らに凡俗の恩愛に縛せられて永劫惡道に沈淪するの業報を受けしめんやと云て卒に衆議に從はず、故に其の道を重んずる志氣の剛堅なるには衆人も舌を卷て驚いたが、果して高祖の說く所に違はず、是を以て之を見聞せし諸人は皆な弊祖を讃歎して、實に是れ普通人の發し難き大志なりと、孝心の世に優れたる弊祖が制を守りて悲母の最後を訪はざりし其心中は果して如何でありしならん、彼の古の黃檗禪師や洞山大師の事も偲ばれて、想ひやるだに斷腸を覺ゆるのである、是れ則ち弊祖の大信念力の致す所であつて此中に眞實報恩の妙旨あることを味ふべきである。

是の如く十二時中師命に背かざる志、師父も鑑みる。實に師資の心通徹す。然のみならず、二十年中師命に依て療病せし時、師顏に向はざること首尾十日なり。南嶽懷讓。六祖に奉侍せしこと未徹以前八年、已徹して以後八年。前後十五秋の星霜を送る。其の外三十年四十年、師を離れざる多しと雖も、

師の如くなる古今未だ見聞せざるなり。

弊祖は是の如く十二時中唯だ佛法に隨順して、師の命に背かざる志は師父たる高祖も十分に鑑みられたればこそ、早くも弊祖は衆議を容れまじと知り玉ひき。實に師資の心相通徹するものと謂ふべし、然のみならず近侍二十年の中高祖の御命令に依て御自分の病を療ぜし時、師の御顏に向はざること首尾十日のみなりき。昔し南嶽懷讓禪師は曹溪の六祖大師に奉侍せしこと未だ徹證せざる以前八年、已に徹證して以後八年、前後十五秋の星霜を送られた。其の外にも雲岩禪師や道吾禪師は藥山禪師に參隨すること四十年、船子和尙も亦藥山禪師に隨侍すること三十年とある、是の如く三十年も四十年も師僧の傍を離れざる祖師多しと雖も、弊祖の如く二十年中御顏を見ざること十日に過ぎずといふ樣な御方は古今未だ見聞せざるなり。

然のみならず。永平の法席を續で十五年の間、方丈の傍らに先師の影を安じて、夜間に珍重し曉天に和南して一日も怠らず。世々生々奉侍を期し、卒に釋尊阿難の如くならんと願ひき。尙ほ今生の幻身も相離れざらん爲に、遺骨

をして先師の塔の侍者の位に埋ましめ、別に塔を立てず。塔は以て尊を表するを恐れてなり。同寺に於て我が爲に佛事を修せんことを恐れて、先師忌八箇日の佛事の一日の回向に預らんと願ひ、果して同月二十四日に終焉ありて、平生の願樂の如く開山忌一日を占む。志氣の切なること顯はる。

然のみならず永平寺の法席を續で第二世と爲り住持すること十五年、其の間は常に方丈の傍らに先師即ち高祖の御尊影を奉安して恰も在世の時の如く、夜間には珍重し曉天には和南して一日も怠らず、珍重とは御氣嫌宜しく御大事にといふ挨拶に同じ、和南は梵語で敬禮と譯し御拜をすること、獨り現在のみならず生々世々近侍し奉らんことを期し、卒に阿難の釋尊に對するが如くならんと願ひき、尙ほ今生の幻の如き身も高祖に相離れざらん爲に自身の遺骨をして先師の塔の傍なる侍者の位に埋ましめて別に塔を立てず、是れ今の永平寺祖廟の傍に孤雲閣のある因由である、塔は以て尊敬を表するを恐れて御遠慮なされたものである。又永平寺に於て我が爲に別に供養の佛事を修せんことを恐れて、先師の御年忌に一周間の報恩法會も迎聖送聖を併せて八箇日の佛事となる、其の中の一日の回向に預らんと願ひ居られしが、果して高祖の示寂と同じ月の二十四日に終焉ありて平生の願樂の如く開山忌

法會中の一日を占む、師に對するの篤孝、道に奉ずるの志氣己れを謙遜するの美德の親切なることは事々物々の上に顯はる、全く稀代の勝躅である。總持寺二世峩山禪師も亦弊祖の如く、太祖に對して至孝の志、世に比ひなく盡未來際、師資相離れざらんことを誓はれた、故に總持寺に於ても八月十五日が太祖御入滅の忌日であるが恰も御忌中なる同月十三日を以て峩山禪師の御征忌を修行し、月々の月忌も亦同樣に勤行して居る、弊祖と峩祖とは其の偉德大行俱に兩鏡の相對するが如くである。

然のみならず、義を重くし法を守ること、一毫髮も開山の會裏に違はず。故に開山一會の賢愚老少悉く一歸す。今諸方に永平門下と稱する皆な是れ師の門葉なり。是の如く法火熾燃として遠く顯はるゝが故に、越州大野郡に或人夢みらく、北山に當りて大火高く燃ゆ。人ありて問て曰く、是れ如何なる火なれば是の如く燃るぞと。答て曰く佛法上人の法火なりと。夢覺て人に尋ねたるに佛法上人といひし人、うざかの北の山に住して世を去りて年遙かなり。其の門弟今彼の山に住すと聞て不思議の思を爲し、わざと夢を記して咨參し

き。實に開山の法道を傳持して永平に弘通すること、開山の來記に違はざるゆへに、兒孫今に及びて宗風未だ斷絕せず。

然のみならず宗義を重くして法儀を守ることは一毫髮も開山高祖の會裏に違はず、故に開山一會の道俗は賢者も愚者も老人も少年も悉く一致して歸仰す、今諸方に永平門下と稱する者は皆な是れ弊祖の門葉にして法孫なり、是の如く法門の盛んなること大火の熾然として耀くが如く、自然に遠くまで顯はるゝが故に越前州にて永平寺の南に當る大野郡に或人が夢みらく、北山の方面に當りて大火高く燃ゆ、人ありて問て曰く、是れは如何なる火なれば是の如く盛んに燃るぞと、答て曰く是れは佛法上人の法火なりと、佛法上人とは高祖の事である、夢覺て後人に尋ぬるに、佛法上人といひし聖德ありし人はうざか(地名)の北の山に住して禪風を擧揚せられしが今は御遷化せられて而も其時代の世を去て年遙かなり、幾許の星霜を經て居る、其の門弟たる懷弊禪師今彼の山に住すと聞て不思議の思を爲し、わざと夢に見たることを記として咨問し參禪せし人もあつた。實に弊祖は開山大師の法道を傳持して永平に法輪を轉じ之を四天下に弘通せられた、是れ既に開山大師が大法を荷擔すること盡く子が躬に在りと將來を記莂せられし御語に違はざる故に、弊祖の兒孫今に及びて宗風未だ斷絕せず、益々繁興を致したのである。

之に依て當時老和尚价公。まのあたり彼の嫡子として、法幢を此處に建て、宗風を當林に揚ぐ。因て雲兄水弟、飢寒を忍び古風を學で、萬難を顧りみず。晝夜參徹す。是れ然しながら師の德風のこり、靈骨暖かなる故なり。夫れ法を重んずること師の操行の如く、德を弘むること師の眞風の如くならば、扶桑國中に宗風到らざる所なく、天下徧く永平の宗風に靡かん。汝等今日の心術古人の如くならば、未來の弘通大宋の如くならん。

弈祖の法燈相續不斷なるに依て當大乘寺堂頭老和尚徹通義价禪師は、實に面あたり弈祖の嫡子として永平三世の主席を董し、退院の後加州に移錫し今や法幢を此大乘寺に建て宗風を當林に揚ぐ、因て稽古慕道の雲兄水弟、即ち雲水兄弟諸士は飢寒を忍び眠食を忘れて古佛の家風を學び萬難をも顧りみず晝夜無間斷に參禪して其徹底に勤めて居る。是れ然しながら弈祖の德風が遺り居りて其靈骨猶ほ暖かなる故なり、釋尊は、展轉して之を行ぜば如來の法身常に在して而も滅せずと仰せられた。高祖弈祖の法身も亦常在不滅である、夫れ法を重んずること弈祖の操行の如くにして毫も其私しを存せず、德を弘むること亦弈祖の眞風の如くにして更に己我を立せなんだならば、佛祖の正法眼藏は益々其威德を現じて、扶桑國中に宗風の到らざる所なく天下を擧げて、徧く永平の宗風に靡くであらうと思ふ。汝等今日の心術即ち心懸けが古人の高祖や弈祖の如くならば未來に於ける祖道の弘通も必ずや大宋國の如くならん、大宋の如くなるのみならず、靈山會上の如く祇園道場の如くにも爲り去るであらう。

抑も一毫衆穴を穿つの意は、師已に一毫は問はず如何なるか是れ衆穴と問ふ。纖塵の立すべきなく一法の崩すべきなし。故に古人曰く實際理地に一塵を受けず。一亘の清虛に毫髮の崩し來るなし。是の如く會得せし時、元老乃ち許可するに穿了也と曰ふ。

以下本則の御提唱である、抑も一毫衆穴を穿つの意は天台に所謂一念三千の法門、華嚴に所謂心佛及衆生是三無差別の妙旨であるが、祖師門下に於ては更に一段向上の玄談がある、萬法と一心と同異の論を絶するが故に一心といふものをも認めぬ、即ち一毫をも存せぬ、諸法其儘實相と諦觀すれば衆穴は衆穴に任せて、敢て穿と不穿との詮鑿を要せぬ、是れ弈祖は一毫は問はず直ちに衆穴を活捉せられた所以である。故に弈祖の一問は正に是れ宗門向上の大事を道破して餘蘊なし、衆穴の名を聞て差別

であるとか諸法の性相であるとかいふ講釋に渉るまい、山河大地草木叢林そのまゝが圓通無礙の法界であるから、纖塵の立すべきなく一法の崩すべきなし、故に古人曰く、實際理地に一塵を受けず、實際理地とは眞理の究竟したる所即ち絶對境である、此境致は恰も一亘の清虛に同じ、一亘は猶ほ一枚といふが如し、萬里一枚の清淨な太虛には毫髮の法も崩し來るなし、六祖大師は是を本來無一物と稱せられ、弊祖は是の如く會得せし時、道元老古佛は乃ち許可するに穿了也と曰ふ、穿ち了れりとの御證明である。

實に百千の妙義無量の法門一毫頭上に向て穿却し畢りぬ。終に微塵の外より來るなし。故に十方界畔なく三世隔てなし。玲々瓏々として明々了々たり。此の田地千日雙び照すとも尙ほ其明に及ばず。千眼回し見れども其際を究むべからず。然れども人人悉く疑はず。覺悟、了々たり。故に寂滅の法に非ず。差別の相に非ず。動なく靜なく聞なく見なし。子細に精到し恁麼に覺了すや。若し此處に承當せずんば、設ひ千萬年の功行あり、恒河沙の諸佛に見ゆとも、唯だ是れ有爲の功行のみなり。一毫も未だ祖風を辨へず。故に三界苦輪免かるべからず。四生の流轉斷ずること無からん。

此一段は穿了也の御垂示である、實に釋尊の開示し玉ひし百千の妙義も無量の法門も畢竟一佛心の注脚に過ぎぬ。元來唯有一乘法であるから一毫頭上に向て穿却し畢りぬ、佛道は人々の脚跟下なり終に微塵ばかりも別法の外より來るなし、故に十方世界も一如の實相であるから界畔なく、過去現世未來の三世も無始無終常住寂滅の法門であるから更に隔てなし、其清淨なること玲々瓏々として玉の內外なきが如く、其智德の盛んなること日月の如く明々了々たり。此の田地は千箇の日輪雙び照すとも、尙ほ其佛性の明に及ばず、日月の光には限あるも、佛性の光明は無邊際である。故に弊祖御撰述の光明藏三昧には「それ光明藏とは諸佛の本源衆生の本有、萬法の全體にて、圓覺の神通大光明藏なり、三身四智普門塵數の諸三昧も皆な此の中より顯現す」と仰せられた。此の光明藏は遍法界であるから千箇の眼を回轉して見れども其際限を究むべからず、然れども人々一たび回光返照せば明らかに此の大光明を認得して悉く疑はず覺悟することを了々たり、所謂人の水を飲んで冷煖自知するが如くにして大安心を成じ法悅に滿つるのである。故に寂滅にして眞空の法には非ず、けれども心を覓むる

に竟に不可得で摸索不著であるから差別の相にも非ず内外色空の論を超越して居るから動もなく靜もなく聞もなく見もなし、借問す諸大衆此の田地を子細に精細を着けて到達し、恁麼是の如くに能く覺了することを得るや、若し此處に承當し體驗せざれば、設ひ千萬年の間功を積み行を累ぬることありて恒河の沙の數にも齊しき無數の諸佛に見ゆとも、唯だ是れ有爲といふて自己の妄想より發する所の功行のみなり。故に光明藏三昧には「縱ひ大小權實顯密の事理、五家七宗の妙旨を談ずるも己見を存する時は畢竟生滅に飯す故に云く生滅の心を以て實相を解すれば實相却て生滅となる」云々と誡められた。斯くては一毫も未だ祖風を辨へず、徒らに他家の珍寶を算ふるに過ぎぬ、故に欲界色界無色界の凡夫界たる三界生死の苦輪免かるべからず、胎卵濕化といふ迷界の四生の流轉斷ずることなからん。

汝等諸人辱けなく、佛の形儀を象どり、佛の受用を用ゐる。若し未だ佛心に承當の分あらずんば、十二時、自己を欺誑するのみに非ず、諸佛を毀破す。故に無明地を破することなく業識蘊に流浪す。設ひ且く善根力に依て人天の果報を感じ、自ら有爲の快樂を誇るとも、車輪暫らく濕れる所に推し、乾ける所に推すが如し。終なく始なく唯だ流轉業報の衆生ならん。

以下は大慈大悲の御訓誡である。汝等諸人は辱けなく有り難いことには、出家の身となりて佛の形儀即ち御姿や容儀を象どり佛の受用し玉へる法衣法鉢を用ゐるを得ること實に最大の幸福では無いか。然るに只だ其形のみを倣ふて未だ佛心即ち佛の御心に承當と合致するの分あらずんば、沐猴の冠するも同然で十二時中自己が自己を欺誑し佛子の相を現じて外道の業を營むの所作に涉るのみに非ず、却て諸佛の法を毀損し祖師の規繩を破却するものである。故に無明地を破ることなく業識蘊に流浪す、無明は明なしといふので理に背き道に迷ふ所の愚癡で是れぞ一切煩惱の根本である、地と稱するは大地の萬物を生ずるが如く此無明より諸の煩惱罪障を生み出すのである。業識は業は動作の義、此心識は煩惱に動されて、萬有を造作するが故に名く、蘊は積聚の義、一切衆生は此色と識との積聚に依て此身を成ずるを現はす。設ひ且く夙世の善根力に依て人天の果報を感じ、此世に於て自ら有爲の世界に於ける、夢幻の快樂に誇ると、恰も車輪を暫らく濕れる所に推したり乾ける所に推したりして展轉定まり無きが如し、久遠劫來終もなく始めもなく唯だ無限に三界六道に流轉する業報の衆生ならん、いかにあさましきことならずや。

然れば設ひ三乘十二分教を通利すとも、八萬四千の法門を開演すとも、畢竟是れ鼠を窺ふ猫の如し。形靜まれるに似たれども、心は求め息むことなし。設ひ修行綿密なりとも、十二時中心地未だ隱かならず。之に依て疑滯未だ晴れず。狐の早く走ると雖も、顧みるに依て進むこと遲きが如し。野狐精の變怪未斷弄精魂の活計なり。

然れば設ひ三乘十二分教、是れは前に釋してあるから此には略するが佛教の全體を指したのである、全佛教に通曉し利達すとも、又八萬四千の法門を縱横に開宣演說すとも、佛心に承當せざらん者は畢竟是れ鼠を窺ふ猫の如し、外形は熱心に而も靜まりて如何にも一心不亂なるに似たれども其心は只だ鼠を求めんとするのみで貪婪の情息むことなし。又設ひ其修行が如何に綿密にて殊勝なりとも、十二時中心地の未だ穩かならざるものあるべし、寶鏡三昧に繫げる駒、伏せる鼠とあるが如く、表面は靜かなるが如きも內心は依然として妄想の窩中に沒頭して居る。之に依て疑惑の巷に滯ほる所の不安心の雲未だ晴れず、恰も狐の早く走ると雖も彼は疑ひ深くして時々後を顧みるに依て進むこと遲きが如し、躊躇逡巡して大道に承當することが出來ぬ。その中には或は外界の爲めに轉ぜられ或は妄見の爲めに瞞ぜられ、いつの間にか化の皮が露はれる、から、つまり野狐精の變怪で野狐のお化、未斷弄精魂といふて幽魂の執念が未だ斷絕せずに迷ひ込で居る樣な活計である。故に光明藏三昧には「此玄旨を知らずして徒らに念靜に勞するものあり亦さはあらじと狐疑して鬼窟に活計するものあり海に入て砂を算ふるの類もあり、蚊虻の紙窓を破るが如くなるあり」と誡められてある。

然れば多聞を好むこと勿れ。廣學を營むこと勿れ。唯だ暫時なりと雖も、刹那なりと雖も、志を發すること大火聚の纖塵を留めざるか如く、太虛空の一針をも掛けざるが如くに似て、設ひ思量すと雖も、必ず思不到の處に到らん。設ひ不思量なりとも、必ず空不得の處に到らん。若し能く是の如く志實あり て志既に堅からん時、人々悉く通徹して三世佛の所證と絲毫も隔つべからず。

然れば佛法の大事を究辨せんには、必ずしも多く教義を聞くことを好むこと勿れ、廣く學問せんことを營むこと勿れ、多聞廣學を否認するには非ざれども、眞箇の悟道は學文知解を超越したるものなる

ことを忘れてはならぬ。唯々暫時の間なりと雖も、刹那といふて壯士の一彈指六十五刹那と稱する程の瞬間なりと雖も、大菩提を成ぜんとの志を發することは猛烈にして且つ餘念を交えざること恰も大火聚の纖塵を留めざるが如く、又其志の光明正大にして邪想を留めざること太虛空の晴れ渉りて一針をも掛けざるが如くに似て、益々參學辨道に努めなば、設ひ思量を廻らして工夫研究すと雖も必ず思不到といふて思量工夫の及ばざる虛玄の妙處に到らん。又設ひ不思量で一切の妄情を脫却し去るとも必ず空不得といふて空じ得ざるもの即ち妄想の雲散じ盡して眞如の月、影を現ずる底の極處に到らん、若し能く是の如く求道の志に親實ありて精進の志氣既に堅からん時、人々悉く佛法の一大事に通曉し徹底して三世諸佛の所證と絲毫も隔つべからず、所謂諸佛の法身我が性に入り我が性却て如來と合し、先佛曩祖と手を取り膝を交ゆるの分があらう。

故に永平開山曰く。人道を求むること世にたかき色に逢はんと思ひ、剛き敵を伐たんと思ひ、堅城を破らんと思ふが如くなるべし。志既に深きに依て、此色に終に逢はざることなし。彼の城破らざることなし。此心を以て道に飜へさん時、千人は千人ながら萬人は萬人ながら、皆是れ悉く得道すべし。

故に永平開山高祖大師曰く、人の大道を求むることは最も熱烈至誠なるを要す、道の爲めには身命をも顧みざるの覺悟なかるべからず、譬へば世に位置たかき色を戀してそれに逢はんと思ひ、又力剛き敵に向て之を伐たんと思ひ、又は堅固なる鐵城を破らんと思ふが如くなるべしと仰せられた。斯る場合は殆ど己れを忘れ身を忘れ、命を投げ出し萬難を排して進むものである。孔夫子も「賢を賢として色に易へよ」といはれた、賢人君子を尊び好むこと少壯血氣の者が女色を好むが如くせよとは、道を求むることの切なるに出でたのである。又「朝に道を聞て夕に死すとも可なり」ともいはれた。況や釋尊の如きは斯道の爲めに所有位地、權勢、歡樂を放下して破衣乞食の身とまでなられた。その志既に深きに依て思ふ一念岩をも透すといへる諺の如くいつかしらん、此色に逢はざることなし彼の城破らざることなし、此の如き心を以て道を求むる方面に飜へし廻らさん時は、陽氣發する處金石亦透る精神一到何事か成らざらん、で、千人は千人ながら萬人は萬人ながら皆是れ悉く得道すべし、して見れば必ずしも境遇の順逆や性質の利鈍などに貪着するに及ばぬ。要する處は其の志氣の相續心の如何に在るのである。靜琳和尙は講を棄て禪を習ふに昏睡心を惑はすを憂へ、千仞懸崖横に一樹を出す、その樹上に坐して工夫を凝された、伊菴權和尙は功を用ゐること甚だ鋭く晩に至りて必ず涕を流して、今日又只恁麼に空しく過ぐ未だ知らず來日工夫如何といふて、衆中に在りても人と一言も交えなん

だ、性空妙普和尚は「學道猶如レ守ニ禁城一　晝防ニ六賊一夜惺々　中軍主將能行レ令　不レ動ニ干戈一致ニ太平一」と警誡せられた、今月御互も必ず是の如き大勇猛心を發せねばならぬ。

然れば諸仁者、道は無相大乘の法、必らず機を擇ぶ。初機後學の到るべきに非ずと思ふこと勿れ。此處に都て利鈍なく都て所務なし。一度憤發して深く契處あるべし。且く道へ、如何が是れ這箇の道理、先に既に衆に呈す。虛空從來不レ容レ針、廓落無依有レ誰論。此田地に到る時、一毫の名を立せず。何況んや衆穴あることあらんや。

然れば諸仁者よ、道は心地無相の眞諦大乘甚妙の法門なるを以て必ず其根機を擇ぶ、初機といふて初めて發心せし者後學といふて遲れて道に入る者などの到るべき處に非ずと思ふこと勿れ。自己心地の寶藏を打開する人々本具の法門であるから、此處には都て利鈍の隔てなく都て才不才能不能を論じて排列すべき所務なし。唯だ一度憤發して精進不退なれば必ず深く契處といふて證契即通する處あるべし。憤發とは論語に憤りを發して食を忘れとありて憤りを發して道を求むること。且く道へ如何が是れ這箇の道理、即ち大道の面目如何、先に既に諸大衆に呈示するが如く「虛空從來針を容れず廓落無依誰ありてか論ぜん、」此二句は後に此本則の大意を示されたる七言四句の中の前二句である。先に既に衆に呈すとあるから、此偈頌を豫め擧示せられての御提唱と見える。此大道は一亘の大虛空の從來廓然として其中には針一本をも容れず、廣大無邊にして空々洞々たり、生滅の相もなく古今の隔てもない況や凡聖迷悟の論量あらんや、是を本來無一物とも是法平等無有高下ともいふのである。廓落は空虛の貌、無依は根據の無きこと、虛空の大道は絕對無限であるから、何物の障礙も無く何等の地盤も無いからして誰ありてか論ぜん、大小廣狹の論議を挾むことは出來ぬ。此田地に到る時は一毫の名をも立せず、何況んや衆穴あることあらんや、一心といふ名も無ければ萬法といふ相も立てられぬ、一に多種あり二に兩般なし、一多の相を泯ずる底の道體は全く言語道斷心行處滅である。

然れども萬法泯ずと雖も泯ぜざる物あり。一切盡くすと雖も盡き得ざる物あり。得得として自から杲然たり。空空として本より靈明なり。故に淨躶々と曰ひ赤洒々と曰ひ、惺々歷々地と曰ひ。明々皎々地と曰ふ。纖毫の疑慮なく毫髮の浮塵なし。百千萬の日月よりも明らかなり。唯是れ白と謂ふべからず

赤と謂ふべからず。恰も夢の覺たる時の如し。已に活々たるのみなり。之を呼で活々と謂ふ。惺々と謂ふは即ちさめざめたるのみなり。明々と謂ふは亦あきあきとなるのみなり。內外なしと謂ふべきに非ず。古に涉るとも謂ふべからず。今に涉るとも謂ふべからず。故に謂ふこと莫れ一毫衆穴を穿つと。何の徹了かあらん。

然れども一切萬法盡く泯絕して一物を存せずと雖も決して滅無に非ず、不可得の中只麽に得たりで泯ぜざる那一物あり、一切諸法總に空じ盡くすと雖も、決して單空に非ず、心法雙べ亡じて性即ち眞なりで盡き得ざる物即ち眞性あり。此那一物は諸佛之を證得し諸祖之を悟得す、寶鏡三昧には汝今之を得たりとありて汝も得たり我も得たり得得として自から杲然たり、杲然は日の出る貌、光明遍照である。さり乍ら取らんとすれば取ることを得ず、即ち空々として跡なし、跡なけれども本より靈明なり、遍界曾て藏さず、故に淨躶々で素躶である、迷悟凡聖の服裝は着けぬ、赤洒々で水を以て洗ひ落した樣にさつぱりして居る、煩惱苦痛の塵埃は無い、又惺々と目覺めて無明の夢路を辿らぬから眼橫鼻直その儘の淸淨法身で歷々地と分明である、又明々として常に大智光を發し皎々地で玉の玲瓏たるが如く普く大德光を顯はす、要するに天地法界は智慧道德の莊嚴光明であるから、這裏纖毫の疑團や思慮を入るべきの餘地なく、毫髮の浮塵の如き妄想や凡夫世界を附着すべき關係なし。此莊嚴光明は古今に徹し十方に遍きを以て百千萬の日月よりも明らかなり、而して色相を認めて論斷すべきものでは無いから、唯だ是れ白とも謂ふべからず赤とも謂ふべからず、梵網經には、青黃赤白黑に非ず色に非ず心に非ずと說かれた。此境界を見破し去れば恰も夢の覺たる時の如し、從前の娑婆は即寂光淨土で從來の煩惱も即菩提道の七通八達である、此時一切諸法一塵も佛光明ならざるは無きを以て已に活々たるのみなり、草木國土も悉皆成佛である。之を呼で活々と謂ふ、文相を推して見れば此邊に多小の脫字があるかとも思はれるが、今は他に考訂すべき材料なければ現本に依てその宗旨だけを注脚するのである。惺々と謂ふは即ちさめざめたるのみなり、三界生死の夢境も無ければ苦樂愛憎の夢想も無い、明々と謂ふは亦あきあきとなるのみなり、地獄餓思の黑暗も無く畜生の癡暗も無く、どこもかも明らかで光輝璨爛である。此光明裏に在りて自利々他の神通を打し自己を向上し他己を誘引するを以て內外なしと謂ふべきに非ず、されど其內外が皆な一顆の明珠である、過去に於ても現在に於ても心地の光明蓋天蓋地であるから、古に涉るとも謂ふべからず今に涉るとも謂ふべからず、古今の隔で無く前後の相違も無い、故に此當體には謂ふこと莫れ一毫といへば實

在なりと稱し衆穴と聞けば現象なりと思ふて一と衆、體と用、性と相、此等二邊に拘泥し去らば何の徹了があらん、實際に大道に徹底し終ることは出來まいぞ、弊祖は實に此兩邊を跳跳せられたので、高祖は穿了也と證明せられたのである。

呼で一毫とすれば既に是れ二代和尚の所得底。更に如何が是れ一毫の體。聞かんと要すや。

虛空從來不容針。　廓落無依有誰論。
莫謂一毫穿衆穴。　赤洒洒地絕瘢痕。

衆穴を攝して差別の見を忘ず是を呼で一毫とすれば既に是れ二代和尚即ち弊祖の所得底であるから、坐ながらにして弊祖と相見することも出來やう、併し只だ耳口を以て流傳し去ては樣に依て胡蘆を描くの類である。更に如何が是れ一毫の本體ぞと究盡せねばならぬ、此究盡の道は他岐なし、僧堂裏に向て參得し去らんことを要す、這裡の消息聞かんと要すやと仰せられて七言四句の頌を示された。虛空從來針を容れず、廓落無依誰有てか論ぜん、謂ふこと莫れ一毫衆穴を穿つと、赤洒々地瘢痕を絕す、絕待無限の大宇宙は萬里一碧の虛空にて從來針一本程の障礙物をも容れず、所謂廓然無聖である、故に其廓落と空洞清朗にして更に依る所は無い即ち絕對である、大道の圓通なること亦是の如く無所住にして根據とすべき物も無く高ふして上なく寬ふして限り無し、凡聖迷悟の雲翳も無し、豈に苦樂昇沈の實體あらんや、故に物の比倫に堪えたる無く誰あつてか論ぜん、佛の廣長舌を以てしても不可說不可稱量と仰せられた。這裏に至つては一多の別なく同異の論も無きが故に一毫衆穴を穿つ抔とも謂ふこと莫れ、淨裸々赤洒々地にして元來瘢痕を絕して居る、赤洒々地の洒は洗ひ濯ぐの意で身體の塵垢を洗ひ落して赤肉の素肌になつた貌、瘢痕の瘢は瘡痕で腫物の痕跡だが今は瑕瑾の意に見るが宜い。天眞爛熳の妙趣には塵垢も無く瘢痕も無い、衆生本來成佛である、釋尊は我と大地の有情と同時成道と仰せられた、是れは一毫の本體である。諸人者果して此本地の風光に觸るゝことが出來たかどうか、恐らくは瘢なき處に瘢を留め赤洒々地に向て錯て塵垢ありと執し自繩自縛をして居りはせぬか、徹底此風光を見得せんと欲せば先づ須らく自己を放下して親參實究すべきである。若し道を重んずること弊祖の如く、道を守ること亦弊祖の如くならば、高祖の慈訓に「儞若し法の爲めに身命を惜まざれば山河大地も亦儞が爲めに法を惜まず」とあるが如く、山河大地日月星辰頭々物々が一大光明藏三昧と爲り去ることを得るであらう。

傳光錄白字辨附錄

第五十三祖 徹通義介禪師參ニ弈祖一。一旦倏然徹證。徑詣ニ丈室一曰某甲今日會ニ得先師身心脫落話一。祖曰爾如何會。師曰將謂胡鬚赤更有ニ赤鬚胡一。祖領レ之。

師諱は義介。徹通と號す。越前足羽縣の人。俗姓は藤原氏。大將軍利仁の裔なり。承久元年二月二日を以て生る。歳甫て十三。本州波著寺懐鑑和尚に投じて祝髮す。懐鑑は多武峰覺晏の門人なり。後叡山に登りて具戒を禀け、天臺の教觀を習ふ。復た鑑公の會下に在りて楞嚴の深旨を究め兼て淨業を修む。仁治二年衣を改めて高祖承陽大師に與聖寺に參ず。大師一日上堂に曰く。是法住法位世間相常住。春色百花紅。鷓鴣柳上鳴と。師聞て省あり。是れより研鑽彌〻努む、大師永平に移るに逮び師亦隨が ひ行き、乞ふて水頭に當り尋で典座を掌り、寒暑を分たず自ら飯粮を擎つて一會の衆に供ず、又鑑寺に充てられ晝は則ち衆事を辨營し夜は則ち禪坐旦に達す。高祖其の行操を見て曰く眞の道人なりと、高祖病に依り上洛せらるゝに當り師に告げて曰く、汝が禪逸格にして履踐精密なり吾が宗を紹隆せんこと必せり吾が滅後弈長老に依附し去れと。大師寂後弈祖席を補す。師遺命を奉じ衣を攝して之に從ふ、弈祖命じて衆に首たらしむ。師一日弈祖に問ふて曰く。先師尋常、諸法實相を垂示するの外別に密意ありや。弈祖曰く實に密意なし豈に聞かずや先師曰く吾れ平生垂示爲人の外更に覆藏底の法なし

と。一旦倏然徹證す。乃至弗祖領レ之。且つ示して曰く。儞先師所得の處に於て其の玄旨を會す。先師那伽定中必ず儞が爲めに證を作さん。復た曰く、佛法の中人を得るは最も難し、若し人を得ずんば佛種を斷滅するの罪を免れず。縱ひ人を得るも其の器に非ざれば亦た斯の罪を免れず、此の事先聖の難しとする所況や其れ今時に於てをや。吾れ今儞を得て已に斯の罪を免かれ、今日便ち寂すとも復た遺恨なしと、言ひ畢て瀟然たり。更に囑するに洞上の宗旨を弘通することを以てす。師服膺し作禮して退く、師大願を發し將に宋域に赴きて親く叢林の規模を鑿みんとし、自ら如意輪虛空藏二大士の像を刻み、誓て曰く。儻し南遊して歸り來らば之を嚴飾し奉らんと。正元元年齡四十一、身を鯨波に橫へて遠く宋國に渡り、直に天童に登りて祖塔を禮し徧く叢席を訪ふて諸老の玄扉を扣き、到る處器重せらる。留ること四載にして歸朝し弗祖を永平に省す。弗祖喜ぶこと甚し。文永四年命を稟けて永平に住す。是れより淸規濟々大に叢林の禮樂を整ふ。一住六年位を退き山下に就て養母堂を構へ、老母に孝養して陳尊宿の風に效ふ。加州大乘寺澄海阿闍梨、師の道望を慕ひ特に來りて禪要を詢ふ。壇越藤原家尙と俱に謀り、師を開山始祖に請し密院を革めて禪刹と爲す。乾元元年八十四歲にして席を太祖に讓り東堂に幽居し、延慶二年九月十四日七顚八倒九十一年蘆花覆レ雪午夜月圓の一偈を遺し怡然として示寂す。師居常衆に臨むこと敬嚴門庭尤も高し諸方之を仰ぎて洞上の中興と稱す。誠に其

れ高祖心印を天童に面授して祖道を東に傳へ、弗祖能く副貳轉化して宗風大に興る。師は高祖の鉗鎚を蒙むり弗祖の堂奧を究め、化門を伸張して正法を弘通す。其の爐鞴下に太祖を鑄出して錦上更に花を鋪くことを得たり。我が宗の今日ある實に是れ師が行持力の遺恩なり。師初め台宗の敎觀を尋ね中道一實の妙理を體得すと雖ども、高祖別傳の宗旨に觸着するに及び忽爾として從來の我慢幢を倒却し了りぬ。後弗祖の室中に參じて佛祖向上の事あることを知り直下に正法眼を打開することを得て、即ち曰く某甲今日先師身心脫落の話を會得すと、恰も黑漆桶を打破するが如し。諸緣を拋捨し萬事を休息する時身自から脫落し、心意識を坐斷し念想觀を放下する時心亦自から脫落す。脫落身を擔取すれば牆壁瓦礫も大光明を放ち、脫落心を拈來すれば蠢動含靈も深妙法を說く。八萬四千の法門重々無盡の公案皆な此の王三昧より發現し來りて縱橫窮まり無し。這裏取捨の見を弄すること勿れ。得失の會を做すこと勿れ。到り得還り來りて別事なし廬山は烟雨浙江は潮。故に曰く。將に謂へり胡鬚赤と更に赤鬚胡ありと。猶ほ將に謂へり驢井を觀ると更に井驢を觀るありと言はんが如し。兩句に於て同異の觀を作すこと勿れ。然も與麼なりと雖ども此の田地に到らんこと實に容易ならず。無始の薰習粘着して離れ難く、自ら業累に引轉せられ枉げて六道の迷衢に跉蹡す。佛祖憐れみを垂れて無量の法門を開き善巧方便して衆生を導利し、終に佛知見に證入せしめ玉へり。如來の在世には全く二敎なく全

く二師なし、澆季の佛子漫りに摸象に倣ふて名相に縛せられ、自法に愛染して眞龍を見ることを忘る。悲むべし、佛法の中に住しながら佛法に辜負し、經卷の間に在りながら闤闠の咎を招ぐことを。我等幸に生を人趣に禀け緣を覺乘に結ぶ。此の身今生に向て度せずんば更に何れの生に向てか此の身を度せん。切に須らく金剛不壞の大信心を發して己躬下の事に承當し、四弘の願輪に乘じて六度の正路に遊び、以て四恩を報謝すべきなり。亂りに佛袈裟を纏ふて佛身心に背かん。披毛戴角の業苦終に免かれ難きことあるべし。いはゆる大信心は即ち是れ佛性なり佛性は即ち是れ如來なり、如來の淨光明普く諸の國土に充滿し、羣盲の癡闇を除き世間の苦惱を救ひ玉ふ。如來を見奉らんと欲せば自己を究辨すべきなり。自己を究辨せんと欲せば如來の淨光明を信得及すべきなり。信心決定の時三昧現成し菩提道莊嚴せらるるなり。古聖先德は求法の志堅く慕道の念切なりしに依りて、己れを忘じ私を去り辨道精進して直下に一大事因緣を究盡することを得たり。大凡そ志氣專一なれば群魔も其の便りを得ること能はず。故に能く名利を遠ざけ妄情を脫し、其の一言一行實に萬世の光明幢として瞻仰すべきなり。今日人文日に新たに人智の增進未曾有と稱す。然れども正念輕微にして德操古人に及ばざるが如し。是れ法を求むるの志氣堅强ならず道を慕ふの念力純一ならざるが爲めなり。經に曰く。夫れ道の爲めにする者は譬へば一人と萬人と戰ひ鎧を掛け門を出づるに、意或は怯弱なる者或は半路にして退く者或は格鬪して死する者或は勝を得て還る者の如し。沙門の學道も應當に其の心を堅持し精進勇銳、前境を畏れず衆魔を破滅して道果を得べしと。汝等諸人須らく古佛の垂範に順がひ先聖の操行に倣ひ、從晝至夜自己日常の行履を照顧して、益々道念を策勤し身心を磨勵し直下に承當し去らんことを期すべし。自己の身心を捧げて大道を供養し大道を莊嚴し大道を七通八達せんことを願ふべし。是れ豈に身心脫落の要機に非ざらんや。徒らに此の身心を愛執して煩惱の爲めに一生を賺過せられん。無價の寶珠を泥裏に委するよりもはかなし。介祖九十一年の行持は大道の崑崙鐵なり、初め高祖に興聖に侍してより入涅槃に至るまで、七顚八倒常に不染汚の行持力を保任す。進みては師側に奉侍し退ては悲母に孝養し、道を永平に行ふては二十餘載外請に赴かず、衆を大乘に接しては一日も蒲團に礙えられざるの時はあらじ。寂を示すに當りても猶ほ且つ沙彌童行に囑して剃髮受具せしめ、然る後衆を集めて懇ろに出世の始末を示す。釋尊の般涅槃に臨み遺誨を垂れ玉ふに似たり、皆な是れ脫落身心の頭正尾正なり。諸人者適來の因緣を審細に參究して、彌々向上の志氣を擧し、生々世々求法慕道の人となりて諸法實相の法門に逍遙せんことを期すべし。且く如何が此間の消息を通じ去らん。卑語あり聞かんと要すや。

擔折知ニ柴重一　春臻見ニ草蘇一　虛空垂ニ隻手一　拈ニ却赤鬚胡一

第五十四祖　太祖常濟大師。參侍介祖。聞介祖上堂舉平常心是道話。豁然徹證。乃曰我會也。祖曰爾作麼生會。師曰黑漆崑崙夜裏走。祖曰未在更道。師曰逢茶喫茶逢飯喫飯。祖笑曰子向後當起洞上宗風。

師諱は紹瑾。瑩山と號す。文永五年十月八日(太陽曆十一月廿一日)越前國多禰邑に生る。是れより先き、其の父母一子を得んことを望み、母は至心に觀世音菩薩に祈請す。一夜朝暾を呑むと夢みて娠あり。是れより日々、菩薩を禮すること三百三十三拜、普門品を誦すること三十三卷。聖子を生まんことをこれ禱る。降誕するに及びて果して丰姿秀拔。六歲にして發心し、八歲永平寺に上り介祖に投じて沙彌と作る。十三歲弊祖に就て得度す。弊祖其の志を察して輒ち歎じて曰く、此の子大人の作あり他日人天の師と成んこと必せりと。此の年弊祖將に謝世せんとし囑して、介祖に依らしむ。十八歲遊方行脚す。首め寶慶に至り寂圓禪師に謁し、中原に走りて、萬壽の寶覺、白雲の慧曉、興國の法燈等の諸老に參じ、又叡山に上りて台宗の法門を究めんとす。正應二年、介祖の加州大乘寺に住するに値ひ往て省覲す。會々法華經を見、父母所生眼悉見三千界に到りて省あり。方丈に詣して所解を陳ぶ。介祖曰く此の事を究めんと欲せば、些子の覺觸に於て、則を取ることを得ざれ、汝更に去て、工夫を做せと。師拜を設けて退く。是れより心を攝して寢ること無く仇と同處するが如し。是の如きこと七年永仁二年十月八日。「聞介祖上堂舉平常心是道話　乃至　祖笑曰子向後當起洞上宗風」。尋で寶鏡三昧三種の滲漏等を以て一々究盡して餘蘊あること無し。師時に年二十七。翌永仁三年正月十四日介祖は師をして入室せしめ永平所傳の法衣を以て之に付し斷絕せしむること勿らしむ。此の年阿波國の郡司、城滿寺を建てゝ師を請し、大に禮敬を加ふ。住山五年。此の間、戒壇を城滿寺に開く、可鐵鏡西堂等戒を受くる者七十五人。又西九州に遊びて寒巖禪師を大慈寺に訪ひ、或は京都に寓して道俗を接化す。峩山禪師亦た叡嶽を下り來り參ず。是の如く自利々他暫くも間斷あること無し。正安元年介祖の召に依りて大乘に歸省し常に其の左右に侍し、介祖に代りて接衆度生す。翌二年正月十二日以後特に釋尊以後五十二祖開悟傳法の因緣を提唱せらる。侍者筆錄して一冊と爲す題して傳光錄と曰ふ。乾元元年介祖大乘を退き、師接で、住持す。是に於て舛堂拈拂機語宏旌たり。江湖の龍象風を望で駢闐す。時に年三十五。延慶二年九月十四日介祖寂を示す壽九十一。介祖の微恙を感ぜしより師常に座側に侍し、接衆の暇親く湯藥甘旨の奉養に孜め、滅を示すに當りては津送造塔皆な躬ら事を執る。其の孝順敬養衆歎服せざる無し。應長元年院事を謝して加賀國山崎村法苑山淨住寺の請に應じ開祖と爲る。正和元年能登國中河の地頭滋野信直及び夫人其の德を欽し第に迎へて供を設け、酒井の保に於

て一淨境を施す。師始めて之に臻るに、奇峰怪巖繽繞して中間一平掌の如し。師其の勝境を喜び茅を縛して居す。二年秋藤原家方伽藍を興造す經營の始め弗多羅尊者影向し告ぐるに吉祥を以てす。役成るに及び洞谷山永光寺と稱す。此頃同國羽喰の郡司得田某光孝寺を建立して師を請す。文保二年師の母八十七歲を以て逝く。法號は懷觀大姉其の病中師親しく之を看護して孝順の範を示す。元應元年滋野夫人の出家を許して默譜祖忍の法號を與ふ。同二年悲母菩提の爲めに圓通院を洞谷山內蓮華峰に造立し祖忍尼をして住せしむ。此の年九月峩山禪師に師の眞像に題贊を加へて與ふ曰く、誰識庵中不死人。未レ搖二掌握一鎭二烟塵一。凜々威烈無二等匹一。三尺竹篦奪二劍輪一。器宇廓落。絕學天眞。眉毛爭到不疑地。端的眼睛又不レ親。元亨元年同國櫛比の庄に諸嶽山總持寺を開創し、六月八日開堂の典を行ふ。總持寺は舊と諸嶽寺と稱し眞言律院たり。住持定賢律師靈夢を感じて師を請す。此の年八月後醍醐天皇師の道德を欽慕し、覺明和尙を遣はして十種の疑問を垂れ玉ふ。奏對、叡旨に愜ひ九月十四日特に總持寺の勅額を賜ふ。翌二年八月二十八日更に綸旨を賜ふて、賜紫出世の道場と爲す。其の文に曰く。「能州諸嶽山總持寺者。直續二曹溪之正脈一專振二洞上之玄風一。特依レ爲二日域無雙之禪院一補二任曹洞出世之道場一。宜ク相二並南禪第一之上刹一着二紫衣法服一奉レ祈二寶祚長久一」。是れより盛んに禮樂を興し、丕ひに規矩を正し諸州の叢席咸く取て矜式と爲す。正中元年三月總持寺十條鵝鑑を製して法孫萬世の

洪範と爲し、八月七日席を峩祖に讓りて洞谷山に隱栖す。退院上堂の因み衆に示して曰く。卓二立機前一。獨超二物表一。峨峨青山蒸蒸山雲。父子長年不二相離一。君臣道合無二內外一。記得世尊拈華瞬目迦葉破顏微笑。世尊曰。吾有二正法眼藏一付二囑摩訶迦葉一。到二這裏一吾有底事如何。良久曰頂門凸出一圓相。徧界不レ藏新總持。又法衣を付するに曰く。梧桐葉落秋風興。竹林自知百卉長。見二渠金衣著實處一。大陽盈レ目自當レ堂。正中二年八月疾を示す。八日明峰禪師を擧げて院事を囑す。十五日夜半侍者を喚て沐浴淨髮、衣を整へ衆に示して曰く。念起是病。不レ續是藥。一切善惡。都莫二思量一。纔涉二思量一。白雲萬里。便ち偈を書して曰く。自耕自作閑田地。幾度賣來買去新。無レ限靈苗種熟脫。法堂上見二揷レ鋤人一。筆を拋て坐脫す。火化して舍利を得。總持、大乘、永光、淨住の四處に塔し、院を傳燈と曰ふ。閱世五十八坐夏四十六。後村上天皇、佛慈禪師と謚す。後桃園天皇、弘德圓明國師と追溢す。明治天皇更に常濟大師と加溢せらる。高祖大師祖道を傳東せしより曆を閱すること僅かに六十餘年。宗風未だ振はず法燈猶ほ微なり。此の時に當り太祖大師迹を越州に垂れ發心群を拔き修行倫を絕し、頂天立地佛祖の法藏を打開し、頭正尾正向上の鉗鎚を拈弄し、道香紫闕に薰じ德雲率土を覆ひ、輪下の龍象群を成し隊を成し、座邊の緇白麻の如く粟の如く、桂子蘭孫隨處に繁興し、遂に宗門今日の嘉運を見るに至れり。其の盛德慈恩日月よりも明らかに海嶽よりも大なり。我が太祖の出現を見奉ることは西天に龍樹